
猫さんの瞳に魅せられて

猫村銀杏（ねこむらいちょう）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫さんの瞳に魅せられて

【Nコード】

N0132DH

【作者名】

猫村銀杏ねむらぎんぎょう

【あらすじ】

普通の大学生の主人公シキ。

特別な個性のないと思っているシキだが、人から見ればシキは大きな猫さん好き、それを越えた猫キチである。

シキは、飼い猫のクリーム、トラと平穏な日々を過ごしていたが、猫さん達のある秘密を知ったことで、彼の日常はがらりと変わっていくことになる……。

第一章 ごんじやちわー（前書き）

2016/5/5 表示乱れていたなので微修正しました。

第一章 こんにちはわー

第一章 こんにちはわー

「こんにちはわー」

近所の学校帰りの女の子が明るい声で元気いっぱいにあいさつしてきた。真夏の灼熱の太陽が照りつけているというのに、子どもは元気だ。しかも照れっぼさなど一切なく、盛大に囁んでしまっている

「こんにちは」

シキは思わず笑うのをこらえながら、元気な声で返した。

シキは、普通の大学生。

午後の授業が休講になって、午前中で学校の終わったシキは、ハイテンションで家路についた。ところが、家につく一歩手前で自転車がパンクしてしまい、重い荷物を押しながら帰るなんとモテンションが下がる帰路になってしまった。おかげで、丸ごと午後が休みである解放感も台無しになり、シキは家の前のガレージで自転車のタイヤをいじっている。

シキは物をいじるのが好きで暇を見つけては、何かを作ったり修理したりしていたので、こういう午後も悪くないと思っていたし、そのおかげでこうして近所の人と交友が深められるわけである。

ただ、問題があるとすればちょっと暑すぎるということである。

せっかく屋根付きのガレージがあるのに、わざわざ太陽光が爛々と降り注ぐ場所で汗だくになりながら作業する必要もないだろうに。シキは太陽大好きなのかそんな場所で作業していた。

シキに挨拶をしてきた女の子は、近所に住むナツミちゃんという子だ。ナツミは浮き足だったステップを踏みながらシキの目前にまっすぐ近づいていくと、

「にゃんにゃんよく寝ているねえ？ お昼寝中でぐっすりかにゃあ

「？」

ナツミはシキの目前を通り過ぎて、ガレージの車の下をのぞく。ナツミの話し相手は、シキの家の飼い猫さん。クリームと名付けられた白猫さんはぐっすりと車の下で寝ていた。

クリームは全身を真っ白な毛で覆われた雑種の猫さんである。

小さな頃は頭の上とかに黒い毛がいくらか生えていたので、シキは、パンダと名付けようとしたのだが、猫愛好家の大先輩である母に反対されて、結局、白という色から連想してクリームという名前になった。

成長したら黒ぶちは見当たらず、全身純白な見た目には優雅な猫さんになったので、パンダなんて名前にしなくてよかったと、今では母に負けずとも劣らない猫愛好家になったシキは思う。

もしかしたら、世にも珍しい、可愛らしい、黒い模様のないパンダになれたかもしれないと考えると、必死にパンダを繁殖しているどこその動物園から羨ましがられたかもしれない、そんな妄想をすると少し残念な気もする。

クリームが一番のチャームポイントは、その瞳。

クリームの瞳は、左の瞳が黄色、右の瞳が青色で俗に金目銀目と言われるオッドアイだ。その水晶のような輝きとアシンメトリーの神秘的な美しさもあって、一目で視線が吸い込まれて魅了されてしまう破壊力があつた。

クリームなんて可愛らしい名前をもらい、見た目にも上品さを感じる白猫さんであるが、性格はなかなかアグレッシブで、わがままで、おてんばだ。ただ、白猫さんというのは他の猫さんに比べると結構気性が荒いらしい。白というのは自然界にはあまりない色で目立つので、他の色をしている猫さんより外敵に狙われやすく、そのため攻撃的になりやすいようだ。

でも、せっかく飼い猫さんになったのだし、もう少しでれてくれないのではないか。という願望は、シキのわがままだろうか。

ナツミはしゃがみこんで手を出し、クリームの気を引こうとして

いたが、クリームは我関せずという雰囲気、身じろぎひとつせず眠っていた。

「今日はいつも以上にぐっすり寝ているねえ。かわいい。お休みの邪魔しちゃったかな？」

「最近、車の下がお気に入りですごくそこで爆睡しているんだ。また、クリームの気の向いたときに遊んであげてよ。ナツミちゃん」

「そうにやんだあ。残念。でも、クリームがおねむならしょうがないね。またくるね」

ナツミは駆け足で家まで帰って行った。と言っても家は隣なのですぐなのだけ。子どもの元気のよさといったら、汗だらだらでこんな立ち話でも休憩になったなあと思うシキとは、雲泥の差である。シキがなぜこんな暑い中、涼しいガレージの中で作業しないのかというところもこれも全部クリームのせいである。ガレージは車が占拠しているとはいえ、車一台を考慮にいれても十分なスペースがあり、日陰で作業をする場所を作ることできる。

しかし、現在車はガレージのど真ん中に居座っており、シキが作業を始めようとした時には、すでにクリームは車の下でのんびりと気持ちよさそうに寝ていた。車を動かす、すなわち、猫さんの眠りを妨げてまで、シキは日陰を作る気にはなれず、わざわざ真夏の太陽と一騎打ちを仕掛けたわけである。猫さんに比べれば太陽なんてお茶の子さいさいである。シキは精神論によって、日向で作業する効率の悪さをぶつとばしたわけだ。

要するに、クリームのせいというのは建前で、シキはただの猫キチガイ、猫キチなのだ。

暑いのがネックではあったが、自転車のパンク修理くらいなら手慣れたものであるシキは、愛車のパンク修理を終えると、自転車をモトのガレージのすみっこに置き一息ついた。

「ふう、疲れた」

久しぶりの日陰で汗だくのシキは少し涼んだ後、何を考えている

のか突然うつぶせになると車の下を覗きこみ始めた。その目的はもちろんクリームである。

シキが作業を始める前と全く同じ場所で、クリームは我が物顔で熟睡していた。その愛くるしい姿はシキの疲れを吹き飛ばすものであり、体中に出ていた汗も一瞬で吹き飛ぶ癒しの姿であった。シキはあまりのクリームのかわいさに顔をほころばせると、クリームにちよっかいをかけ始めた。

「クリーム！」

シキは、普段と比べて二オクターブくらいは高い声で愛猫さんの名前を笑顔で呼びかける。既に完全にメロメロ状態である。クリームのほうは、シキに呼びかけられても何の反応もない。かの有名なスフィンクスのポーズでぐっすりと寝ているクリームは「我関せず」と、ご主人様を気にせずどっしりと構えている。シキは好きな女の子にはちよっかいをかけたくなるあの感覚で、余計にクリームにいたずらをしたくなった。

「クリーム、クリちゃん、くう・う・たん、にや・にや・にや
んこお！」

シキのクリームの呼び方のレパートリーはゆうに千を超える。シキ自身もその総数を把握しておらず、気分によって新名も作り出す。今も気分に応じて、シキの脳がその状況に適した名前を、自分の頭にある辞書から取り出しいろんな名前を連呼していた。

ちなみに、「くう・う・たん」という呼び方には「くう　う　たん　「や、くう　う　たん」などと複数のイントネーションも存在するらしいが、こうなるともう他人からは何がなんだかかわからない。シキにこれを問いただしてみれば、「虫」と「無視」くらい違うとか返してきそうだが、完全に意味不明である。

シキはクリームの名前を呼びながら、適当に首元を撫で回したり、耳元をかいてみたりしてあげる。クリームはシキの手に合わせてぴくぴくと顔を動かし、なんともものんびりとしながらも、シキが名前を呼ぶのに合わせて尻尾を振っていた。

クリームはシキの呼びかけに応じて何か反応を示すということがほとんどない猫さんに見えるが、唯一尻尾だけは、それが寝ているときであっても名前を呼ぶたびに、きつちりと反応してくれる。その尻尾の揺さぶりには、シキの心も揺さぶられる。

猫さんは人間のように熟睡することはなく、ぐっすり寝ているように見えても、体はすぐ反応できる半覚醒状態らしい。そういう体質だからあんなによく寝るのだろう。

なんにせよ、寝ているときでも些細なコミュニケーションがとれるというのは、シキにとってはうれしいものだった。クリーム全く微動だにしないように見えて、尻尾だけは本心を隠せないのだろうとシキは妄想している。

シキは車の下に寝そべりながら、千を超えるボキャブラリーの中でも厳選された名前をこれでもかと思つて、クリームとの時間を存分に堪能して家の中に戻ることにした。

「クリームは戻らない？」

最後にクリームを振り返りながらシキは聞いたが、クリームは尻尾を振るだけで振り向きもしなかった。クリームはまだしばらくそこで寝ていたい気分らしい。

「お疲れ様、シキ。自転車は直つた？」

シキが居間に行くと、シキの母親のシズカは夕飯の準備をしていた。

「ただのパンク修理だから簡単だよ。すぐ直つたよ」

シキは無愛想に答えた。

「あら、さすがだね。でもずいぶん汗かいたみたいね。何か冷たいものでも用意しようか」

「そうだね。なんかちようだい」

シズカは機械に弱く、ものが壊れることがあると、シキは頼まれてよく修理しているので、シズカの反応もあっけからんとしたものだった。

「クリームはまだ外にいるの？」

「車の下で寝ているよ。最近はおそこがお気に入りみたい」

「そう相変わらずのお転婆ね」

なにをかくそうこのシズカこそシキをも超える猫キチの一人で、シキを猫キチに引きずりこんだ張本人である。シキが聞くところによると、シキのおじいさんは大の猫キチで、常に猫さんを飼っていたらしく、その影響でシズカも猫キチになったらしい。猫キチの血筋はしっかりとシキまで受け継がれているようだった。

シキが飲み物を待つのにソファに座ると、家で飼っているもう一匹の猫さんが、テレビの上からのっそりと立ち上がる。

この子の名前はトラという。名前の通りトラ猫さんのトラは、名前こそ威厳たっぷりで風格までありそうだ。しかし、実際はその名前に似合わず、トラはなんとも飼い猫さんらしい猫さんで、その仕草は上品を通り越して神格性すら垣間見えるほどだ。

トラは近所の野良猫さんだったのだが、その愛くるしい姿と人懐っこい性格で、易々とシキの母を虜にしまいいつの間にかシキの家の飼い猫さんになっていた。黒っぽい柄をしたトラ猫で緑の瞳が美しい。

近所の人シキに「かわいいですねえ、アメシヨですか？」と、聞いてきたことがあるが、アメリカンショートヘアとかいう長ったらしい名をもつ大それた猫さんではなく、トラはただの雑種である。その大した処世術をもって野良猫さんの時代から、近所のいろんな家からエサをもらい、まるまると太った体をしているトラは、テレビの上からドスツと音を立ててフローリングの床に降りると、のしのと歩き始め、次のお気に入り寝床に標的を定めた。絶対に逃れられない獲物の狩りをじっくり楽しむように、堂々と一直線にシキの足元へ向かって歩いていく。

トラはソファの下で止まると、値踏みするかのようにシキを見上げる。その可愛すぎる目線にシキは金縛りになったようにトラのベッドと化してしまう。理想の寝床を確認したトラは、身を縮め跳躍

に備えると、ピヨンとシキの膝の上にダイブした。

一瞬、ずっしりとシキに重みがかかる。しかし、それはすぐに太ももをちようどよく刺激してくれるマツサージ機になり、シキを優しい気持ちにさせる。

トラはベッドの特に寝やすい部分を探して少しうろついて、お気に入りの場所を見つけるとすぐに丸くなった。この人間様の都合など気にしないふてぶてしさは、もはや図々しいといえるものであったが、完全に人がどうすれば自分の思い通りになるのか把握しているこの猫さんに、シキは完全に支配されていた。

シキがトラの首元をなであげると、トラはなんとも気持ちよさそうに目をつむりながら、それに応じてくれた。右耳をなであげれば右にゆらり、左耳をなであげれば左にゆらり、トラはシキが触りやすいように首を動かしてくれる。クリームが尻尾だけでやっていた甘える攻撃をトラは全身で使ってくる。

シキが今度はお腹のほうを触ると、トラは身をよじる。さらに激しくお腹のほうをいじると、トラは仰向けにひっくり返って体をうねうねさせる。見方によっては、これはトラが嫌がっているように見えるかもしれないが、この猫さんは人が喜ぶあざとさというのを計算ずくでやっているように見えるからすごい。

そんなこなしている、シズカがジュースと自家製のクッキーを持ってきた。シズカは料理が得意でお菓子もよく作る。

「はい、どうぞ」

シズカは、自分もシキの横に座って紅茶の準備を始めた。すぐく楽しそうにおやつの準備をしてくれたが、母曰く料理は自分がおいしく食べるのが一番というモットーらしく、こういう時うかうかしていたらシキが食べる分のクッキーなどなくなってしまふことさえあった。普通、こういうものは息子に多く食べさせるようなものだと思うのだが、この母にそんな先入観を持っていたらシキは飢えてしまふ。もしかしたら、こういう奪い合いを強いることで競争心を煽ろうとする教育方針なのかもしれない。いらぬ妄想をシキがして

いる間に、クッキーは五枚ほどシズカの胃袋に収まっていた。

「うん、今日のクッキーも上出来ね。シキも早く食べたなら」

シズカは口をもごもごさせながら、シキを急かした。

「人が一作業終わってゆっくりしているのに、のんびり食べさせようという気はないの？」

シキはジュースを一気にコップの半分ほどを飲んで、コップを置くと、やっとクッキーに手を伸ばした。

一口食べると、サクツとした食感と共に口の中に甘い香りが広がる。いつも通り絶品だ。

「あら、でもおいしそうな顔で食べるじゃない。人間食欲が一番。どんな時でも食べられるものよ。それに、もう外で十分涼んできたんじゃないの？クリームと一緒に」

「見ていたの？」

シキがちよつとびっくりしたように聞いた。

「いえいえ、あなたの行動なんてお見通しよ。猫煩惱の先輩をなめるんじゃない。まあ、私の場合は子煩惱でもあるしね」

こんな風に見透かされたような言い方をされると、シキはこそばゆくなるのを感じた。

「トラもクッキー食べる？」

シズカは猫なで声で、クッキーをトラの前に差し出した。トラはクッキーをくんくんと匂いはしたが、どうやら好みではなかったらしくすぐに興味を失った。

「あら残念。おいしいのに」

トラがクッキーを食べようとする気がないのを確認すると、シズカはそのままクッキーを自分の口に運んだ。

「じゃあ、後は残しといてあげるから適当に食べといてね」

シズカはそう言って家事に戻った。これだからこの母親は分からない。こつやつて譲ってくれる時もあるのだが、シキの分も強奪しかなない勢いで独り占めしようとすることもある。

要するに気まぐれで猫さんっぱいのだ。こんな人だから猫煩惱に

もなるのだらう。シキはシズカに言われた通りゆつくりとクッキーを食べ始めた。

猫さんを太ももに乗せながら、昼下がりの優雅なティータイム。なんとという贅沢だらうか。

シキはクッキーを食べながらも片手でトラの毛繕いをしてあげていたが、トラはなんとも気持ちよさそうだった。

一通りトラといちゃいちゃして満足したシキがトラをいじるのをやめると、トラもシキの太ももの上で、体をだらっーと伸ばした左半身を上にした体勢で眠り始めた。この人を魅了される魔性と凶太さがトラの持ち味である。

文章だけ見ていると、猫さんといっしょにイチャイチャしてうらやましいと思うかもしれないが、これがなかなかにつらい修行のよくなものだ。四キロ程ある重石を同じ場所に寄せ続けるのだ。最初は気持ちよくても、段々とずしりとくる。

まだ猫さんは眠り始めたばかり、シキの忍耐も始まったばかりなのだ。

石の上にも三年。

猫さんが膝の上にも三年。

トラが膝の上からどいてくれないので、結局、シキは小一時間ほどリビングで過ごした。

猫を膝の上に乗せてのんびりしていると、時間などあつという間に立ってしまうから恐ろしい。自転車を修理していたときには爛々としていた陽もすっかり落ちて、外はきれいな夕焼けになっていた。しっかりと膝の上で爆睡したトラは満足したらしくリビングから外に出られるようにシキが作った猫専用の出入り口を使って、外に出て行った。

シキは立とうとするも、体が言うことを聞かず立ち上がらない。

体勢を変えたシキの全身に止まっていた血液が行き渡るのを感じる。なんとか立ち上がったシキは、夕飯まで時間があるので、シキは

二階の自分の部屋でゲームでもしようとしてリビングを出た。

シキが部屋を出て何に導かれたのか、風呂場に行くと、クリームが風呂の蓋の上にスフィンクス座りをしていた。

スフィンクス座りとは、猫さんがかの有名なエジプトの像と全く同じ格好で座っている状態である。猫さんが休憩しているが特に眠くもないときに、目を開けてじーっとしながらこの座り方をする。その姿はとてもかわいい。たまにスフィンクス座りのままでうつろうつろしている時もあるが、その時はさらにかわいい。

もちろんなんの当てもなくシキは風呂場に行ったわけではない。シキくらいの猫キチになると、自分の飼い猫さんがいそうな場所くらい確認していなくても当たりがつくのである。

風呂場の出入り口と外への窓は、シキ達が風呂を使っていない時でも、猫さん一匹が通れるくらいの隙間を開けて自由に出入りできるようにしていたので、リビングだけでなくこちらの通り道も猫さんは好んで使う。元々は、簡単に開けられるこっちの道だけが猫さんの外への玄関口だったのだが、開けっ放しもよくないということで、シキはリビングに猫さんしか出入りできない専用の通用門を作ったあげた。

人用の出入り口は基本、玄関一つしかないのに、猫さん用の出入り口は猫キチならではの猫さんへのVIP待遇だ。

クリームは、シキが風呂場に入ってきたのに気づくと、大きなあくびをしてのっそりと立ち上がる。そして前足を前方に大きく伸ばして、お尻をあげて頭を下げて体をグーツと伸ばす。グググーツとして、今度は頭を上げると後ろ足の方をグーツと伸ばす。

シキはこの一連の動作が大好きで、これを猫ストレッチと呼んでいた。

猫ストレッチは、動いていなかった体に血を流して全身を活性化させるための猫さんの体操。トラは普段からのんびり屋さんで体をそんなに動かさないせいかな、この体操はあまりしないのだが、クリー

ムは睡眠のあとには必ずこの体操をする。ここらへんは二匹の行動性の違いだろう。

クリームは、先ほどトラがテレビ台の上からドスツと降りたのは対照的に、スタッと軽やかに風呂蓋から降りると、シキの足元を通り抜けて廊下のほうにでる。

シキが廊下にでて階段のほうに向かうと、クリームもそれについてくる。シキは階段の下で立ち止まると、クリームもそこで立ち止まった。

二階への階段は十五段ある。シキはゆっくりと階段を上りながら、後ろをちらりちらりと振り返る。十二段目で、シキは完全に足を止めると、ジーツと階段の下でこちらを覗いているクリームのほうを見る。

二人、いや一人と一匹の間に不思議な緊張感と静寂が走る。

一体、何が始まるというのだろうか？

二、三秒ほどその体勢でシキが待っていると、何がきっかけになったのか虚をつくようなタイミングでクリームは突然、階段を上り始めた。シキの倍ある足を巧みに使い、もの凄い勢いで階段を昇ってくる。

シキもクリームが動いたのを見て、慌てて階段を上り始める。シキはクリームを振り返っている間も足に力を溜めていた。

だが、クリームはシキがその動きを始めるまでに、すでに三段程階段を上っていた。

シキもクリームから目を外して、全力で足を動かす。シキには足を階段から離す動作、足を地面につける動作、全ての動作がクリームに比べるともどかしく感じられて仕方がない。

ようやくシキは最後の段へと足を動かしたが、シキが最後の段に足をかける寸前に、クリームは尻尾をなびかせながらシキの足元を軽やかに駆け抜けていった。

シキは足元を風が通りすぎるのを感じるだけだった。クリームの両足が二階に付くのにワンテンポ遅れて、シキの右足がつく。

シキはこの競争に真剣に臨んだのだが、クリームはそんなことはすでに興味がなくなったらしく、シキの部屋の扉の前でじっとお座りのポーズをして「早く開ける」と目と態度で語っていた。

この階段競争はシキとクリームの日課だったが、十二段のハンデを貰ってもシキがクリームに勝てたことはない。十三段のハンデがあればシキにも勝ち目はあるのだが、最近はずっと十二段のハンデでシキは戦っている。

この戦いに勝つのはシキの壮大な夢の一つだ。

八十メートルのハンデがあれば、百メートル走でオリンピックの金メダリストにも勝つのも楽勝だろうに、これだけのハンデを物ともしない猫さんの身体能力は恐ろしい。

シキが自分の部屋の扉を開けると、クリームも待っていましたとばかりに部屋に飛び込み、うろろろし始める。部屋に入ると寝床を探すときであれ、遊びに来たときであれ、まずは適当に動き回るのがクリームだ。クリームはまだどうするかは決めておらず、気に入った場所が決まれば、そのあとの行動も追々考えようという感じだろう。

シキは遊んでいるクリームを放っておいて机に座った。

無論、クリームのためにベランダに出られる窓は開けておいたが、こんなうだるように暑い日でもそんなのは日常の決まりきった動作、トイレや歯磨きのようなものなので、そもそもクリームのためにとこうこうという意識は、シキにはない。

かくいうクリームは、真夏でもたまにベランダのへりから下界を見渡しているときもあり、適当に日陰を見つけては寝転がっていることもあり、ベランダを満喫しているようだ。

猫さんの体一つ分隙間を開けているので、気が向いたらクリームは出ていくだろう。その代わり冷房は効かなくなってしまうので、扇風機でこの暑さをしのぐことになる。

シキがクリームを放っておいて、ゲームを始めてから数分経った

後、

「にゃー」

シキの足元に、いつの間にかやってきていたクリームが鳴いてきた。普通の人なら何かをねだっているらしいと気づく程度だが、シキにはクリームがどうして 欲しいのか容易に察しがついた。

「なあに？ クリーム、お膝に乗りたいの？」

クリームは一声にゃーと鳴いたきり、足元でじっと座りながらシキを見上げている。

その綺麗なオッドアイと目が合ったシキは、あまりのかわいらしさで悶えそうになった。シキはもうちょっとクリームと見つめあっていた気持ちもあったが、あまりクリームをじらしてもかわいそうだ。というか、シキが我慢できなかつた。

「わかつたよ。おいで」

シキが飛び乗りやすいように姿勢を整えて、膝をトントンとするとクリームは勢いよく飛び乗ってきた。先程、トラが乗ってきた時はずしりときたが、クリームは実に軽やかにシキの太ももに乗ってきた。クリームはそのままシキの胸の方に上体を上げて、肉球を使ってシキをもみもみしてくる。

シキはクリームに爪を少したてられて痛かったが、そんなことより気持ちよさがはるかに上回る。

もみもみもみもみ……

クリームの肉球を押し付けられる至福の一時はさらに続く。

クリームは上体をさらに上げ、二本足で立つ体勢をとる。

「ダメだよお」

顔のほうまで、もみもみ攻撃が来たせいでシキは思わず声をあげる。ダメと言いながらも、全く悪いとは思っておらず、声にはまるで覇気がこもっていない。

クリームはシキの太ももを念入りにもみもみすると、そのまま丸くなった。どうやら今日は座っているシキの膝で眠ることに決めたらしい。

夏の昼下がりに猫さんを膝に眠らせながらのゲーム。
贅沢の極みである。

丸くなったクリームはすぐにすやすやと眠り始めたようだ。シキはクリームの背中をなでなでしてやって、ゲームをやり始めた。

シキはゲームに没頭している間に、いつのまにかすっかり日も暮れていった。

「はあ。今日はこれで終わるか」

シキは縮こまっていた体を伸ばそうと大きく伸びをしたが、太ももにクリームが寝ていることを忘れていた。

「にゃ！」

びっくりしたように起き上がったクリームは、シキに爪を立てて襲い掛かってくる。クリームは従順で動かない寝床が好きなので、シキがゲームに夢中になって上の空になったことで、小刻みにシキが動くから機嫌が悪かったのだ。

そしてシキが伸びの態勢をとったのが留めとなる。

クリームは寝ている態勢を維持できなくなり、動くベッドとかいうゴミ同然の寝具となったシキはその主から痛いクレームをもらうことになった。クリームはシキから飛び降りるとそのまま部屋から出て行く。普通の人間ならこんなことされたら猫さんを叱るところだろうが、シキはクリームに逃げられてしまったことが、ただただ残念だった。

シキには階段競争でクリームに勝つ以外に、もう一つ夢があった。それは、クリームと一緒にベッドの中で寝ることなのだがこれがなかなかうまくいかない。

トラならむしろあっちからすり寄ってきて、布団に入ってくることもあるくらいで一緒に寝るくらい朝飯前なのに、クリームにはベッドの上で寝られることはあっても、ベッドの中で寝てくれたことは一度もない。ベッドの中に無理に入れることはあるが、少しじつとしていことはあってもベッドの中で眠ってくれることは決して

なかった。

こんな調子では、クリームとベッドと一緒に寝られるのはいつになるのだろうか。シキは思うのであった。

シキは、そろそろ夕飯もできているだろうとリビングに戻ることにする。

シキがリビングに入るとうなぎを焼くいい匂いが部屋いっぱい漂っていた。シズカの料理の準備も終盤らしい。

しかし、うなぎとなるとクリームとトラは黙っていないだろう。

普段の食事でも猫さんのごはんの催促は面白いものがあるが、それが大好物の魚になると面白いを通り越して、なかなかスリリングなバトルになってしまう。

リビングにずっといたトラはすでに臨戦態勢を整えているようだ。食卓とは離れたテレビの上でじつと様子をうかがっている。

テレビの上の猫さん用の台はシキが作ってあげたものだ。シキの家も世の流れに逆らえず、数年前にテレビをブラウン管から液晶ディスプレイに買い替えた。

元々、暖かいテレビの上は猫さんのとびつきりのお気に入り場所の一つで、クリームとトラはいつも場所争いをしていて、テレビの上でのんびりしている猫さんを見るのがシキは好きだった。見たい番組をやっているのに、猫さんが尻尾を垂らしているときも、どんなにシキが見たい番組より、その猫さんの姿はシキが見たいものだったので笑って許せた。

だから液晶テレビに買い替える時、シキは結構残念な持ちになった。ネットで液晶テレビと猫さんで検索してみると、あんなに薄いのに、まだテレビの上を寝床にしている猫さんの画像がたくさんあり、もしかしたらうちの猫さんも居ついてくれるのではないかと期待した。実際、何日間か液晶テレビはそのまま置いて猫さんがどうするかの様子を見ていたのだが、一向に液晶テレビでどうこうしそうな気配はなかった。

シキが試しに液晶テレビの上に猫さんを置いてみても、すぐに逃げてしまい、どうやって液晶テレビの上の猫さんの画像はとられたのだろうと不思議に思うほどだった。

結局、猫さんの遊び場が少しでも増えればいいなあということ、液晶テレビの上に猫が乗れる台をシキが作ってあげた。ついでに簡単な物置にもなる便利なやつだ。以前のテレビの上のように暖かくはならないので、それほど気に入る場所ではなかったようだが、それでもよく居ついてくれる場所になってくれたので作った者の冥利につきる。ただ少し高く作りすぎたらしく、猫さんが登るのにたまに苦労している様は見えていて面白い。

猫さんにとって、その台の上の場所は部屋を見渡すには絶好の位置である。いくら魚が好きでも焼いている途中では猫さんには食べられない。それに当然、シキやシズカの目もある。

それでまずは、一番いい場所から戦況分析をしているという訳だ。地味に見えるがこの遠距離攻撃が、後々ジャブのように効いてくる。「あと、五分くらいで準備終わるからもうちょっと待っていてね。

トラもクリームも」

シズカは料理の準備をしながら、猫さん達に呼びかける。なぜか息子であるシキの名前が抜けていた気がするがたぶん気のせいだろう。

いつの間にか、うなぎの匂いに釣られたクリームもリビングに入ってきていた。クリームはテーブルの上にジャンプして、キッチンカウンターに陣取ると料理中のシズカのほうを凝視しはじめた。トラとは違うアプローチだがあれもエサをもらうための作戦だ。

トラは変則的な遠距離タイプのアタッカーだ。遠目にただじっと座ってこっちを見ているだけだが、あの遠距離攻撃が後々ジャブのように効いてくる。うなぎは安泰であるはずなのに、突如やられてしまう恐ろしい攻撃だ。

クリームは純粋な近距離のインファイターだ。直接的な攻撃をこれでもかと連続で叩き込んでくる。にゃーという鳴き声で相手を弱

らせ獲物をせしめる時があれば、適当にちよつかいをかけてくることもあり、それでも獲物が落とせないとおねだりにありとあらゆる手を使ってくる。時には強奪という手段まで使えるオールラウンダーでもある。その攻撃力は凄まじく、家の中にこの攻撃に耐えきれぬ人間はいない。

「シキ、もうちよつとで出来るからクリームと遊んでいてくれる？」
料理中で手が放せないシズカがシキにクリームの様子見を任せた。
「いいよ。分かった」

クリームのインファイトは時として、料理中のシズカや食事にも襲いかかることがある。せつかくのうなぎが台無しになつてはシキの胃袋が悲鳴をあげてしまう。というのはただの建て前で、こういう時のクリームは遊んでいて楽しいので、シキはクリームと遊んであげることにした。

「邪魔しちゃだめだよ。クリーム。もうちよつと待っていていよう」
シキは、カウンターテーブルでまだじつとうなぎを見ていたクリームの脇をつかむと、ひょいと持ち上げてソファまで連れて行った。クリームは普段なら手を近づけるだけで露骨に警戒の色を示すのだが、好物を狙っているときなど、他のものに興味が注がれている時は容易に捕まえることができ、わりと従順にシキに従う。

「うなぎとなると二匹とも目の色が違うね。もう少して手を出してきそつだったよ」

シズカが台所から話しかけてきた。シキはソファに座るとクリームを膝に乗せてグルーミングを始めた。

「うなぎなんて珍しいじゃない。クリーム達のはしゃいじゃってもしょうがないよ」

土曜の丑の日もまだきていないのに、随分と奮発する。何か嬉しいことでもあったのだろうか？

「いいや。特に何も無いよ。ただの気分よ。何か他に食べたいものでもあった？」

こんなところだろうとシキも思っていた。食べたいものを食べた

いときに食べる、いかにも自由奔放なシズカらしかった。うなぎの匂いをリビング中に漂わせておいて、今更メニューを変えられるわけもない。どっちにしてもシキはうなぎを大好きだったのでメニューに文句もない。

「いいよ。全然。母さんの好きにして」

「とびっきりの国産うなぎだしシキも満足するはずよ」

シズカはこのように度々、もう後戻りできない状態になってから事後承諾をとるということをよくやった。自分勝手にやっておきながら結局、自然な流れにしてしまうから恐ろしい。

「国産かあ！楽しみだね」

シキはシズカに適当に同調しておいた。とはいえ、本当に楽しみだったので、クリームへのグルーミングにも力がはいった。シキがクリームの首元をなでなでしてやると、クリームは気持ちよさそうにそれに応じた。

「クーたんもうなぎ楽しみなの？」

シキがしゃべりかけるが、クリームの返事はもちろんなく、ただシキの操る手に合わせてのどをゴロゴロと鳴いている。シキはクリームの首もと以外にも、お耳の周りや、お腹など体全体を撫で回してあげたが、その全てにクリームは快く応じた。普段ならここまで大人しく従うことはないから、何をしてでもうなぎが欲しいらしい。「にゃー」

シキが手を離して、膝の上から降ろしてあげても、クリームはシキに甘える体勢をとる。シキの膝の上から降ろしてあげても、クリームはソファの横で仰向けになって寝っ転がり始めた。あまりの可愛さに再びシキが手をクリームの方に向けると、その動きに合わせてクリームは右に左にコロコロと転がり始める。これが見るもの全てを虜にするデスロールだ。

クリームは警戒なりズムで右半身を上にしたたり、左半身を上にしたたり、それに合わせて多彩に手足を伸ばす。シキの手の動きに合わせて、こっちのしてほしいことを読み取ったかのように回るクリー

ムは、下手したら人を殺しかねない可愛さがある。デスロールの名前の由来がこれだ。ワニが獲物を確実に仕留めるために、獲物をくわえたまま回転して水中に引きずり込むことをデスロールというらしいが、殺傷力からして似たようなものだ。

「クリームも随分と興奮しているみたいね」

シズカは焼きあがったうな重と準備した付け合わせをテーブルに準備しながら、シキとクリームの様子を見て笑う。

「うなぎとなると目の色も態度も違うね」

「そうね。みんな喜んでみるみたいで、さすが私のおかげね」

シズカは自画自賛した。絶対に自分が食べたいということしか考えていないのによく言ったものだ。

「さて、出来たから食べましょう。シキも猫さんとじゃれていないで早く来なさい」

シキはクリームとじゃれあっていた手を止めてうな重が用意されたテーブルへと向かう。

シキの動きに合わせて同時にクリームと、どっしりとテレビの上で座っていたトラまでも立ち上がり、シキと一緒にテーブルのほうへやってきた。

トラはテーブルのそばのソファの背もたれに飛び乗ると、そこで座ってシキをじっと見つめ始める。トラはここまで、テレビの上から三メートル以上離れた遠距離攻撃に徹してきたが、ここにきて獲物まで一メートル程度の位置での中距離攻撃に切り替えてきた。それでも直接的な攻撃はしかけてこないが、じわりじわりと弱らせてきた相手をついに仕留めようとしているようだ。

クリームはテーブルの下のシキとシズカの席の下をうろろろしながら猫撫で声で鳴いている。

さすがに国産うなぎだけあって部屋中に漂っている匂いからして違う。猫さんほどには食い意地のはっていないシキですら、匂いとシズカの盛り付けたうな重の見た目だけで口の中によだれが溜まっていくのを感じた。

「はい、じゃあいいただきます」

「いただきます」

シズカの音頭に合わせてシキも食事のあいさつを済ませて、早速うな重に食いつく。その間もトラに燃やされかねないような焼ける視線と、下からは爪をちゃんと引っ込めたみだれひっかき攻撃と鳴き声攻撃が続いたが、さすがに一口目から音をあげるわけにはいかない。

シキが一気にかき入れた一口は、うなぎと味のしみ込んだほかほかのご飯とアクセントの卵焼きのハーモニーで、互いに互いを引き立てあう絶妙の味わいを引き出しとても旨かった。

シキ達が食べるのを見て、さらに二匹の攻撃が強くなったが、その攻撃ですらこの瞬間だけはシキの食欲に勝つことはできない。シキはうな重に乗った三枚の切り身のうち、一枚を食べ終わるまで黙々と食べた。シズカも同じように黙々と食べた。シズカの食べている時の表情は、猫さんと遊んでいるときと同じくらい幸せそうに見えた。うなぎを準備した本人だし当然だろう。

「どう美味しい？」

シズカは一旦、箸を止めてシキに聞いた。

「すごくおいしいよ。さすがに国産うなぎだね」

シキも箸を止めて答えた。恥ずかしすぎて決して口には出せないが、おいしい理由はうなぎが国産であるからだけではなく、シズカの料理の腕のおかげでもあった。あまりのおいしさにうな重の三分の一をあっという間に胃袋に納めてしまった。

だが、この残ったうな重の見た目には明らかに違和感があった。シキのうな重にうなぎは二切れ残っているのだが、二つの色合いは全く違う。一切れはタレが適当にかかって味が上手くついた見た目をしていた。

しかし、もう一方は色合いが異常に薄く明らかに焼いただけという感じだった。これはうなぎのそのままの味を楽しんでほしいというシズカの計らいでは断じてない。二人が一切れのうなぎを食べ終

わったのを合図に、クリームとトラは第六感で何かを察知したのか、今までで最高潮の視線とおねだり攻撃を繰り出してきた。

これは、シズカが猫さんのために準備した二切れだ。二切れのうちのもう一切れをシキは確認したわけではないが、間違いなくシズカの器の中にある。

シキは自分の分のうなぎを適当な大きさに切ってやると、まずはソファの背もたれの上でじっと待つトラの前に置こうとする。

トラの首は今か今かと待ちわびて伸びている。猫さんの首なんて普段は意識しないほど短いのに、はつきりと首が区別できるほどだ。

シキが手を伸ばすと、じっとしていたトラの右手が突如動く。事前にその動きを察知していたシキはその動きに合わせて手を引つ込めた。ここまで遠距離攻撃に徹して直接的な攻撃は全く仕掛けてこなかったトラだが、ここにきて一気に獲物を仕留めにきた。ここまできたらすすがのトラも我慢できないように、射程圏内から離れた獲物をみて、恨めしそうな視線をみせる。

「トラ、ちゃんこ」

シキがトラに命ずると、トラはソファの背もたれの上でお座りの姿勢をとる。なかなかシニールな光景だ。その様子を見ているのも面白いとシキは思ったが、あんまり待たせてもかわいそうなのでうなぎを足元に置いてやると。トラの目線がうなぎに注がれる。シキがさっきまで注がれていた視線がうなぎに向いているのだとしたらうなぎは焦げてしまつかもしれない。

「よし」

シキが命令すると、一気にトラはうなぎにかじりついた。その勢いはさっきのシキ達の一口目にも劣らないトラの素晴らしい食べっぷりに、シキは顔がにんまりとするのを抑えられない。猫さんにも味の違いがわかるらしく、いつも以上にむしゃむしゃとトラはうなぎにかぶりつく。テーブルの下でシキとシズカの間を右往左往しながら近距離攻撃を繰り返していたクリームも、シキがトラにうなぎをあげたことに気づいて、ソファの下からトラにちょっかいをかけ

始めた。

「クリーム、お前の分もちゃんとあるから、イタズラしちやダメだよ」

シキは立ち上がっているクリームの鼻の頭の上に手を掲げて、クリームのイタズラを止めさせた。クリームは大人しくトラへのイタズラをやめるが、さらにシキへの催促は強くなり、ニャーニャーと鳴く。

「残念。今日はシキのほうに二匹とも行っちゃうの？」

シズカも一切れのうなぎを猫さんの為に準備していたのに、自分のほうに猫さんがよってこなくて残念そうだった。とはいえシズカにとっても優先事項は猫さんのほうだったため、その切れ端を自分のような重からとり、シキのうな重の上に乗せる。

「はい、どうぞ。クリームにもあげちゃって」

そう言つと、シズカは残りのうな重と付け合わせのほうを食べ始めた。

「クリームもちよっと待ってね」

シキはもらった一切れをクリームにも食べやすいように切つてあげる。クリームはシキの行動や雰囲気からうなぎがもらえることを察しているようで、さらなるおねだり攻撃がシキに襲いかかる。クリームは、シキの膝に向かって後ろ足で立っておりシキを妨害するような形になった。相変わらずの凄まじい攻撃力である。うなぎをせがむはずが、むしろシキを妨害するような状態になってしまっている。

シキはある程度うなぎを切つたら、クリームが膝に乗りやすい態勢に座り方を変えた。すると他の合図なしでも一瞬でシキの様子を察したクリームはシキの膝に飛び乗った。

「お待たせ、クリーム。さあどうぞ」

なぜか置いてあった空の小皿にうなぎを置いてあげると、クリームが食べやすいようにテーブルの端に置いた。クリームはシキの膝の上から身を乗り出して一心不乱に食べ始める。クリームにもうな

ぎは結構好評だったらいい。食いつきがいつもと比べても段違いだった。あげるものによっては、くんくんと匂っても結局食べないなんてこともさらにある贅沢な猫さんなので、分かってはいてもこうやって食べてくれると、シキは嬉しかった。

シキはトラとクリームに適当にうなぎを切り与えながら、しばらく二匹の様子を見ていた。いつみても猫さんのご飯の姿はかわいい。「猫さんに見とれているのもいいけど、シキも早く食べないと冷めちゃうわよ」

いつの間にか食べ終わったシズカがシキに言った。確かに猫さん達の世話に夢中になって、自分の箸を進めるのを忘れていた。

「そうだね」

シキはまだうなぎ一切れとごはんが半分ほど残っているうなぎを再び食べ始める。少し冷めいたせいでさっきより質は落ちていたが、猫さんのご飯を見ながらうなぎを食べると先程より何倍もおいしく感じられた。味覚は見た目にも左右されるというが、これほど贅沢な食事風景をシキは他に知らなかった。

「うちそうさま」

こうして今日のシキ家の晩御飯は終わった。実際のところ、クリームやトラがねだらなくてもシキとナツミがうなぎをあげていたりうという突っ込みは禁句である。

夏休みが始まって数日経ったある日、今日は珍しく昼から猫さんが二匹とも外に出ていたので、シキは適当に二匹を探して家の周りを散歩していた。家の中にいれば、シキには猫さん達の居場所はおよそあたりがつくのだが、今日はお気に入りの寝床を探してもどこにも見当たらなかった。外で猫さんと遊ぼうと思っても、見つからない時は本当に見つからない。

一体、どこに行っているのだろうか。

シキが猫さんを訪ねて三十分ほど辺りを散策するが見つからず、あきらめて家に戻るとナツミと出くわした。ナツミはなぜかシキと

同じようにつかりして疲れた様子である。心なしか動きがいつもよりにぶい。ナツミは先日、自転車の修理中に挨拶してくれた時もそうだったが、いつも元気に走り回っているので、こうやってとぼとぼと歩いている姿を見て、シキは必要以上に心配してしまう。

「こんにちは。ナツミちゃん。なんかあったの？ 元気がないみたいだけど」

「あ、おにいちゃん。こんにゃちは」

よく見ると今にも泣きそうな表情である。いつものナツミの調子なら雪崩のように話が続きそうなもののだが、挨拶だけで終わってしまった。

「大丈夫？ ナツミちゃん。なにか、悲しいことでもあったの？」

シキは心配して聞いた。

「うん。ちょっとね。靴が壊れちゃったみたいで上手く動かないんだ」

ナツミは子どもの間で流行っているローラー付きの靴を普段から履いていて、シキは、ナツミが家の周りをスイスイと滑っているのをよく見かけていた。ピンクの装飾の可愛い靴は、いかにもナツミらしい。

「それは困ったね」

「うん、一応歩くことはできるんだけど、このまま使えないと困っちゃうな」

シキは猫さんにも敏感であるが、ものが壊れたと聞くと何かと直したがる癖がある。特に猫さんが見つからない今となつては、ものいじりは絶好のひまつぶしであり遊びである。

「ちょっと見せてみてよ。もしかしたら直せるかもしれないよ」

「ほんとに！？ 休みの日にいろいろと作ったり直したりしているのは知っていたけど、こんなでも直せちゃうの？」

ナツミは、少しだけ笑顔を取り戻したけど心配そうに聞いた。

「たぶんね。靴の修理はほとんどやったことないけど、できると思うから任せてよ」

いつものシキから比べると、自信たっぷりになりシキは言った。

「ありがとう、じゃあお願いするね」

ナツミは左足の靴を脱いでシキに渡す。シキは大事なものを扱うようにそれを受け取る。ナツミは左足靴下、右足靴という何か勘違いされそうな状態になった。

「こういう靴、履いたことないからよく分からないんだけど、どう調子が悪いの？」

シキはナツミからもらった靴の悪いところを調べようと、しっかりと凝視しながら聞いた。

「うん、そのコロコロがね、上手く回ってくれないの」

コロコロというのは靴底についているローラーのことだろう。シキが手でローラーを回してみると、確かにひっかかりがあって回りにくい状態になっていた。一回転するたびに同じような場所で回転が悪くなるような気がするが、普段との違いがシキには分らない。

「ナツミちゃん、もう一方の靴も見せてくれないか？」

「え、こっちの靴はいつも通りに動いてくれるよ？」

「うん。だからいつもの状態がどんなものか確かめてみたいんだ。

違いが分からないと直し方の方針も立たなくてさ」

「そういうことか。さすがおにいちゃん。じゃあこっちの靴も脱ぐね」

ナツミはもう一方の靴を脱ごうとした。

「ナツミちゃん、靴下じゃ立っているのも危ないだろうし座ったら？」

「全然大丈夫だよ？ ただ、立っているだけじゃん」

ナツミは手を止めて、首を傾げた。

「靴下だけだと何か踏んじやうと怪我しちゃうよ。それに靴には衝撃から足を保護したり、温かくしたりする以外にも、足を疲れさせない効果もあるんだよ」

「そうなんだ。じゃあお言葉に甘えて座らせてもらうね」

そう言うとナツミはシキの真横に座った。シキはナツミに近くに

置いていた作業中に使う折り畳み椅子に座るように言ったつもりだったので、突然のナツミの行動に面食らった。

しかも、ナツミはシキの真横の至近距離で靴を脱ぎ始めた。ナツミはミニスカートで無防備な脱ぎ方をしていたので、細くて若々しい生足をしっかりとさらけ出していた。見方によっては、足の根元まで見えかねない際どい角度にシキは思わず目をそらした。

「はい、脱いだよ。おにいちゃん？」

どうやら靴を脱ぎ終わったらしいナツミがシキに靴を渡そうとした。しかし、シキはそっぽを向いてしまったため、ナツミはシキの挙動不審を感じ取ったらしく疑問形でシキに呼びかけた。

「うん、ありがとう」

シキは慌ててナツミから靴をもらう。

意図せず、シキの目線に入ったナツミは健康的な太ももをさらけ出している。鈍感なシキですら危ないと思う状況だが、不幸中の幸いで、生理現象により勝手に吸い寄せられてしまったシキの目線からは、白かそれに類する布地は発見できなかった。これならいかがわしいことは何もない。まさか履いてないなんてことはあるまいし、ノーブルムとシキは自分自身に言い聞かせる。

もらった右足の靴のローラーはくるくると引っかかりもなく綺麗にまわった。これが正常な状態なら、確かに左足のローラーはおかしかった。一方が綺麗に回っても、一方が止まってしまったら転びかねない危ない状態だ。

「これが普通なら左足の靴は大分悪いね」

「やっぱりそうだよ。直せそう？」

ナツミは身を乗り出してシキがもっている自分の靴を覗き込んできた。

「これくらいなら直せると思うよ」

見たところ、ローラー部分に雑草とかゴミが溜まっているから回転が悪くなっているようである。ゴミを取り除いてあげればなんとか動きやすくなると思う。それでダメならお手上げかもしれないが

その時はその時だ。

「本当！ よかった。やっぱりおにいにやんに任せて正解だったね」
ナツミは顔を輝かせて喜んだ。シキは直らなかつたらそれもしょ
うがないと思つていたが、こんなぬか喜びをさせてしまったら後味
が悪いと思つた。絶対に直してあげようと気を改める。

「ちよつと道具の準備をするから待つていてね」

「うん、わかつた」

シキは立ち上がつて、家の中に工具を取りに入る。

両手にはナツミの靴を持つたままである。

シキはこの状況のまずさに今更になつて気づく。家の外に靴を脱
いだ少女を待たせて、その少女の靴を持って家にいる青年の図がそ
こにはあつた。見る人によつては妙な誤解を招きかねない状況では
あつたが、今更、靴だけを戻しに家の外に出るのもかつこ悪いので、
結局、シキは靴を持つたまま工具を取りに行く。

「シキ、猫さんは見つかつた？」

二階に登ろうとしたところ、突然シズカがシキに声をかけた。驚
いてシキは慌てて靴を後ろ手に隠した。猫さんみたいに突然現れる
などシキは思つた。

「いや、いなかつた。その調子だと家にも帰つていないみたいだね」

「そっかあ。お昼だしどつかで寝ているのかもね。それにしも、随
分と落ち着かないみたいじゃない。何かあつたの？」

シキはどきりとした。このやりとりでそんなところまで察せると
はさすが母親だ。

「なんでもないよ。ちよつと近所の女の子が、靴を直してほし
いて家の前に来ているんだ」

「あら、デートなの？」

「違つよ！」

シキは慌てて否定した。

「なによ、そんなに動揺しないでもいいじゃない。冗談なんだから。」

でもそろそろ年頃なんだから彼女の一人でも作つたら？」

確かにその通りだが、実の息子にむかつてよくここまではつきり言える。もうちょっと遠慮とか憐れみとかはないのだろうか。

「余計なお世話だよ。外で待たせているからお茶でも用意してあげて。僕は二階に工具とか取ってくるから」

「はい。わかりました。おにいにゃん」

さつきまでのやり取りを知っていたかのような呼び方でシズカはシキに応じた。

自分の部屋から工具箱を持って下に降りると、玄関には既にジューズを用意したシズカが待っていた。

「遅いわよ。シキ。レディーを待たせるものじゃないわよ」

シキが二階に行った時間は一分かそこいらだったのに、その間にジューズ二人分用意してスタンバイしているとは、シズカはどれだけ手際がよいのだろうか。

「用意が早すぎるんだよ。両手塞がっているから先に出てくれない？」

シズカはシキに軽口が言いたいがためだけに神速で準備をしたのだろう。シキはわざわざ構う気にもなれず適当に応じた。

「あらやだ。若い二人の邪魔をするほど、私お節介じゃないよ」

シズカはシキの工具箱の上にコップを二つ押しつけた。両手で持っているとはいえその両手にはそれぞれ靴も持っていたのでバランスがとりづらく、危うくこぼすところだ。

「おい、何するんだよ」

「若い二人でごゆっくりどうぞ。玄関なら開けてあげるから一人でいってらっしゃい。なんならあがってもらってもいいわよ」

シズカは召使いのような仕草で扉を開けた。その表情は猫さんと遊んでいるとき以上に楽しそうであった。なんでこう女というのは色恋沙汰にきやあきやあ言うのかね。シキはシズカに言いたいことはいろいろあったが、こんなところで口論しても仕方ないと思い、

おとなしくシズカに従う。

「ジュースの用意どうも」

ナツミを待たせるわけにもいかないの、シキはシズカに軽くお礼を言つてに外に出た。

「お待たせ、ジュースあるんだけど飲む？」

シキは工具箱と靴を足下に置くと、ナツミの横に座つてジュースを差し出した。

「いいの？ ありがとう！」

ナツミはジュースと聞くと、表情が一気に明るくなる。シキは一口ジュースを飲むとコップを置いて、工具箱を開け始めた。

「おいしいねえ。おにいちゃん、大きな箱を持ってきたけど、そんなに修理は大変そうなの？」

ナツミは一気にコップの半分ほど飲み干して、シキに聞いた。

「いやそんなことないけど、何か必要だったら一々取りに行くのも面倒だからさ。この箱があれば大抵の道具は揃っているから困らないんだ。そんなに手間はかからないと思うよ」

「そっかあ。楽に終わりそうならよかった」

ナツミは安堵したが、直せる保証はシキにはないので戦々恐々だった。シキは壊れているほうの靴を手に取ると再び手に取つて、ローラーがつつかかる場所を探り始めた。

「ナツミちゃん、ずっとこの靴使っているの？ いろんな場所で履いているんでしょう？」

「もう長いこと使っているよ」

「ずっと使っているからローラーにゴミがいつぱい溜まつて、そのせいで回りにくくなっているんだよ。定期的に掃除してればかなり長持ちするんじゃないかな。今からゴミをとつてみるね」

シキはドライバーとキリを上手く使つて、ローラーを掃除し始めた。上手くほじくつてやると面白いくらいゴミがとれた。

「ほら、こんなにゴミが溜まつているでしょう」

「ほんとだあ。すごく溜まっているね」

一分ほどでシキの見た目にはゴミがみえない綺麗な状態になった。仕上げにローラー部分を水で洗い流すと、ローラー部分はさらにつやのある状態になった。

「これで少し乾かしたら大丈夫だと思うよ」

シキは用意していたタオルで靴を拭きながら言った。

「すごいね。こんなあつという間に直せちゃうんだ」

「そうだね、こんなのでよかつたらいつでもできるから、何かあつたら言つてよ。右足の靴もついでにきれいにしておくね」

「ありがとう。本当に優しいねおににゃん」

シキはひとまず、さっき洗った靴をタオルの上に置いて、壊れていない右足の靴にも同様の作業を始めた。こっちの靴もローラー回り方こそよかつたが、結構ゴミが溜まっていた。

「ところでさ、さっきおにににゃんが家に入っている間に気づいたんだけど、クリームがベランダの屋根の上にいるのは大丈夫なの？」

シキがナツミの目線の先を見ると、確かに屋根の上には目立つ白いのがいた。クリームは白猫さんだったから屋外ではかなり目立ち保護色になるような場所はあまりないのだが、あそこなら壁が保護色で見つけづらいし、そもそも目線の下ばかり探していたので完全に盲点だった。

「大丈夫だよ。猫さんの運動能力はすごいからね。そこらへんの木でも伝つて簡単に降りてこられるよ。そもそもあそこには自分で登つたんだからね」

そうやって自分から変な場所に行つて抜け出せなくなる猫さんもあるにはいるが、今のクリームはそんな状況ではないと、シキにははつきりわかっていた。

「あんなところから降りられるの？」

ナツミは信じられないという表情で言った。

「今はお昼寝中みたいだけど、お腹でも空いたら勝手に降りてくるよ」

「へえ。そっか」

とりあえず、その場ではナツミは納得したようだった。両方の靴のゴミをとって乾かした後、適当にオイルを塗って仕上げた。シキがローラーを回してみると先程とは段違いのキレのよさで、修理が上手くいったことに満足する。でも問題はこれが履いてどうなるかということだ。

「ナツミちゃん。とりあえず履いてみてよ。どんな感じかな？」

「うん。ありがとう」

ナツミは靴を履くとすぐに滑りはじめた。どうやら問題ないみたいだ。

「すごい。新品のときみたいにすいすい滑れるよ」

ナツミは本当に嬉しそうで、シキもよかったと思っただ。シキは内心、うまくいかなかったらとびくびくしていたので安心もした。

「ちゃんと動くみたいでよかったよ」

「ほんとにすごいよ。ちゃんと動くどころか前よりすごいみたい」

「それは言い過ぎだよ」

「また、なんかあったらおにいにゃんに言うね。いい？」

ナツミは、家の前を旋回し、シキの目の前で急ブレーキで止まると上目づかいで聞いてきた。

「僕なんかで何かできるならいつでも言うて。物いじるのは好きだしね」

「うん。じゃあまた何かあったらおにいにゃんに相談するね。ありがとう」

ナツミはそのまま帰ろうとしたが、思いついたように急ブレーキをかけて、Uターンしてくる。

「どうしても気になるんだけど、クリームは本当に大丈夫なの？」

どうやらナツミはまだ屋根の上のクリームの様子を気にしていたようだ。

「クリームは好きであそこに行っているんだから問題ないよ」

唯一、問題があるとすれば、あそこに居座られたらシキの好きな

ときにクリームと遊べないことくらいで、シキは全く心配していません。よかった。

「でもやっぱり危ないよ」

しかし、ナツミの表情はとても心配そうで、シキがどういっても安心してくれそうにない。

「うん。まあ確かにちよっと危ないかもね」

「助けてあげられないの？」

屋根の上とはいえガレージの上なので、家に置いてある脚立でも届くような場所でクリームは寝ていた。こんなに心配しているならちよっとナツミが気の毒でもあるし、かっこいいところを見せたいという欲も、少しはシキにはあった。

「わかった。助けてあげようか」

「うん、助けよう」

ナツミの表情は、ぱっと明るくなる。

シキは脚立を取ってきて、クリームの寝ている屋根の傍に登る。

屋根の上のクリームは、丸くなってぐっすりと眠っている。人の気も知らず呑気な奴だ。シキが手を伸ばすとクリームが気配に気づいて起きたが、逃げ出す前になんとか捕まえることができた。シキは慎重に脚立を降りようとしたが、屋根の縁で腕を擦ってしまった。

シキの腕に激痛が走りバランスを崩してしまう。クリームは危険を察知して自ら腕から逃げて脚立をぱつぱと降りてしまった。シキはバランスを崩しながらもなんとか脚立に捕まって無事に降りた。

「よかった。ほんとに心配だったんだ」

どうやらナツミはシキが怪我をしたことには全く気付いておらず、クリームの無事にほっとしたようだ。

「うん。お昼寝を邪魔しちゃったけど本当によかった。クリームも家に入りたみたいだし、またね。ナツミちゃん」

「うん。またね。おにいにゃん」

シキは、そう言っ脚立とか工具箱を片付けもせず家に引

っ込んだ。ナツミの前では冷や汗垂らしながらも笑顔でいたが本当に痛かった。物を片付けようなんて思考が全く頭に思い浮かばないほど、シキには余裕がなかった。

シキは、一歩一歩踏みしめるように自分のベッドで寝ようと階段を上る。そのシキの足元をクリームが走り抜けていく。どうやらどさくらに紛れてクリームも家の中に入ったようである。それにシキが気づかなかったことが、事態の深刻さをシキに認識させた。

「じゃあ」

クリームは部屋の前で扉を開けるとおねだりしている。こいつは本当に呑気なものである。シキは扉を開けてベッドに飛び込むと、クリームもそれに追従してシキのベッドの上に飛び込んできた。どうやら次の寝場所はここに決めたらしい。

シキは腕をかばいながらも、少し冷や汗が引いて来たらあつという間に寝てしまった。

シキが目を覚ますと、すでに日も暮れかけた夕方だった。腕の痛みはすでに引いていて少し赤く腫れているだけである。どうやら一過性のもので済んだようだ。

シキは小腹が空いていたので、近所のコンビニにアイスを買に行った。

シキはこのコンビニの常連だったので、よく知った顔の黒髪のきれいな女性が会計をしてくれた。なぜかこの店員さんは。シキ相手だと妙に機嫌がいいような気がしていたが、たぶん気のせいだろう。見た目と仕草だけでこんな風に思ってしまうとは人間も結構罪なものだ。

家に帰るとクリームはまだベッドの上で寝ていた。シキはその傍らに座ってアイスを食べた。夕焼けの下、猫さんと一緒に食べるアイス。なんとという贅沢だろうか。

これが猫キチなシキの日常だった。この日常がこれから変わって

いくなんでこの時、シキは思いもしていなかった。

第二章 パーティー（前書き）

2016/5/5 表示乱れていたなので微修正しました。

第二章 パーティー

第二章 パーティー

シキは今、心臓をバクバクさせながら小学生の家のチャイムを鳴らそうとしている。

なんでシキが小学生の家を訪ねることになっているのかと言ったら、話は昨日にさかのぼる。ナツミが靴を修理してもらったお礼にと、シキを晩御飯に誘いにきたのだ。

「こんにゃちはー」

シキがナツミの靴を修理してあげた翌日、ナツミが二日続けてシキの家に訪ねてきた。いつも通り元気なあいさつだ。昨日に引き続き何かあったのだろうか？

「ナツミちゃん、こんにちは。今日はどうしたの？もしかして昨日直した靴はまだ調子悪かったかな？」

「いや、びつくりするくらい調子いいよ。おにいちゃんすごいね。ありがとう」

ナツミはそう言うとその靴でトリプルアクセルしてみせた。靴がよくなっただけでそんな芸当ができるとはとても思えないのだが、ナツミは凄い運動神経の持ち主らしい。

「問題ないみたいでよかったよ。靴の修理なんてめったにしないから心配だったんだ。また、なんか調子悪くなったらいつでも言うからね」

シキはちょっと心配していたので、それを聞いてほっとした。

「うん、また何かあったら助けてもらえたら嬉しいにゃー」

「それで、今日はどうしたの？何の用事？」

「うん、それでね。良かったらうちの晩御飯食べに来てほしいんだ。

お母さんも是非来てほしいって」

「え〜！ そんなの悪いよ。ナツミちゃんのうちにも迷惑でしょ。靴を直したのは僕も好きでやったんだから全然気にしないでよ」

シキは驚いて慌てて断った。いきなり小学生の家にごちそうを食べに行くなんて全く気が進まなかった。どれだけ気をつかえばいいのか、考えるだけで大変そうだ。

「来てくれにやいの？」

すると、今まで明るかったナツミが急に悲しそうな表情になった。いけにやい。いや、いけない。シキのナツミへの気遣いが足りなかった。すっごい明るい子なのにこんな悲しそうな表情をするなんて、シキは思わなかった。きっと明るいただけじゃなく喜怒哀楽がはつきりと人から見える子なのだろう。

「うーん。ごめん。そんなに悲しそうにしないでよ。こっちの家の都合とかもあるからさ。ちゃんと考えとくから、返事はまたでいいかな」

シキは慌ててどっちつかずの返事をした。

「ねえ、うちのお母さんの料理、絶対おいしいから食べに来てよ。

お母さんもお礼言いたいって、言っているしさあ」

ナツミはそれでもぐいぐいと押してくる。

「行つてきなさいよ。レディーの誘いを断るのは失礼よ。私はシキをそんな子に育てた覚えはないよ」

シキがどう返事したものと困っていると、ウッドデッキから洗濯中のシズカが口を挟んできた。シズカはにやにやと楽しそうだ。

「なんだよ。母さんには関係ないだろ」

「せっかく楽しそうなのに。じゃあ代わりに母さんが行くこうかな。

ねえ、ナツミちゃん」

「ええ？ 私、おにいにゃんがいい」

ナツミちゃんが、今度は怒り気味に言った。ざまあみるとシキは心の中で毒づいた。

「わかった、わかった。じゃあ夕飯に行ってもいいかな？ ナツミ

ちゃん」

これ以上話がこじれてくると面倒なので、シキは決心してナツミちゃんに言った。

「本当！ よかった。じゃあ明日六時にきてね。ごちそう作って待っているから」

ナツミちゃんとびっきりの笑顔を見せながら、まくしたてるように言った。

「明日あ！？」

「うん、明日。とっておきのごちそう作っているから楽しみにしていてね」

シキが何かを言う暇も与えず、ナツミちゃんはスキップしながらあっという間に家に帰ってしまった。

「よかったわね。じゃあ明日いつてらっしゃい」

シズカがにやにやしながらシキに言った。

「余計なお世話ありがとございました」

シキが皮肉たっぷりに言った。

「何よ。女の子とデートの一つもしたことない癖に」

「うぐっ。それをあなたが言いますかね」

シキは痛いところを突かれて顔をしかめた。自分の息子だということに容赦のない一言だ。

「まあ、女の子と遊ぶ予行演習だと思って、行ってきなさいな」

事の顛末はそんな次第だ。

それで、シキはナツミの家の前に突っ立っているわけだ。だが、チャイムを鳴らそうとしているのになかなか押せずにはいた。シキは小学生の家に招待されたのが恥ずかしく躊躇しているのだ。まるで初めて彼女の家に行く男の子の気分である。

「えーい、うじうじしていてもしょうがない」

意を決して、シキは指をチャイムに伸ばす。

「ピンポ」いらっしゃーい！」「」

チャイムの音が鳴るか鳴らないかの瞬間、扉が外れんばかりの勢いでナツミが飛び出してくる。いつも通りの弾けるような笑顔だ。ナツミと一緒にナツミより十センチ程小さいおとなしそうな子もでてきた。姉妹だろうか？ ナツミは茶髪で明るい印象なのに対して、妹の子は青髪のクールな印象で対照的な見た目だ。

「もう、なに玄関の前でじーっとしているの？ そんなにうちに来るの楽しみじゃなかったの？ 私達、待ちくたびれちゃったんだからあ」

ナツミは、マシンガンのような勢いでまくしたてた。空気の溜まった風船が破裂して一気に空気が漏れていくように、ナツミの口からどんどんおしゃべりが出てくる。

私達というが妹のほうは、別に待ちくたびれたようには見えなかった。どちらかというと、特に見知らぬ第三者にも動じることなく落ち着いているように見える。

「いや、楽しみだったからちょっと緊張しちゃって踏ん切りがつかなくて」

「なにそれ？ 楽しみならさっさと入ってくればいいのに」

ナツミは心底、不思議そうに聞いた。

「もしかしてずっと見ていたの？」

「うん。ずーっとのぞき窓から見ていたよ。全然ピンポン鳴らしてくれる気配がないからもう少してこっちから出ていくところだったよ」

シキはあれをずっと見られていたのかと思うと恥ずかしかった。こんなことなら男らしくとっとピンポンを鳴らしておけばよかった。

「いじめないでよ。ナツミちゃん」

「あはは、ごめんなさい。さあ立ち話もなんだし入って」

そう言つとナツミはシキの手を引っ張って、シキを招き入れようとする。

「意気地なし」

すると、ここまで無言を貫いていた妹がぼそりと言った。

「こら、マフユ。おにいにやんにそんなこと言っちゃだめ。それに様子を見ていようって言ったのはマフユじゃん」

ナツミはシキの手を放してもう一人の子のほうに向きなおる。この子の名前はマフユというらしい。しかも見張りの共犯者らしい。というか主犯者らしい。

「だって、そっちのほうが面白いでしょ？」

しかも、ちゃっかりこの子が一番楽しんでいたらしい。

「相変わらずいじわるね、マフユは。紹介するね。この子は妹のマフユ。いたずら好きでとげの強い子だけど、すっごくいい子だからよろしくね」

「はじめまして。マフユちゃん。おれはシキ。よろしくね」

初対面の女の子に悪い印象を持たれるのは嫌なので、シキはとびつきりの笑顔であいさつした。

「知っているよ。随分ナツミと仲良くしているみたいだけど、ロリコンなの？」

開口一番、マフユはひどく失礼なことをシキに聞いてきた。

「ロリコンちゃうわ」

シキも思わずびっくりして関西弁がでるほどだ。

「ロリコンってなに？」

ナツミちゃんはピンと来てないらしく、きよとんとした顔をしていた。

「そんなこと知らなくていいよ」

どうも年下なのにマフユちゃんのほうが、その手の知識はあるらしい。

「えー。教えてくれてもいいじゃん」

「そう、ナツミはまだそんなこと知らなくていい」

マフユもそこは同調した。でも、マフユのほうがナツミより年下なのではないのだろうか？

「マフユまで。まあいっか。そろそろうち入ろう。おにいにやん。」

そう言つと、さつき離したシキの手をナツミは再び取つて玄関へとひっぱつていった。シキには玄関に入った瞬間に分かつた。

この家でも猫さんを飼っている。

普通の家とは匂いが違うのだ。この家はもごく普通の一軒家で、それに掃除もよく行き届いているみたいだ。

しかし、いくら見てくれをよくしたところで、シキほどの猫キチならわずかな匂いで、そこで猫さんが暮らしているかどうかなど分かつてしまう。

こんな面倒くさそうなパーティーに誘われてテンションはただ下がりしていたのだが、この家に猫さんが住んでいることを認識したシキは、どんな猫さんに会えるのだろうかと期待してテンションも一気にマックスになった。

でも、この家には猫さんが壁を爪とぎがわりにつかつてぼろぼろにされた後とかがなく、余程しつけが行き届いた猫さん達なのだろうか？

そうだとしたらシキは見習わなければならない。シキの家の壁はすでにクリームのお気に入り爪とぎになっている場所が多々あり管理が大変になっていた。ちなみに、トラはちゃんと市販の爪とぎを使う。誰に教えられたわけでもないのに素晴らしい。

「お邪魔しまーす」

シキは玄関に入って、さつきまでと比べて一オクターブくらい高い声で言った。

「あれ、さつきと全然声が違う？ どうしたの？」

ナツミにも気づかれた。

「そんなことないよ。素敵な家だなあとと思ってさ」

「よかった。改めていらっしやい」

ナツミ達に案内されてシキはリビングに入った。リビングに入ると猫さんの匂いはより濃くなったがここにも猫さんがいる様子はない。ナツミちゃんのうちの猫さんはリビングがお気に入り場所というわけではないのだろうか？

シキは近所で離し飼いにしてある猫さんは全部把握しているし、ここに猫さんがいるとすれば完全に家の中で飼っているのだと思っ
ていたがどこにいるのか不思議だった。

猫さんはいなかったが、同時にリビングにはすでにおいしい匂い
が充満しており、ナツミ達の母親が慌ただしく料理の準備をしてい
た。

「いらつしゃい。あなたがシキ？ ナツミの靴を直してもらってあ
りがとうございました。今日はいっぱいごちそう作ったから楽しん
でいってね」

ナツミ達のお母さんは、茶色と黒髪のコントラストがよく映える
ウェーブのかかった髪 of 綺麗な人だった。小学生二人のお母さんだ
が若々しくて可愛くすらある。

すでにテーブルの上にはいかにもなパーティー料理が並んでいた。
色とりどりの野菜が入ったサラダ、ポテト、チキン、メインは中心
に置かれた魚介類たっぷりのパエリアだろう。パーティー料理と言
えば、栄養が偏りがちだがバランスもきっちり考えているらしい。
色合いもよく、なんとも豪華な雰囲気漂っていた。

「お邪魔しています。こんなごちそう用意してもらってありがとう
ございます。靴を直したただけなのになんだか申し訳ないです」

「いえいえ。こんなのシキがナツミにしてくれたことを考えれば大
したことないから、好きに食べていってね。でもその口ぶりはいけ
ないなあ。うちではみんな呼び捨てで呼び合うんだ。そのほうがみ
んな親密だなあって気がするでしょう」

日本には珍しい欧米みたいなルールで、シキはいろいろな家庭が
あるんだなあと思った。ナツミ達のお母さんは、シズカと同じくら
いフランクな人間なのだろうか。ただ、万が一、あれ以上だったら
たまったものではない。

「でもそんなの失礼ですし。敬語で呼んじゃだめですか」

「だめだよ、シキ。郷に入っては郷に従えって言うでしょう」

ナツミがシキを呼び捨てで呼んだ。確かにこっこのほうが親密に

聞こえて悪い気はしない。それにしても小学生のはずなのに難しい言葉を知っている。

「そうだよ。シキ。さんづけとか他人行儀で面倒なだけでしょう」
マフユもシキを呼び捨てにした。

「私はハルカつていいいます。よろしくね、シキ」

ハルカもシキを呼び捨てにした。この家ではそれがしきたりになっているみたいで、シキだけが敬語で話していても場違いだ。

「わかったよ。ナツミ、マフユ、ハルカ。今日はパーティーに誘ってくれてどうもありがとう。ごちそうになります」

シキはみんなを呼び捨てで呼ぶと、背中がむずがゆくなるような感じを覚えた。

「うん。それでよろしい。こっちのほうが楽しいでしょう。じゃあ立ち話もなんだし料理も冷めちゃいけないからそろそろ食べましょう。シキここに座って」

ハルカが椅子を引いてくれて、そこにシキは座る。隣にナツミ、向かいにマフユ、対角線上にハルカが座った。一般的なダイニングテーブルの席がちょうど埋まる。

「じゃあみなさん一緒に。いただきます」

「いただきます」

ハルカの音頭に合わせてみんなで挨拶してパーティーが始まった。
「お口に合うか分からないけど好きに食べてね」

ハルカがシキに促す。料理はみんな大皿によそられていて、パエリアはホットプレート一杯に敷き詰められていた。どれも自由にとれるようなバイキング形式で、シキは軽いものからとサラダから食べることにした。

みんながシキが食べるまで気を使っていて料理に手を出さないの
で、シキは急かされているみたいで早く食べないとしょうがない。

シキはみんなの視線が注がれる中、サラダを一口食べた。見た目からおいしいだろうと信じていたシキはその意外な味に驚かされた。
「シキ、どう？ おいしい？」

ナツミが横から身を乗り出すように、シキをまじまじと見つめて聞いてきた。

「お、おいしいよ」

そんな瞳で見つめられたらそう答えざるおえない。しかし、シキにとってこのサラダはお世辞でしかおいしいといえないような味だった。味付けはしてあるみたいだが、まるでそれぞれの味が打ち消しあったかのように味がしない。シキが今まで食べたことのない変な味だ。

「だよ。ハルカの料理は本当に美味しいんだから」

ナツミはシキの感想を聞いて嬉しそうに自分も食べ始めた。マフユも一緒に食べ始めた。

「シキの口に合うか心配だったのだけど問題ないみたいでよかった」ハルカは安堵したようだった。シキは自分で大量に皿についてしまったので残すわけにもいかなかったが、やっぱり美味しくない。下手に味がついているからこれ以上ドレッシングをかけたりしたらさらに不味くなりそうだ。しかし、みんなを悲しませたくないシキはサラダを食べた。

他の料理にもシキは手を出してみたがどれも似たようなものだった。ポテトもチキンほとんど素材そのままという感じで味気なく、黄色く綺麗に色づいたパエリアですら味が薄く、それに白身魚とか魚介類が妙に多かった。これをクリームやトラが見たら喜んでおねだりしてきそうだが、シキにはそんなに美味しくなかった。

とはいえパーティー自体は面白かった。ナツミやハルカみたいに普段付き合いのない人達と、日常や趣味のたわいもない話を敬語も使わず、同じような目線でしゃべるのは新鮮な気分で楽しかった。時折、挟まれるマフユの突っ込みも時には鋭くシキに突き刺さるものもあったが、それはそれでよかった。

大量に用意されたパーティー料理は四人で食べつくされる頃には、二時間くらい経過していた。

結局、シキは用意されたもののなかでは一番ましだったサラダば

かりをほとんど一人で食べつくした。なぜかサラダだけは三人ともほとんど手を出さず、一番人気だったのはパエリアだった。三人はまずそんな表情を一片もださずに喜んで食べていたので、シキの味覚はおかしいのだろうかと思うほどだった。

「じゃあもうほとんどなくなっただし、デザートを出そうか」

ハルカは立ち上がってテーブルを片付け始めた。はたしてデザートはおいしいのだろうか？ これまでのシキの感覚からするとあまり期待はできないかもしれない。

「はい、お待ちかねのデザートです。コース料理やパーティーでは魚や、お肉がメインになることが多いけど、ぶっちゃけデザートのほうがメインって感じだよね。甘いものはいくらでも食べられるし、別腹っていうし」

ナツミは待っていましたとばかりにはりきっている。

「デザートは、私とマフユで作ったんだ。お母さんが作った料理と比べたら、全然ダメだけどきつとおいしいから。じゃあ冷蔵庫からとってくるね」

そう言つとナツミとマフユは、席を立った。あのお母さんの料理よりまずいデザートが来てしまったら一体どうしたらいいのだろうか？ シキは、内心でぞつとした。食事中はなんとか、愛想笑いを浮かべながらごまかしたけど、今度こそやばいかもしれない。

しかも作つた本人達から今までの料理よりまずいというお墨付きである。本当ならこんな時、デザートは何が出てくるのだろうかドキドキするところだが、シキはどれだけまずいのだろうかとびくびくしていた。

「シキ、ナツミたちが頑張つて作つたデザートだからちゃんと食べてね？」

ハルカにそう言われると、もう完全に逃げ道が封鎖されたようだ。「ええ、もちろん」

シキは適当に相槌をつつた。シキは、もうどうにでもなれ、とや

けになっていた。

ナツミ達が持ってきたのは、一目でホールケーキと分かる箱。中に入っているのは生クリームたっぷりいちごのおいしいショートケーキかなあ？ それとも濃厚なチョコレートたっぷりのチョコレートのケーキかなあ？ なんて甘いもの大好きなシキは、普通なら妄想しそうなシチュエーションだ。

実際、シキの甘い物好きは相当なもので甘いものを語らせたら、シキの右にでるのは猫さんを語らせたシキくらいのものだ。

自家製ケーキなのにわざわざ箱入りとは凝ったものだが、シキはこの時は実はこれがパンドラの箱なんじゃないかとビクビクしていた。テーブルの上にナツミ達が箱を置くと、二人は箱を開けずにそのまま元の席に座る。

「じゃあ、おにいにゃん開けていいよ」「どうぞ」

ナツミとマフユが同時に言う。

自分達で作ったケーキなのに、なんでこんな箱まで用意しているのかと、シキは思ったが、一種のサプライズとしてわざわざ用意したのみだ。

「僕が開けるの？」

「うん、開けて開けて」

恐る恐るシキは箱に手を伸ばす。こんな状況でもどんなケーキがでてくるのか楽しみな気持ちも少しでてくる。まさか煙がでてきて爺さんになることはないだろうな？ ナツミ達のサプライズはうまく機能したようでシキはドキドキだった。

「じゃあ、開けさせてもらいます」

シキは、箱を一気に開けた。

「うわあ、おいしそうなショートケーキだあ」

シキは実際にはもうまずいと確信しているケーキにありもしないお世辞を言った。でも、見た目には本当においしそうだ。手作り感満載の不揃いさは少しあったが、それも不快になるようなものではなく、むしろおいしくみえるような手作り感だった。生クリームが

ケーキを囲むようにたっぷり塗ってあり、いちごもきれいにカットされて乗っている。いくらかのフルーツもなかなかに見栄えがよい。だが、見た目にだまされてはいけない。さっきのパーティー料理だって、見た目だけなら完璧だったのだから。この見た目のケーキからはどんな奇想天外の味がでてくるのだろうか。シキは戦々恐々だった。

「よかった。本当においしかったらいいなあ。じゃあ切るね」

ナツミとマフユは、協力してケーキを八等分にして、ナツミ達に食べてほしいと遠慮するシキに構うわず、一番フルーツの乗っている豪華なところをシキに分けてくれる。ナツミ、マフユ、ハルカにケーキを切り分けると残りはちょうど半分になった。

「では、改めて私の靴を直してもらってありがとうございました。

このケーキは私達の自信作だからおにいちゃんにもきつと満足してもらえと思っています。どうぞお召し上がりください」

さて、ここまでお膳立てを整えられたら、シキもおいしくいただくしかない。ハルカならともかく、ナツミやマフユを悲しませることはできない。意地でも笑顔で食べきるしかない。

さっきの怒涛のパーティーメニューの中でも、三人に僕がまずいと思っっていることを勘付かれなかったじゃないか。

大丈夫。僕ならやれる。シキは自分を鼓舞する。

それでもまだ往生際悪く、ゆっくりとケーキを切っていたのだが、ナツミは手を動かさずじろじろとシキを見つめている。先程、シキがサラダを食べる前に注がれていた視線以上の強烈な期待感がシキに刺さる。シキはあきらめて一口分に切ったケーキを口に運んだ。

「どうどう？」

ナツミは目を爛々と輝かせながら興味津々に聞いてきた。

シキがの口内には甘みがふわーっと広がる。文句なしの素晴らしいショートケーキだった。それどころか今までに食べたことがないほどの絶妙な味だった。生クリームのふわふわ感とスポンジケーキのバランス。いちごのアクセントもしっかり効いていた。予想外

だった上手さもあつて感動すら覚えた。

「すつごくおいしい。こんなに美味しいケーキ、今まで食べたことないよ」

シキは今日初めて自然な笑顔で食べたものの感想を正直に言った。美味しいものを食べると幸せな気持ちになるし、思ったことを素直に言えるのも気持ちいいと思った。

ところが、今までと少し違うシキの様子にナツミ達は敏感に気づいたようだ。

「わざとらしい」

マフユはシキに鋭く指摘する。

「ハルカの料理を食べたときと反応が全然違う」

ナツミにまで言われる始末である。

「そんなことないよ。ほんとお母さんの作った料理よりも断然おいしいよ」

シキは本心から言う。ハルカのこととは少し悪くいっても大人だし問題ないだろう。

「嘘だあ。お母さんが作った料理よりおいしいなんてあるわけにやいよ」

ナツミには余計嘘つぼく見えたらしい。シキにはさっきの料理は全くおいしくなかったが、ナツミ達には絶品だったらしい。お袋の味というやつか？ 人の好みというのはよくわからない。

「そんなに謙遜することないじゃない。シキがおいしいって言うてくれているのだから、よくできていると思うよ」

ハルカはクスクス笑いながら言った。

「うーん。上手くできたとは思うけどやっぱりハルカには負けちゃうなあ。お菓子の本を見たりしてがんばっただけどなあ」

ナツミは自分に切り分けたケーキを食べながらしかめっ面で言った。自分で確認してみても、断然ハルカのケーキのほうがおいしいらしい。

「よくできたほうなんじゃない。喜んでもらえているみたいだし」

マフユもナツミと同意見みたいだ。

シキは夢中になってケーキにがつついていた。今まで悲鳴を上げていた胃袋にようやくまともな食べ物が入ってきて、体が歓喜しているようだ。

「喜んでもらえたならよかったかな。今度はハルカのケーキも食べてみてね。絶品だから」

ナツミはシキのあられもない食べっぷりを見て納得したようだった。

シキはハルカのケーキはごめんこうむりたいと思っていたが、それとも他の料理と違ってデザートだと本当においしいのだろうか？と疑問に思うほどだった。

シキが一きれ目のケーキを食べ終わると、ナツミはすぐに二きれ目のケーキをシキに分けてくれた。全員が二切れ目を食べ始めることで、ホールケーキは跡形もなくなる。食べる量をセーブしていたシキはともかく、ガツガツと食べていた三人の胃袋はどうなっているのだろうか。

「シキ、今日は楽しんでもらえたかしら」

シキが二きれ目のケーキを食べ始めると、ハルカがシキに聞いた。「ええ、もちろん。ちょっとしたお節介でナツミの靴を直してあげただけなのに、こんなごちそうありがとうございます」

シキは、最初はここに来るのも億劫だったがなかなかどうして楽しかった。

「それは、よかった。それにナツミにもいろいろよくしてもらってありがとう。けどね、今日シキをここに呼んだのは、実はそれが本当の目的じゃないのよ」

唐突に、ハルカやナツミ、マフユの表情が真剣なものになる。シキは突然の空気の変化に戸惑う。

「え、どういうことですか？」

シキには全く見当もつかなかった。

「あはは。ごめんね、シキ。今まではあなたを試してただけなんだ」

ナツミは口調を変えていた。雰囲気もさっきまでと違い小学生とは思えない威厳がある。

「人間はほんとだまされやすい」

マフユはさっきまでと特に変わらない雰囲気だったが、言っていることがさらに意味不明だ。

「みんなどうしちゃったの？　なんか様子がおかしいよ」

シキのケーキを食べ進めていた手を思わず止めた。

「シキの家は、猫を飼っているよね」

ハルカが聞いた。シキには話の流れが見えなかった。

「ええ。二匹飼っていますよ。クリームとトラっています。うちの自慢の猫さんです。ナツミはたまに遊んでくれていますよ」

近所でも一応、名前くらいはそこそこ知られているし、ナツミとかはクリーム達の友達でもあるのだが、今更それを聞いてどうするのだろうか？

「そういえば、この家でも猫さんを飼っていますよね？」

シキがここに来てから一番気になっていたことをみんなに聞いた。

「いいや、飼ってないよ」

マフユが言った。

「そんなはずない。僕には猫さんを飼っているかどうかくらいわかるよ」

いくら部屋を綺麗にしていようとそれはごまかしようがない。シキの猫さんに対する五感と第六感をもってすれば、そんなこと造作もなく見破れる。シキにとっては猫さんの存在は、生きることには比肩するほど大事なことだったのだから、そんなことを誤認するようでは自分のアイデンティティーが崩れ去ってしまようなものだ。

「本当にうちで猫を飼っていないよ。シキはなんで、うちで猫を飼っていると思うの？」

ハルカまで嘘をつく。シキはちょっと怒りたくなってきた。とは

いえ、なんでと言われると答えにくい。

「それは……」

「なんで？　なんで？」

ナツミも聞いてきた。

「それは、こんなこと言ったら馬鹿にされそうですけど、この家はすっごく綺麗に片付いていますから、一見ペットなんて飼ってないように見えますけど、いくら外見だけ綺麗にしたって家の中には猫さんのいる雰囲気があります。僕は猫さんに対する感覚なら誰にも負けない自信がありますし、ここでも絶対に猫さんを飼っています。絶対です。むしろなんでそんなこと隠さないといけないんですか？　僕だったら、どんな猫さんだって可愛がってあげます。それに、この猫さんと会ってみたい」

三人はそれを聞いてばかりんとしていた。やっぱり言い過ぎただろうか。シキは少し後悔した。

「ほら、私の言ったとおりでしょ」

やがて、ナツミが口を開いた。

「そうね。シキ。今日、シキを呼んだ本当の目的ってというのは、実はシキにお願いがあるのよ。その前にシキにはいろいろと説明しておかないといけないと思ったから、ここに呼んだの」

ハル力が落ち着いて話した。

「お願い？　お願いっていうならこっちにもありますよ。ここにいる猫さんに会わせてください」

相変わらずハル力達の話がシキには見えてこない。若干、怒ってきたのもあってシキは強気な口調で言った。

「これから話す話ってというのは、うちの猫の話とも直接関わってくるのよ。だから、ちょっと落ち着いて聞いてくれる」

ハル力は諭すような口調で言う。

「わかりました。話してください」

「ありがとう。これから話す話はちょっと長い話になるわ。それにシキの世界観とか価値観とかを根底から壊すような話になるかもし

れないけど、心して聞いてね。」

ハルカはまた突拍子もないことを言う。しかも、話がいきなり壮大なものになり始めた。シキは訳が分からなかったが、ナツミ達はあまりに真剣な表情をしていたため、気が引き締まるのを感じた。

「猫さんの話がそんな壮大なものになるんですか？」

「ええ、なるわ」

ハルカは当然のように言う。

「一人の人間が知っている世界なんて狭いもの。今から私達のする話はあなたの世界を壊しちゃうわ」

マフユは少し面白しそうな表情で意味深に言った。

「とりあえず、聞くだけ聞いてみるよ」

聞いてみないと何も始まらない。それに猫さんにも会いたいし。とりあえずシキは話を聞いてみることにした。

「じゃあ、いきなりうちの猫の紹介からしようか。シキは今日おかしいと思わなかった？好物がたくさんあるはずなのに、うちにいるはずの猫が全く出てこないことを不思議に思わなかった？」

ハルカの話はいきなり、シキが気にしている確信をついてきた。

「確かに思ったよ。チキンとか魚とか喜びそうなものがたくさんあるのに、どこにいるんだろうと。うちの猫さんはご飯の時間になったら頼まなくても出て来るからね。でも、猫さんによって性格は様々だからどっかで寝ているか遊んでいるかだろうと思っていました」

「ご飯にこない猫さんなんて珍しいものだと思いつつも、シキは勝手に納得しておいた。」

「じゃあ外でうちの猫を見たことがある？」

ナツミが聞いてくる。

「ないよ。完全に家の中で飼っているんじゃないの？」

シキは近所で放し飼いされている猫さんをほとんど把握しているが、この家で飼っている猫さんに全く心当たりはなかった。

「じゃあ今日家にご飯を食べていたのはだーれだ？」

マフユはシキを見つめながら言った。

「そんなのここにいる四人しかいないよ」

みんなと一緒にパーティーしていたのだから明らかだ。

「家に猫を飼っているならご飯にはいるはずでしょう。ごちそうなんだから」

ナツミの言い種はまるで自分達が猫さんであるかのような言い方だとシキは思った。

「……つまり、私達三人は猫なのよ」「」

シキは途端、体が硬直するのを感じた。

ハルカに言われてみて、三人が猫さんだと考えれば、今まで不思議だったことがいくらか納得できるような気がした。まず猫さんが家に見あたらなと思うていたが、猫さんはちゃんとご飯の時間に顔を出していたわけだ。

二つ目に、このシキにとって妙にまずかったパーティー料理だがこれにも納得だ。シキはハルカの料理をまずいと思いつつも、どこかで食べたことある味だなと思っていたが、今ようやく思い出した。

ハルカの料理はキャットフードの味にそっくりなのだ。最近のキャットフードにはなかなかにおいしいやつもあるが、キャットフードは人用の加工食品に比べて味がついていないものなのだ。シキは猫さんに食べさせる前に必ずキャットフードを試食するのだが、味気なくてたくさんは食べられないなあというエサは結構あった。今夜のパーティー料理で、シキが感じたのはまさにその感覚だった。

一瞬、あまりの気づきにシキは驚き固まっていたが、落ち着いて考えてみると、猫キチのシキにさえ馬鹿馬鹿しい話に思えた。

「そんな話、信じられるわけ無いよ。みんなどう見ても、人間の姿をしているじゃないか」

シキはばつさり切り捨てた。

「確かに簡単に信じられるわけないよね。ハルカ、マフユ少しだけ

見せてみない？」

ナツミが二人に提案した。

「でも変身する姿を見せるわけにはいかない」

マフユはナツミの提案を拒否した。

「マフユの言う通りだけど、私達はもうタブーに片足つつこんじゃっているからね。人間は百聞は一見に如かずっていうし、見せてあげたほうがシキにも納得しやすいだろうし一部だけ変身してみようか」

ハルカはちよつと考え込んだようだが、ナツミの意見に同調した。

「百聞は一見に如かずってなに？」

「ちよつと本気で変身する気？」

ナツミとマフユが同時にハルカに疑問を投げかけた。

「二人同時に言わないでよ。百聞は一見に如かずっていうのは、私達、猫は匂えばそのものについて納得できるでしょう。人間は話に聞いて納得できなくても、一回それについて見ればわかってしまうっていう例えだよ。人になっても匂いは残っているから私達には、人間界の猫は一聞瞭然でしょう。でも人には分からない。マフユも今更何言っているの？ここにシキを呼んだ以上、私達の正体は明かすつもりだったんだから、もうはつきり見せたほうがいいでしょう。後のことは後のことよ」

「そういうことか。人間はそういえば視覚を大切にするね」

「どうなってもハルカが責任をとってよね」

二人はそれぞれ納得した。シキにも今の会話の中にひっかかることがあった。

「僕はこの家に入ったときから猫さんの匂いがするなあと思っていたけど、まさかその匂いも三人のものだっていうの？」

シキのセリフに三人は驚いたようだ。

「家は綺麗にしていたつもりだったんだけど、まさか匂いでわかるなんてね」

「さすがおにいちゃん」

「人間のくせにどんな嗅覚しているの？ 噂に違わぬ猫キチね」
ナツミは素直に感心したようだ。ハルカとマフユは若干呆れているようだ。

「そういうことよ。シキには不思議なことに匂いだけでも、猫のことに気づかれたみたいだけど、見せようか。みんなちよつとだけ変身して」

シキはここまで三人の話を冗談半分くらいにしかとれていなかったが、ハルカの言葉を合図に三人が突然光り始めた。マンガでしか見ないような、冗談みたいな光景にシキは目を引き寄せられたが、眩しすぎて途中で目をつぶってしまう。

シキが目を開けると、そこには体の一部が少し変わった三人がたっていた。

ナツミは頭に二つの可愛らしい猫耳をつけていた。

ハルカは長い尻尾を携えていた。

マフユは一見、なにも変わらないようだ。

シキが呆氣にとられながらも、マフユを見ていると、

「肉球」

マフユはぱつと手を見せて、そこには猫さん特有の肉球がついていた。

「それ本物なの？」

シキがしばらく呆然としたあとに、ようやく口をついて出たのはまだ疑問符だった。

「だったら触ってみればいいよ。いつもクリームといちゃいちゃしているんでしょう？ クリームにやる調子で触ってもいいんだよ」

ナツミがびびりこと猫耳を動かしてシキに近づく。かわいい。あざとい。

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて」

こんな態度で迫られたらシキは我慢できなかった。いや、我慢する理由がなかった。ナツミの猫耳は大ききこそ人型に合わせて普通

の猫さんより一回り大きいサイズだったが、その毛並みや感触はまさに猫さんのそれだった。どう見ても猫耳力チューシャなど付いておらず、猫耳は自然に頭についているものだった。耳の裏をくすぐってやるとナツミは気持ちよさそうだった。

「ナツミばっかずるい。私もさわっていいよシキ」

ハルカは尻尾をふりふりしてシキにアピールしてきた。猫さんの尻尾ふりふりはただひたすらにかわいいのだが、人間の特にハルカがやると異常にエロく見えた。ハルカの尻尾に触ってみると、触り心地はまさに猫さんのそれだった。人型に合わせて尻尾のサイズも大きくなっているの、感じ方によつては猫さんの尻尾より触り方がいいがあった。

「いたっ！ ちょっとひっぱらないでよ」

シキが好奇心でちょっと引っ張つてみると、ハルカは声をあげた。「ごめんなさい！ 本当にちゃんと生えているのかと気になって」

尻尾は引っ張つても手応え十分で、ハルカの心情を表すかのようになぶんと振られていた。体に生えていることに間違いはなく、本体の動きと別に心情を表すような動きをするところとか、まさに猫さんの尻尾のそれだった。

「許してあげるけど、猫にそんなことしちゃだめだよ」

無論、普段のシキは猫さんの尻尾を引っ張ったりはしない。

「ほら、私の肉球も触ってごらんよ」

マフユはナツミやハルカと違ってスキンシップをあまり積極的にとるタイプには思えなかったので、自分からこんなことを言うとは思っていなかったが、シキに向かって肉球のついてる手を差し出してきた。

ぶにっ

もはやなんの躊躇もなくシキがナツミの手を握ると、慣れ親しんだ感触が伝わってきた。やっぱりこのぶにぶにする感触は気持ちいい。シキの表情が至福の感情で満たされる。

「いてっ」

今度はシキがやられる番だった。

「あんまり嫌らしくさわるな」

マフユの手は肉球と同時に猫さんの爪にも変身していたらしく、ナツミの怒りの琴線に触れたシキはこっぴどく爪を立てられた。こんな反応もまさに猫さんのそれだった。

猫さんの肉球はかなりデリケートな部分で容易に触ることはできない。シキがクリーム肉球に触ろうとすると、敏感に察知されて逃げられたり、反撃でひっかかれたりする。菩薩のように許容範囲の広いトラですら、長時間、肉球をもみもみしていると露骨に嫌そうにする。

「本当に猫となったら見境ないのね」

マフユはシキの行動と仕草にどん引きしていた。

「今は事情があつて一部しか変身してないけど、私達は人間の姿をしているけど猫に変身できるのよ。というか、元々猫んだけど人間に変身できるって言った方が正しいけどね」

シキは三人の可愛さに見惚れて、状況の不自然さに全く気付いていなかったが、普通の人間の正気を少し取り戻したシキには衝撃的な光景だった。

「三人とも実は猫さんなの？」

シキは改めて三人に聞いた。

「そうだよ。私達三人だけじゃなくて、シキの家のクリームとトラだつて私達と同じで変身できるのよ。というか、世界中の猫はみんな人間に変身できるんだよ」

ナツミは、地球が実は太陽の周りを回っているという、さも当然の事実のように言う。ハルカが言っていた通り、確かにシキの世界観がぶっ壊れるような話だった。

「クリーム達も!？」

シキは驚愕した。

「そして私達は人間として人間社会に溶け込んでいて、クリーム達は猫として人間社会に溶け込んでいるのよ。シキが知らないだけで、

結構な数の猫が秘密裏に人間として生活しているのよ。びっくりしたでしょう?」

ハルカによつて続々と衝撃的な事実が明かされる。シキはぼかーんとしていた。

「とても信じられないような話だけど、人間には秘密にしているみたいなのに、なんでそれを僕に明かしたの?」

シキはそんな話があったら素敵だという想いもあったので、信じられないながらも割とすんなり話が聞けた。

「話が早くて助かるわ。猫の中でも人とどう共存していくのかというのは大きな問題になっていてね。猫の間で、人と積極的に関わっていこうとする人親交グループと、人とは極力関わらないでいようとする人絶縁グループの争いがあるんだ。そこらへんの考え方の違いから、人として過ごしている猫と、猫として過ごしている猫がいるの」

ハルカは一呼吸置いて話を続ける。

「基本的には、そんなのは人に私達の正体を明かすというタブーを起こさなければ、問題ないんだけど、猫も人間のことを知りすぎて最近では人の技術力を超えるようなものを作ったりもしてね。下手に猫が力をつけすぎたせいなのか。最近、この二つのグループの争いも過激になつてきているんだ」

政治には疎いシキだったが随分と厄介な話に聞こえた。一体シキの知らないところで、猫さんはどれだけの社会力を築いていたというのだろうか。

「それをなんで僕に話すことになつたの?」

ハルカ達の話ではそれは猫社会ではタブーらしい。人間社会のように法律まであるのだろうか。それなのにシキに話した理由がまだわからなかった。

「クリームが問題なのよ」

マフユが答えた。

「え? クリームが?」

「簡単に言うとクリームは私達、人と積極的に関わろうとしているグループ「ピース」のリーダーの役割を担っているの。人絶縁グループの一部は結構過激な動きをしていて、「キャッツ」という組織を作って、クリームの命を狙うような輩まで出ているんだ。その飼い主であるシキにもその事実を知っていてほしかったんだ。あと、いざという時に備えて心の準備をしてほしかった」

ハルカは淡々と説明するが、シキには信じられないような話だった。

「最近、ナツミがシキによく接触していたのはシキを試すためだったの。特に屋根上のクリームを助けてもらったときは、腕を少しケガしたみたいでごめんなさい。でも、シキが何よりも猫を愛しているのが分かったから、私達も私達が猫であるという事実を打ち明けられたんだ」

ナツミは実はあの時、シキが腕を怪我していたことを知っていたらしい。

「あと、あのシューズを直してもらったのも、シキが私達の秘密を明かしてよい人間かどうか試すためのものだったの。本当はあの靴、人間に扱えるようなものじゃないのよ。まさか、本当に直してくれるとは思わなかったよ。今は詳しくは話せないけどね」

あの靴の修理はマフユが差し金だったらしい。人間に扱えないとはどういうことだろうとシキは疑問に思った。

「それが今日シキを呼んだ理由よ」

ナツミが締めくくった。

「でも、クリームは産まれてすぐの野良猫さんの頃に母さんが捨ててきた猫さんで、それからずっと家で暮らしてきたんだよ。そんな特別な猫さんなわけないよ」

「じゃあ、シキは私達が猫であるなんて想像したことある？ クリームが家から出ているときどこでなにをしているのか知っているの？」

ナツミがいたずらな瞳で見つめながらシキに聞いた。

「猫さんが人に化けられるなんて思うはずもないし、クリームが外でなにをしているかは、確かに僕もあんまりよく分かっていないよけどさ……」

「とにかくクリームは私達ピースにとって救世主なんだ。私達はクリームの周辺を守る守護者としてここで人として暮らしているの。あとトラもピースの一員で、クリームに一番ちかい側近の用心棒として、シキの家に潜り込んだんだよ」

ナツミの説明が続く。救世主に、守護者に、用心棒。なんかすごい話になってシキの頭の回転が追いついてくれなくなってきた。

「トラまでそんなすごい猫さんなの？」

トラは昔、近所の人引越すときに置き去りにされてしまった猫さんだ。突如、野良猫さんになったトラだがその愛想のよさで近所の人に良く可愛がられて、シズカのこと懐柔したトラはシキの家の飼い猫さんになった。それが救世主の用心棒？ シキには受け入れがたいとんでもない話だった。

「猫のなかでは超有名猫だよ。凄腕の用心棒なんだから」

マフユが答えて、他の二人も同調する。

「私達の話したいところはこんなところかな。何かシキが聞きたいことはある？」

随分と簡単なアウトラインだけでハル力達の話は終わった。短い話でも内容が異常に濃い話ではあったが、これじゃあ三人がシキにどうしてほしいのかよく分からなかった。

「これだけ？ もうちょっと猫さんが人社会の中でどう生きているのか教えてもらえませんか？」

「本当は、猫が人の中で生きていることを話すだけでもタブーだよ。たぶん、シキは世界で唯一の猫の正体を知っている人間になったの。これを明かすことを猫社会で認めさせるのに危ない橋を私達も渡っているの。今、シキに知ってほしいことは全部言ったつもりよ。逆にこれ以上込み入った話をして混乱させるだけになると思う」

ハルカは改めてシキにこの話はここで終わりだと宣言した。

「それで僕にどうして欲しいんですか？ これじゃあ、猫さんの正体を無駄に一人の人間に明かしたというだけで、それ以外何も無いじゃないの？」

「それでいいんだよ」

マフユはあっさりと言った。

「私達は人と仲良くしたいピースの一員。シキみたいな人間と今までの関係が続けていけたらそれだけでいいの。だから本当はこんなこともしたくなかったんだよ」

ナツミもあっさりと言った。

「今まで通り、クリームやトラ、他の猫達を可愛がってね。そして私達とは普通の人間として接して。つまりシキは何もしなくていいし、変わらなくていいの」

ハルカもあっさりと言った。

「ただ万一の時に備えて、シキにも心の準備をしてほしかっただけだよ。でも私達が全力で守るからそんなことにはさせない。おにいにゃん、残ったケーキ食べよう」

ナツミはこの話を終わりにしてケーキを食べ始めた。

シキもナツミに釣られてケーキを食べた。会話中ずっと放置されていたケーキだが、相変わらず絶品だ。しかし、頭がこんがらがってシキにはその味も分からないほどだった。

デザートも終わって、ナツミの誘いでみんなでゲームをすることになった。ハルカはパーティーの片付けをしていた。さっきのシリアスなムードから一変して明るい雰囲気。ナツミからは、普通の小学生にしか見えない。

マフユは、特に様子が変わらず小学生には見えない落ち着きだったが、どっちにしても、この一家が全員猫さんであるなんて、未だにシキには信じられない。

「じゃあこのアニマルカートやろうと思うけど、おにいにゃんこの

ゲーム知っている？」

テレビの下の棚を物色していたナツミが用意したのは、偶然にも最近シキがはまっているレースゲームだった。それなりにやり込んだゲームなので小学生に負ける気はしない。

「うん。僕も知っているゲームだしそれでいいよ」

その後、三人はしばらくアニマルカートをした。

「また二位かあ」

三十分後、シキは何度目かの二位でゴールした。

「ああ惜しいあとちよつとだったのに」

シキからワントンポ遅れてゴールしたナツミがため息をつく。

「ちよつと強すぎないマフユ？」

十レース以上したが、シキは全く勝てなかった。勝てないどころか、全く勝てる気がしない。ほぼ全てのレース二、三位でフィニッシュしているが、一位になれる気が全くしない。このゲームでこんな感覚は初めてだった。運が相当影響するこのレースゲームでは、相手がどんなに上手くても十回に一回くらいは漁夫の利で勝てるくらいの自信がシキにはあった。

しかし、今シキが陥っている感覚は、永遠にやり続けても勝てる気がしないものだった。僅差の試合もあったのになんだらうこの感覚は。最初は適当に流しつつも一位を取りまくり、たまには適当に譲ってあげようという気だったのだが、そんな気分はすぐに吹き飛んだ。本当にマフユが強すぎた。

「マフユはいつもこんなもんだよ。というか結構遊んでいるよね？」

ナツミはさらりと言った。これで遊ばれているとは未恐ろしい。本気を出したらどんだけのスピードが出てしまうというのだろうか。マフユは今までの表情とは打って変わってすごく楽しそうだった。のめり込んでいるのかシキ達の会話も特に聞こえないようである。

「本気だしたらどうなるの？」

シキはすごく感心して興味津々に聞いた。

「本気だったら周回遅れにできちゃうんじゃないかな」

マフユは真顔で静かに言った。あまりの一言にシキは驚かされた。一周遅れにされるとはとても信じられないが、見てみたくもある。どうやら適当に譲って手加減していたのはマフユのほうだったらしい。

「一周遅れなんてしないでいいから、もうちょっと手加減してよ。あたしとおにいにゃんの争いになっているじゃん」

ナツミが愚痴る。そう、実際のところナツミも小学生にしては異常に上手かった。ほとんどのレースでナツミとシキは二位争いのデッドヒートを繰り広げていた。

二人ともにぶつちぎりで勝てると思っていたので、シキには完全に予想外の戦いだった。ナツミもシキと同じくらいには上手く、ほんのわずかの差でシキのポイントのほうが上という状態だった。ただし、次のレースの結果によってあつというまにひっくり返るごく少量の差である。

「マフユほどじゃないけど、ナツミもめっちゃ上手いね。びっくりしたよ」

「ええ？ これくらい普通だよ」

シキがナツミを褒めても、ナツミはあまり嬉しそうではなかった。

「マフユ、一回本気で走ってみれば？」

「そうね。シキはぶったまげるかもね」

マフユは面白そうに言ったが、目が座っていた。

マフユが本気を出した次のレース、マフユは今までのレースとは桁違いの圧倒的な走りを見せた。完璧なコース取りとドライブテクニックで全く他を寄せ付けず、その走りはまるで世界記録のリプレイを見ているかのようだった。結局、マフユの走りに見惚れていたシキは自分の操作が疎かになり、ナツミにも負けて危うくマフユには周回遅れにされるところだった。僅差で勝っていた合計のポイントでもナツミに抜かれてしまった。

「どう？ 驚いた？ これが上手いっていつんだよ」
マフユがすごかったのになぜかナツミが自慢した。

「上手いってどうか。凄すぎるでしょ」

「だって私、全コースの世界記録を持っているからね」
マフユは淡々とんでもないことを言う。

シキは一瞬、自分の耳がおかしくなったかと思った。

しかし、シキはこのゲームをやり込んでいたので、アニマルカートには一人とんでもないプレイヤーがいることを知っていた。アニマルカートのコースレコードは一人のユーザーが支配していてユーザー名は……。

「もしかしてマフユは、AbsoluteZeroなの？」

シキは噂の最強レーサーの名前をマフユに聞いてみた。

「そうだよ」

シキは驚かされた。こんな女の子が世界王者とは。いや猫さんか。AbsoluteZeroはアニマルカート界隈ではちょっとした有名人で、ネット上ではゼロと呼ばれている。

「今日はなかなか面白かったよ。また今度勝負しようね。シキ」

マフユはレースを終わらせて電源を切ってしまった。この瞬間シキのビリが確定したがそんなことはシキにはどうでもよかった。

こんな小さな可愛い子が最強のプレイヤーであるという事実には、一端のゲーマーであるシキはぶったまげた。マフユはゲームのことになると饒舌になるようで、いつもより口数が多かった。

「でも、レースのほう散々だったね。やっぱり今日の話はシキを動揺させたのかな？」

マフユはシキにダメ出しする。

「そりゃあ動揺もするよ」

「まあそうだね。同情するよ」

マフユは笑顔で言った。

「でもゼロ本人と会えたなんてよかったよ。ゲーム界ではちょっとした有名人だよ」

シキはマフユの技術に感動したし嬉しかった。

「人間が弱すぎるのよ。シキももうちょっとがんばってよ」

「努力します……」

シキは苦笑いした。猫さんの技術力の一端を見た気がした。それは感動を覚えるものでもあったが、同時に未恐ろしい気がした。

その後、猫さん達の寝る時間だということでパーティーはお開きになった。ケーキは美味しかったが、ほとんどサラダしか食べておらず、お土産にもらったクッキーもハルカが作ったのでは全く期待できなかったので、シキは家に帰る前にコンビニに寄ることにする。

シキは、単純に軽い夜食におにぎりを二つ買って家路に帰る。今日の店員さんはいつものきれいな黒髪のお姉さんではなかったけど、シフトではなかったのだろうか。

「今日はおまえの食べそうなものはもってないよ」

コンビニからの家路で、近所でよく会う黒猫さんと遭遇した。大抵、野良猫さんはこういう時エサ目当てでついてくるのだが、今日はやけに積極的にその黒猫さんについてきた。

「そういえばハルカにもらったクッキーがあつたな」

シキは思い付きで黒猫さんにクッキーをあげてみることにする。

ハルカの料理はシキの舌には全く合わなかったが、猫さんの三人には絶品らしかった。もしかしてこのクッキーも猫さんには美味しいのだろうか？

シキは、ガサゴソと鞆からクッキーの入ったビニールを取り出そうとすると、黒猫さんはさらにシキに近づいてきてシキの足元から少し離れた位置に陣取る。エサをもらうのに慣れた野良猫さんはこういう態度を示すことがあるが、この黒猫さんにここまでの反応を示されるのは初めてだった。

シキがダメ元でクッキーを黒猫さんにあげてみるともの凄い勢いでガツガツと食べる。シキは一枚試しに食べてみたがやっぱりまずかった。

シキは黒猫さんの反応を楽しみながら、三枚程、黒猫さんにクッキーをあげる。その様子ではいつまでもせがまれそうだったので、夢中になっている間にシキは逃げるように家に帰った。

シキが家に着くとクリームとトラが待っていた。

トラは玄関前で優雅に寝っ転がってシキのほうを見つめている。クリームはシキが帰ってきたのに気づくと、どこからともなく走ってきて、家と道路の境界でちょこんと座り、シキを待つ。

昼間の寝ている時間なら例外だが、夕方から夜に帰ってくると、この二匹は必ず迎えに出てきてくれる。本来、この時間でも家の中にいることも結構あるのに、なぜシキが帰ってきたことに気づくのかはわからないが、ちゃんとシキを迎えに来てくれる献身的な姿には本当に癒される。

シキがクリームの頭をなでなでしてやると、クリームのほうもそれに合わせて気持ちよさそうに顔を合わせてきてくれる。とはいえ、すぐに飽きてシキの手から離れると玄関のほうに歩いて行ってしまった。

「ただいまー」

シキが玄関を開けると、クリームとトラもシキに続いて家に入る。「おかえりなさい。クリーム達が慌てて出て行ったからそろそろ帰ってくるだろうと思っていたんだよね。パーティーは楽しかった？」リビングに入ると、シズカはソファで座ってくつろいでいた。

「楽しかったよ」

いろいろシズカに話しても混乱させるだけだと思ったので、シキは無難な返事をした。

「よかったじゃない。シキは猫さんと遊んでばっかだけど、たまには人間とも遊ばないとね」

シキは人間と遊びに行ったつもりだったのに、なぜか猫さんと遊んでいたんだけどね。

「ナツミの家も猫さんを飼っていたみたいで、おすすめのエサをお

みやげに貰ったから猫さんにかけてみるね」

シキはクリーム達にも、ハルカにもらったクッキーをあげてみることにした。シキが猫さんのエサ箱に近寄るとご飯の時間だと気づいたようで、クリームとトラがのそのそと近づいてきた。すでに開けた袋から匂いがでているからなのかクリーム達の様子が普段のエサ前の時と比べて興奮しているように見えた。

シキがエサ箱にクッキーを開放すると、二匹とも争うようにがつつきはじめた。普段はクリームが先に食べて、落ち着いているトラは残り物を食べるが多かったので珍しい光景だった。無論、クリームが食べ尽してしまった時でも、シキはトラには追加でエサをあげているので、ちゃんと二匹ともお腹いっぱい食べられる。

それが取り合いにまでなるなんて、やっぱりハルカのクッキーは猫さんにとっては絶品のようだ。

シキは特にクリームの様子を注視していたが、ただの食欲旺盛な猫さんにしかみえない。こいつが本当に猫さんの救世主なのかね？

シキは大いに疑問を持たざるを得なかった。

第三章 猫拝山（にゃんぱいざん）（前書き）

2016/5/5 表示乱れていたなので微修正しました。

第三章 猫拝山（にゃんぱいざん）

第三章 猫拝山にゃんぱいざん

ハル力達には今までと同じように過ごしてくれと言われていたが、あの日以来、シキの日々の過ごし方はがらりと変わってしまった。日々の習慣や行動などの見た目の行動には変化はなかったが、シキの根底の考え方には大きな変化があった。

シキは、今まではただ自由な猫さんを愛して好きに遊んでいたのだが、単純にそういう考え方ができなくなっていった。

シキは猫さんのかわいい部分にばかり目を向けてきたが、それがナツミ達の話を知ってからは同時に人が猫さんになっている負の部分をシキに見せることにもなってきた。今までは、ただシキが見ようとしてこなかっただけだ。

例えば、今でも日本各地では無造作に増えた猫さんが衛生上などの問題から、年間何万匹も殺処分されている。こんなの人間の身勝手な理由でしかない。他にも、道路を車で走っているとたまたま無残にも轢き殺された猫さんの死体を見ることがある。これも人間が勝手に自分達の利便性を追い求めた結果であった。人間が猫さんにしてきた悪行は数えたらきりがない。

ハル力達の話を知って、新しい世界を見て、ハル力の言った通り、今までの感覚がぶち壊されたシキは今までのように、猫さんのことを単純に考えることができなくなっていった。猫社会で言えば、シキは人親交派のピースの感覚しか持っていなかったはずだが、今や部分的に人絶縁派のキャッツの感覚も持ちはじめているようだった。猫さんが人間以上の力を持ってしまったら、人が猫さんにしてきた仕打ちを考えると、人から離れてしまうのは当然のことではなからうか？

シキはある夏の朝、家の前で寝っ転がっているトラと遊びながらぐるぐると回る思案に耽っていた。人と猫さんとの関係でここ一週間、シキの思考はずっと堂々巡りをしているようだった。

このトラにしてもなかなかひどい仕打ちを受けた猫さんの一匹だ。トラは一度捨てられいたのを、改めてシズ力が飼い始めた猫さんだ。このトラの普段の行動を見ていれば前の飼い主がとてもよくしてくれていたことがわかる。人への慣れ方や行き届いていたしつけなど、飼い始めた当初から野良猫さんのそれではなかった。余程、元の飼い主に愛されていたのだろう。

だとしたらなぜ捨てたのだろうか？ そこにどんな事情があったのかをシキは知らなかった。

しかし、シキ達に愛想を振りまいていながらもその心底にはどこか余所余所しさがあるようにシキには感じられていた。そういうところを深いところで感じているから、シキはトラのことをトラとしか呼ぶことができないのかもしれない。たぶん、元の飼い主に対してのみこの子は心底甘えることが出来るのだ。今でも、出かけているときに元の飼い主がかつて住んでいた家に行っているのをたまに見かけることがあり、シキは心が痛むのを感じた。

「おはよう、おにいちゃん。元気ないね」

ナツミがシキの家の前の通りがかりに、シキの目の前まで滑ってきて声をかけた。ナツミ達はパーティー前と特に変わった様子はないかった。とはいえ、今ももしかしてシキの家を警備中だったのだろうか？ というシキの思考には新たなものがあった。

「おはよう。そんなに元気なく見える？」

シキはトラと遊んでやりながらもナツミに挨拶した。

「そうだね。私達は今までと同じように過ごせばいいって言ったのに、いろいろと考え事をしちゃっているみたいだね」

猫さんというのはどこまで人間の考えを見透かすことができるのだろうか？ 鋭い思考力と観察力にシキは感嘆する。

「そこまで見透かせるなんてすごいね」

ナツミはシキの横に座って、一緒にトラをなで始めた。

「シキのこともずっと見ているからね。今では結構分かるようになったよ」

守護者としてナツミ達はずっとシキ達のことを見ていたのだった。ナツミ達はいつからシキたちのことを見ていたのだろうか。

「ナツミは人親交グループだろうけど、人のことを悪く思わないの？」

「ん？どういうこと？」

ナツミはきよんとした様子だった。

「人は猫さんを殺処分とか随分勝手にやっているでしょう。身勝手にいいように猫さんを使っつて、生き方を制限してそれについて何も思わないの？ 人を嫌いになっつたりしない？」

「思わないよ。というかそこまで深い考えもないよ。ただ一緒に生きている生物なんだし仲良くしたいよ。人間は面倒くさい一面もあるよね。でも猫は直情的に考えて、勝手に言い争ったりしているよ。殺される猫はかわいそうだと思うけど、死ぬことは生きるものの運命の一つなんじゃない」

ナツミは本当に特に気にしていないようだった。

「いいねえ。その素直な思考。今までは単純に猫さんがかわいくて愛していただけなんだけど、あの後、考え方とかぶち壊されちゃった感じでさ。いろいろ考え込むようになった。ハル力が忠告したように話を聞かなければよかったかな……」

シキはまだ、トラを撫で続けていた。ナツミも撫で始めたので、トラの悶え方がなかなかにすごいことになっていった。お前は用心棒だったはずなのになんて動きをするのだろうか。シキは思った。

「うーん。万に備えて事前に伝えておいたけど言わないで済めばそれがよかつたのかな。でもまだどっちがよかつたかなんてわからないんじゃない。今起きている猫の闘争は、それぞれが自分勝手に好きに動いた結果起きた軋轢なんだよ。でもどの猫もマイナス思考で考えてそういう事態に至ったわけじゃない」

「そういう風に自然体に、自分勝手に動けばどれだけいいだろうね」

シキはそういう猫の行動に憧れているからこんなに愛しているのだ。

「そういう人間の気難しさみたいなのは私達にはよく分からないな。そこがどんな世界であろうとネガティブに考えて何が楽しいの？ おもしろいの？ 幸せなの？ どんな場所であろうと環境であろうと、楽しく生きなきゃ損でしょう。人間は自分で思考すら操れる神なのに、どうしてそうやってわざわざ悪い方向に考えたりするのかな。死ぬ間際だろうと私達は生きることには必死で楽しんでいるんだよ。だからそれを不幸とすら私は考えない」

シキはその考え方に雷を撃たれるようになった。そんな思考法を考えたこともなかった。

「思考を操る！？」

「そう。楽しいもつまらないも。幸福も不幸も。希望も絶望も全ては自分の感覚次第なんじゃなくて、思い次第で考え方ひとつで全てポジティブにできるはずよ」

そんな風な考え方をしたことがシキにはなかった。楽しいことをしたら楽しいし。つまらないことをしたらつまらない。可愛い猫さんを見たら幸せな気持ちになる。そんな風に受け身にポジにもネガにも状況次第で受ける気持ちも変わっていた。

自分の思考法次第でそうはならないと聞いて衝撃的だった。何か幸せになる条件があつてそれが満たされた結果幸せになるのだと思っていたが、ただ幸せになるという結果だけをつかむことができるというナツミの話は、シキの感覚を超えていたが聞いていてあり得る話だとも思った。

「それができたら本当に楽しそうだね」

「できるよ。私達はパーティーの時、シキになにもしないでいいって言ったけどできればそれはして欲しいな。いろいろ言ったけどさ。シキも自由に好きに生きてくれればいいんだよ。じゃあね」

ナツミはトラをなでることに飽きたのかそれだけ言い残して去っていった。ナツミは小学生にしか見えないのに、シキの中には尊敬の念すら芽生えていた。自分は今後、猫さんとどう暮らしていけばいいのだろうか？ ナツミとの会話を通しても、シキにはその答えは出せなかった。

シキはその日の午後、猫拝山にゃんぱいさんという山の麓に来ていた。この山に来たのはそこに山があるからではなく、ここは野良猫さんがたくさんいる猫キチの聖地として有名だからである。

つまり、シキはそこに猫さんがいるから来たのだ。

猫キチの間では猫山ねこさんと呼ばれていて、シキは暇なときなど定期的
にこの山に来ていた。麓でも猫さんはたくさんいるので登るか登らないかはその時々だった。慣れている人ならば三十分ほどで山頂まで行けるお手頃な山なので、毎日登ることを習慣にしている人も近所にはいるらしい。シキは暇だったのもあったが、猫さんと人間の関係を見つめなおすためにここに来ていた。

こちら辺に住み着いている野良猫さんは地域猫として、地域の人間でよく管理されていて、野良猫さんにとっても住みやすい場所
に
思える。麓の公園では早速ちらほら猫さんが見えた。昼過ぎの訪問だったため、大体の猫さんが各々好きな場所で寝っ転がっている。

シキは最初に目についた白と黒のぶち猫さんのところに行った。ぶち猫さんは芝生に寝そべってのんびり毛繕いをしていた。昼下がりののんびりしている猫はシキがどんなに悩み事を持っていても癒される絶対的な可愛さを持っていた。よく見るとこの子の左耳の先端がアルファベットのBの字に切られていた。

これはぶち猫さんが先天的にこういう特性を持って生まれたわけでも、怪我をしたわけでもなく、これがこの子が地域猫としてよく管理されているというサインだ。地域のボランティアの人が野良猫さんを保護して、増えすぎないように管理しているのだ。オスは去勢手術をして右耳の先端をカットして、メスは避妊手術をして左耳

の先端をカットする。

この子は左耳が切られているから去勢済みのメスだとわかる。この野良猫さん達に不妊手術をする運動を、T・N・R運動といい、それぞれTrap、Neuter、Return・Releaseの頭文字を指す。「Trap」は捕獲機で野良猫さんを捕獲すること。「Neuter」は野良猫さんに不妊手術を施すこと。「Return・Release」は野良猫さんを元の生活場所に戻すことを指す。

この運動はアメリカで特に広く行われていて、野良猫さんの必要以上の繁殖を防ぐ多くの成功例をあげているらしい。耳にカットをいれることで不妊手術済だと分かるので猫も何度もお腹にメスを入れられる心配がない。

人間がよかれと思ってやっているこの運動であるが、今のシキは単純に猫さんにとっていい運動だと解釈できなかつた。猫さん達にとってみれば住んでいる場所から突然連れ去られて、腹を切られるのはたまったものではない。その後、絶対に盛りを迎えることもなくなる猫さんの一生が果たしていいものだろうか？ 猫になつたことがないのでシキには分からなかつた。

シキには人間として異性が好きだし性欲もあつたが、もし自分の不妊手術をしてそれらの欲求が無くなつた時、それがいいのかどうかは分からない。しかしたらればにも程があるが、不妊手術をしなれば産まれたかもしれない命もあるかもしれないのだ。その子にとってみればたまつたものではないだろう。結局、答えのこの話ではないのだが、シキはそのぶち猫さんを単に可愛いという目線だけでは見られず複雑な気持ちだつた。

シキは公園で見かけた全部の猫さんにたつぷり一時間はかけて挨拶をした後、山を登り始める。ちょうど夏休みでいい天気だつたのでそれなりに登山客もいた。山にはシキのように野生の猫さん目当ての人、日々の習慣にしているような登山マニアな人、夏の青葉を観察しに来た人、ただ遊びに来た登山客と様々な人がいた。シキは

すれ違う人たちに挨拶をしながらのんびりと登山を楽しんだ。勿論、猫さんにも何匹か遭遇したが昼間でみんな寝ているのか、暑すぎるからなのかいつもよりその姿はまばらだった。

シキが山の中腹を過ぎたころ、シキの目線の端を鋭く影が横切った。動きに釣られてシキが見ると口に小鳥をくわえた錆猫さんがいた。錆猫さんは警戒するようにシキのほうを見ていたが、シキは遠目に見ていたので何もしないと判断らしく捕らえた小鳥を食べ始めた。よく見るとこの子は右耳の先端をカットされているからオスらしい。こんな山奥でも人に保護されているのだから、よく管理が行き届いていることがわかる。ボランティアさんの努力には頭が下がる思いだ。

シキはこの光景にも複雑な心境を持たざるをえない。クリームやトラも虫や蛇、鳥にネズミ、コウモリまで捕まえてきたことはあるが、シキやシズカにそれを見せるとそれで満足してしまうのか。動かなくなってしまったおもちゃなど用はなしと興味すらなくしてしまう。

本来、猫さんの狩りはこうして殺したものを食べて生きるための行動であるはずなのだ。それが普通の自然界のルールとして世界は回っている。

それが人に飼われている猫さんの間では、ただの遊びになっている。これではただ殺されるだけの狩られる側はたまったものではない。飼われている猫さんは野生の生物なんかよりはるかに栄養も高く、おいしいであろうエサを人間からもらっているから猫さんにとっても人に飼われるほうが狩りをしているより全然いいのかもしれないが、これも善し悪しはシキには判断できなかった。

錆猫さんはある程度小鳥を食べた後、シキのことが気になるのか小鳥をくわえてシキの見えない場所に行ってしまった。お気に入り場所でもあるのだろうか？ シキは錆猫さんを見送って一路、頂上を目指した。

頂上までのんびりと歩いて寄り道したせいもあって、シキが頂上

まで着くのに一時間ほどかかった。その間に何匹か猫さんをみたが、山の中に入るほど警戒心が強くお近づきになれる猫さんはいなかった。シキは山頂に用意された登山客用のベンチに座って、家から持ってきたお茶を飲んで一息ついた。登山後の疲れた体に染みわたるお茶の味は、普通の市販のお茶なのに格別だった。シキは山頂でも何匹かの猫さんと出会った。

シキは充分休憩した後、山頂にある神社を参った。けちな十円をお賽銭に入れると、とくに何を願うでもなく手を合わせた。ぼんやりと猫さんも人間もクリームもトラもシキもナツミ達も幸せで楽しくあればいいなあとは思ったが、こんなぼんやりとした願いを神様は果たして解釈して聞き入れてくれるのだろうか？

帰り道は特に寄り道もせず黙々と歩いたので二十分弱で元の公園まで戻ってきた。公園にはまだまばらに猫さんがいて、猫さんがいるところには人もちらほらいる。シキは見える猫さん全員に挨拶して猫拝山を後にした。

猫拝山にはいろいろな人や猫さんがいて、山を登ればシキも何か思うところがはっきりするだろうと来たのだが、結局、まだ人と猫さんがどうあるべきかの答えは出せなかった。

今日、一番シキの頭にひっかかったのは、ナツミから聞いた自分の思考を操るといふ考え方と自分が楽しくあればいいという考え方だった。

第四章 エマージェンシー（前書き）

2016/5/5 表示乱れていたなので微修正しました。

第四章 エマーゼンシー

第四章 エマーゼンシー

シキが一日中ゲームをしていたある日の夕方、窓際の机で一息ついていたシキの視界の端に突然何かが見れた。びっくりしてシキがベランダのほうを見ると、マフユとナツミがベランダにいた。

音もなく二階までいきなり現れるとは何事だろうか。

というかどうやって来たのだろうか。ベランダ側には階段なんて当然ないし梯子すらないのだから、壁伝いに登れるスパイダーマンにでもなるか、白昼堂々はしごでも架けて登ってこないとここにはこれない。そんなこと普通するか？ あまりの出来事にシキは面食らっていた。

「エマーゼンシー（緊急事態）」

マフユが勝手に窓を開けてシキの部屋に入ってくる。ベランダへの窓は猫さんがいつでも出られるようになっていたので開けるのは簡単だった。

「急にどうしたの？ というか、どうやって入ってきたの？」

エマーゼンシーとか言われても何が何やらである。

「ジャンプして入ってきたよ。ああもう、話は後、後。とりあえずこれ履いて」

後から入ってきたナツミはいつも履いているローラー付きの靴を取り出した。シキが先日直してあげた靴と同じ種類だが、ナツミのものよりだいぶ大きい。

「ジャンプして！？ そんなことできるわけないよ。それにそんなもの履けるわけないよ」

シキはまだ状況が整理できず、椅子に座った状態で体だけナツミ達のほうに向けて、ただ呆然としていた。ナツミは大慌てで、シキ

を強引に椅子からひっぺがした。シキはナツミになされるがままそこに立たされる。

「ちよつと、何するの突然！」

シキは無理矢理に動かされて思わず抵抗する。一体、ナツミは何を言っているのだろうか。ここに登ろうと思っただら走り高跳びで三メートル跳べても足りない。四メートル近く跳躍できないと絶対に届かない。もちろん圧倒的世界記録である。しかも狭いベランダであるから、背面跳びなんてしようものなら頭か背中が激突してしまう。挟み跳びなんかで完璧に着地までしたらしい。

「できるよ。シキにもすぐわかる。そんなことよりこれ履いて」

ナツミは自分達の正体を明かした時と同じ雰囲気ですう言った。

「そんな靴履けないよ。女の子が履くような靴じゃん。大体なんで履かないといけないの」

その靴はいかにも女の子用で、ナツミ達の靴と同じように、ピシクの派手な装飾がしてある。とてもじゃないがシキはその靴を履きたくなかった。

「つべこべいわずに履きなさい」

しかし、そんなシキの意思は無視された。

「な、なにするんだ」

ようやくシキの意識も覚醒してきて、抵抗しようとしたが全く意味をなさない。シキはマフユに強引にベッドに寝かされ、もの凄いい力でベッドに抑えつけられる。シキはほとんど身動き一つとれず、その力はとても小学生のものとは思えなかった。まるで熊にでも抑えつけられているような力だが、マフユのほうは力を入れているようには見えず、涼しい顔をしている。

「それで抵抗しているつもりなの？」

マフユにそこまで言われる始末であった。マフユはシキのあまりの弱さに呆れているようだ。

「しているよ！ 全力で！ どこからそんな力が出てくるの。びくともしないよ」

シキは全力で動こうとしていたが、馬乗りになっているマフユはピクリともうごかない。

「力なんていくらでも湧いてくるよ。この靴を履いたシキが見たい欲求があるからね」

マフユは楽しそうに言った。

「なんで、こうまでしてその靴を履かせないといけないんだ!？」

最近この子たちに絡むとこんなのはっかりであった。

「後でわかるから。今は我慢してねえ」

ナツミはシキの両足にできばきと靴を履かせながら言った。

「お願いだから止めてよ」

シキは懇願するが、ナツミの手は止まらない。

「うん、よく似合っているよ」

シキの願いもむなしく、ナツミはあっという間に靴を履かせ終わる。シキの靴を履いている姿が気に入ったようだ。

「こんな靴履いていたら外を出歩くこともできないよ」

シキの足元には図体に見合わない、可愛い靴が自己主張していた。サイズはぴったりだったが、そういう問題ではない。

シキにはナツミの美的感覚は全く理解できなかった。

「すっごく可愛いじゃん。じゃあ、おにいじゃん立って」

シキが気落ちした分、ナツミは喜んでいるようだ。シキが自分で立つまでもなく、既にシキはナツミとマフユの力で立たされていた。

「じゃあ行くよ。気をしっかり持ってちゃんと捕まっていってね」

マフユはシキのことをおんぶすると、にっこりと笑いながら言った。

「どこに行こうっていうんだ。下ろして下ろしてよ!」

シキは必死に抵抗するがマフユには全く意味をなさない。小さな小学生の背中だというのに、高級車のシートベルトもびっくりの密着感と安定感だ。そこには小学生の背中で暴れる大学生の絵面があった。

「すぐ降りられるよ」

マフユはクスクス笑いながら言う。ナツミならともかく、マフユがごういう表情をしていると悪い予感しかしない。普段は無表情なのに、イタズラを思いついたときだけ楽しそうなのだ。そのマフユがぐぐぐと力を蓄えているのがわかった。

「よいいどん」

マフユはつぶやくと、一気に窓の外へと跳躍して、そのまま二階から飛び降りた。

「ぎゃあああああああああああ」

シキは絶叫した。遊園地でしか体感したことのないような落下の感覚だが、マフユは、この大ジャンプを軟着陸で成功させて、シキにはほとんど衝撃もないくらいだった。

「なんで、こんな大ジャンプできるんだよ」

シキは感嘆を込めてマフユに聞いた。突然の自殺同然の飛び降りに驚いたシキの心臓は、かつてないほどの勢いで血を全身に送っていた。普段、脈が上がるような運動はしないシキにとって驚くほどの脈拍だった。マフユは着地するとシキを地面に落とした。

「いたっ」

小学生の背中から突然落とされて、シキはお尻から落ちてしまった。さっきの大ジャンプよりこっちのほうがはるかに痛かった。マフユが小さくて助かった。もし、シキ位の身長がマフユにあったら危なかった。マフユは落としたシキのことなど無視して、ポケットからタブレットのようなものを取り出して慌ただしく操作しはじめる。

常人ならあんな高いところから落下したら骨折は免れない。そもそも部屋の中から助走なしでベランダの手摺を飛び越えることすらできない。そんなジャンプをマフユは難なく成功させた。

ついでにナツミもジャンプで降りてくる。三メートルの落下でスカートがその意味をなさず、ひっくり返っていたが、シキはそんなことよりナツミが怪我するんじゃないかとハラハラした。しかし、そんな不安などマフユの時と同様に全くの杞憂であった。ナツミはと

ても二階から飛び降りたとは思えないような「スタツ」という軽い擬音と共に、楽々と着地する。

「猫だからだよ。前に話したよね」

ナツミは、不思議そうに言った。ナツミは尻餅をついているシキに手を伸ばす。

「猫さんだからって……。今の姿は普通の女の子じゃん」

百聞は一見に如かずとはいいが、シキは今見た現実が信じられなかった。

「確かに見た目は人だけど、猫の運動能力も持っているんだよ。だから人型で本気で動けば、あなたたちには信じられないような動きができるよ。普段は力を抑えて行動しないと、ばれちゃうから大変だよ」

確かに猫さんは自分の身長をはるかに越えるような場所にジャンプできるし、シキがクリームとよくやる階段競争では、どれだけシキがハンデを貰っても圧倒的に負けてしまうような脚力も猫さんは持っている。人の大きさであれが再現できるなら四メートル級の大ジャンプも朝飯前だろう。

「でも何かがない限り、僕の力は借りないで、自分達でクリームを守るって言うていただろう。何かあったのか？」

猫さんと人間の関係を無暗に変えていきたくはないから、そういう姿は見せないとやっていった。つまり、その余程のことが起こってしまったから、ナツミとマフユはこんな行動に出たわけだ。マフユは窓から入ってきた時に「エマージェンシー」と言っていた。シキでもこれくらいの横文字なら意味もわかる。要するに「緊急事態」らしい。

「うん。そうだね」

ナツミは暗い顔で言った。

「本当にごめんなさい」

ナツミは深々と頭を下げてシキに謝った。マフユはさらに厳しい表情になって、より真剣にタブレットをいじり続けた。

「なんで謝るんだよ。顔をあげてよ」

シキはなぜ謝られるのか見当もつかなかったが、見た目は小学生のナツミに謝られるとしどろもどろしてしまった。

「本当はシキをこんなことに巻き込みたくなかった。でも、私達の警備が破られてクリームがさらわれてしまったの」

「なんだって!？」

シキは血の気が突然引いていくのを感じた。確かに、今日クリームは朝出かけてから家に帰ってきてはいないようだった。どこかお気に入りの場所でお昼寝でもしているのだろうと思っていた。

まさか、さらわれたなんて……。

確かに、ナツミ達の家に行ったとき、クリームが実は猫界の人親交派のリーダーで、狙われる可能性があると言われていた。それ以降、シキはクリーム達を外に出す危険性とかを少しはシキも考えはしたが、実際のところ本当にクリームがそんな危険な状態にあるなんて想像もできていなかった。考えたくもなかった。いざ現実のことになると怖かった。

「それで、クリームは無事なのか？」

シキはナツミを問い詰めた。

「わからない。今、マフユとハルカに、他のピースのメンバーに、全力でクリームの居場所を探してもらっているから、もう少し待って」

「場所もわからないなんて……。どうして突然さらわれたんだよ」

シキは行方すらわからないことを知って茫然自失状態だったが、同時に怒りもこみ上げてきた。

クリームがなにをしたっていうんだよ。いつも通りよく寝て、食べて、遊んで少しやんちゃしていただけだ。

「前も話したけどいつでもクリームが狙われる可能性はあったの。それが偶然なのか計画的なのか分からないけれど、今日さらわれてしまった。私達も常に警戒していたんだけど、白昼堂々仕掛けてくるとは予想外だった。まさかお昼寝タイムを狙ってくるなんて卑怯

者だよ」

警戒しているのかのんびりしていたのかよくわからない。

「もしかしてお昼寝していたの？」

シキが聞き返すとナツミはびくりとした。

「ちょ、ちよっとお日様を浴びてのんびりしていただけだよ」

目を逸らしながらナツミが言う。

「絶対、居眠りしていたでしょ！」

明らかに眠っていた態度だ。

「大体、ずるいんだよ。ピースだろうが、キヤッツだろうが、お昼はお昼寝の時間っていうのは猫共通の習慣なんだよ。その間に仕掛けようなんて不可侵条約違反だよ。人間との関係を見直す前に猫社会が終わっちゃおうよ」

「やっぱ寝ていたんだ」

猫さんは縄張り意識の強い単行動する動物なだけにやはり不可侵条約があるらしい？遠回しな言い回しだが昼寝をしていたのは事実だったようだ。それにしても小学生の癖に難しい言葉を知っている。この前のパーティー以来どうにも小学生とは思えないような言動が目立つし、猫さんというのはどれだけ博識なのだろうか。そもそも人の言葉をしゃべっている時点で想像以上なのに、ナツミやマフユの言動を見るに人間の面目は丸つぶれだ。

「昼間の時間をナツミに任せるのは間違이었다かな。私は昼間はハルカに任せただけがいつか言ったのに、まんまと出し抜かれちゃった。トラは今日はどうしていたの？」

マフユも焦っているようで、口調が早口になっている。マフユはタブレットみたいなものを慌ただしく操作しているが、見たことのないようなアプリを使っていた。シキがその画面を覗き見ても、見たことのないような文字や記号が現れては消えるだけで、完全に意味不明だった。これはもしかや猫語なのだろうか。

「トラは今もリビングで寝ているはずだ。もしかしてマフユも寝ていたの？」

マフユのあまりの集中力に口を挟むのも申し訳なかったが、シキは気になって聞いた。

「そりゃあ、私は見張りの当番じゃないからね。オンラインゲームはどっこも夜が人口多いんだから夜眠りたくはないよ。それにナツミの言う通り、昼はお昼寝の時間なんだから、私は昼間、当番にならない。トラだって寝ていたみたいだしね」

やっぱり寝ていたらしい。

「トラは昼も夜も寝てばかりだよ」

二人はトラに何か期待しているらしいが、シキにはとてもトラが何かの頼りになるとは思えなかった。トラといえば睡眠。起きている時間のほうが珍しいくらいだ。

「ほら、トラだって寝ているんだから、私が寝ていたってしょうがないよ」

ナツミは突然、元気を取り戻したようだ。

「ナツミとトラじゃ役割が違う。あんたは起きてないため」

「そんによあ」

マフユは再びナツミを叱る。ナツミは再びうなだれた。

「そういえば、トラは凄腕の用心棒じゃなかったの？ クリームの緊急事態なんだし手伝ってもらおうよ」

ありがちな姉妹喧嘩に微笑ましくもあったが、そんな場合でもないシキは口を挟んだ。ナツミ達の話では、トラはクリームの側近の用心棒と言っていた。家での様子を見てみると序列は、クリームの方が上に見えるので、シキにはとても信じられない話だ。

エサの取り合いでは、毎回クリームが先だし、トラはしょっちゅうクリームにちょっかいをかけられていた。用心棒が守っている相手にいじめられるなんて滑稽な話である。人を守る前に、まず自分が守れないと話にならない。

それに、普段からクリームがトラにちょっかいをかけるのは、シキの大きな悩みの種の一つだった。もし、この話が本当ならこんな問題は即解決である。というか問題が起こりもしなかっただろう。

「凄腕ではあるんだけど、ちょっとトラは変わり者なんだよ。普段の行動もどこか気が抜けていて、どんくさいやつに見えるでしょう。だけど、危機的状況になったらすごい力になってくれるはずだよ」
ナツミがシキに熱く語る。

「今が、その危機的状況なんじゃないの？」

シキは鋭い突っ込みを入れる。マフユはさっきエマーゼンシーとか言っていたし、まさにその時だ。

「私達にはそう思えるけど、たぶん、トラにとってはそうじゃないのよ。少なくともトラはクリーム命の危機だとは思ってないんだろっね」

ナツミは冷静に分析する。

「トラの考えていることがシキに分かる？」

ナツミは少し思案した後、シキに聞いた。

「普段からのんびりしていて感情が表に出にくいから、確かにあまり分からないな。クリームならすぐ分かるんだけどね」

シキはトラのあまりの図太さとのんびり屋加減に、表情が動かさず神様みたいだと思っているが、逆に言えば、なに考えているのかさっぱりわからないということでもあった。

「そうでしょう、ずっと一緒に暮らしているシキも分からないんだから、私達に分かるわけがないよ」

「でもさ、そんなにすごいボディガードならトラを起こして助けてもらおう」

シキはトラを呼んでこようと家の中に戻ろうとした。

「それは無理。さっき私がトラに助けてほしいってお願いしたのだけど、私達に任せるって言って丸投げされちゃった」

しかしナツミに止められた。本当にトラはやる気がないらしい。

「それに、お昼寝の邪魔をするな、って怒られちゃったよ」

他の猫さんと同じく、トラもお昼寝の時間だったらしい。とはいえ、トラはいつでも寝てばかりなのだからこんな時くらい動いてほしい。丸々と太ったあの体で本当に伝説のボディガードなんて

勤まるのだろうか。なにもしないうちに噂話だけが伝染して伝説になっただのではないかとシキは疑わざるをえなかった。

「ただ、助けに行くならシキも連れていけって言われてさ。だから、二階にジャンプしてシキを連れ出したんだよ」

そういえば、ナツミ達がシキの部屋に飛び込んでくる少し前に、一階で物音がしたがあれはそういう訳だったのか。クリームがまた暴れているのかなんてシキは思っていたが、とんだ勘違いだった。

「ほんと、トラはなに考えているんだろうね。そういう訳で、シキが嫌って言っても引きずってでも連れて行くから」

ナツミは笑いながら、表情の割になかなか怖い事を言う。

「もちろん。クリームの一大事なんだから何があってもついていくよ。でも引きずって行くのは勘弁してね」

さっきのジャンプを思い返すと、この子たちに全力で引きずられたら、一瞬で真っ赤なミンチになってしまいそうだ。

「そうは言っけどね。シキはこれから何があっても大丈夫だって言いきれる？ 私達はこの前のパーティーの後で、もしかしたらクリームが危険な状態になるから備えといてって言ったよ。でもさ。その時、言ったのはあくまで心の準備をしてほしかったからであって、こんな風な巻き込み方はしたくなかった。本当は私達がクリームを全力で守っておかなきゃいけなかったのに、本当にごめんなさい」

「そんな言い方されたら、まるで僕がなんの助けにもならないような言い方じゃないか？」

足手まといであると全力で言われているようで、シキも傷つく。

「そこまでは思っていないよ。むしろシキが助けになると思っているから。私達はシキにクリームを守ってほしい。クリームが一番愛しているのはあなただと思っている。そして、私達はあなたたちを全力で守る。このあなたたちというのは、クリームとシキが含まれているよ。その目的は、あなたたちにはお互いに幸せに暮らしてほしいということだけ。だから、私達はあの日全てを話した。シキにはクリームの心の支えになってほしかったの。でも、あなた達は充分

に幸せだからそのままできてって言ったの」

こんな状況だというのに、なんだか照れる話をされた。

「そこまで思ってくれているなら、それこそついていかせてくれよ」
逆にナツミ達が躊躇する理由は何なのだろうか？

「はあ、ほんとに察しが悪いなあ。全力でクリームを探している最中なんだから、無駄に疲れさせるなよ」

ずっとタブレットをいじっていたマフユにまた呆れられた。

「私達はクリームと同時にシキも守りたいの。そして、シキに期待していたのはあくまで精神的な役割だけだった。シキはさっきの二階からの飛び降りが怖かったでしょ？」

ナツミは、首をかしげてシキに聞いた。

「ぜ、全然平気だったよ」

シキは強がったが、思い出しただけで震えてきて、声が上がった。

「そう、じゃあ。今から十階建てマンションの屋上から飛び降りても大丈夫だね」

ナツミはとんでもないことを言った。

「そんなの飛び降りられるわけないだろ！」

あまりに突拍子な発言にシキは怒り気味に言った。

「ほら、やっぱり怖いんじゃない」

ナツミはかしげた首を戻して微笑した。

「かまかけたのか？」

見た目は小学生の猫さんは、ずいぶんと頭が切れるみたいなので困る。

「あは。そういつたら認めたことになっちゃうじゃない。シキは分かりやすいなあ」

どうやらシキは二重にかまをかけられていたらしい。見かけによらずナツミはなかなかの策士だ。

「これからシキがついてくるっていうなら、十階から跳び降りるなんて冗談じゃ済まないような行動をすることになるからね。そんな肉体的な行動であなたに期待していることなんて私達にはなかった。

その靴は、いくらか動きのサポートになるかもしれないからつけさせた。でも、本来は猫が人間社会でも自由に動けるように作られた靴だから、人間であるシキに使いこなせるとは思えない。今からそんな誰も体験したことがない世界で動いて、下手したら死ぬことになっちゃうかもしれないけど、それでもついてくる？」

確かにさっきのジャンプは恐ろしかったが、そんなことよりクリームがいなくなってしまうのが、シキが一番恐ろしかった。

「もちろん行くよ。クリームが危ないのに黙って見ているわけにはいかないよ」

そう考えると、震えも止まってシキの決意が固まった。

「本当に猫キチなんだね」

そう一言つぶやいてナツミは大きなため息をつく。

その後、ナツミちゃんも黙って考え込み始めた。静けさであたりが包まれて、聞こえるのは風の音とマフユが慌ただしく操作するタブレットから聞こえるかすかな操作音だけだった。

「そこまで言われたら連れていくしかないね」

ナツミは、丸々一分は考えたあとにようやく決断した。

「よかった。ありがとうナツミ」

シキはクリームがさらわれたと聞いてからこの時まで、ずっと体と心が張りつめていた気がしたが、それを聞いて少し緊張が解けた気がした。

「でも、私達は全力でシキとクリームを守るけど、あなたに命の保証すらできない。そのところ肝に命じておいてね。あと、シキにはクリームの心の支えになってほしいって言ったけど、シキが死んだら傷つく猫がいるってこと。忘れないで」

「念を押されるまでもないよ。僕だって、こんな若くして亡くなりたくはないからね。そして、クリームも助ける」

シキは決意を新たにした。

「これだけ言えたら十分ね。それでも私達には、シキを連れていくメリットがほとんど思いつかないのだけど、あるいはトラにはシキ

を連れていくことで、何が起るのが見えているのかもしれないのね」

ナツミはあきらめ半分といった感じで言った。

「マフユ、クリームがどこに行ったのかまだわからないの？」

そうと決まれば時は一刻を争う。シキはマフユを急かした。

「そうだよ。マフユらしくもない。情報戦ならあなたの右に出るものはいないんだから早く見つけてよ。さっき、昼寝していた私に啖呵を切ったくせに、一体どうしたの？」

シキの頭からすっぽ抜けていたが、マフユはあのゼロその人だった。マフユが使っているタブレットで一体何ができるのかわからないが、機械を操作させたらマフユを上回るものなどそうはいないだろう。そのマフユが全力で探しても見つからないのだから相手も相手がごわいらしい。

しかし時間が過ぎればすぎるほどクリームは遠くに行き、見つかるのもより難しくなっていく、クリームの安否もどんどんと怪しくなるだろう。シキは居ても立っても居られなかった。

「うるさいわね。私だって全力で探しているんだけど、なかなか見つからないんだよ。やっぱり昼間だから、他の猫からの情報がほとんどないのが痛いわ」

マフユは苦々しそうに唇をかんだ。

「それじゃあクリームへの手掛かりはほとんどないってこと？」

シキはがっかりした。

「そんなこと無いよ。他の猫からの情報があれば、それは探す助けになるけど、他にも探す手段はあるから」

確かにマフユのタブレットは、目まぐるしく画面を変えながらいろいろな情報を示しているようだ。それは、時には立体映像を何も無い空中に具現化させるほどで、一体、猫さんの技術力はどれほど進んでいるのかと驚愕させられた。某猫型ロボットが実際に出来てしまったらこんなことになってしまうのだろうか？

これでは、人間様の面目丸つぶれである。ナツミ達とは違う人絶

縁派のキャッツの猫さんが、もしこの技術力を使って人に牙を向けたらと想像すると未恐ろしい。しかし、今回クリームをさらった奴も当然似たような技術を持っているはずだから、これは相当な脅威であった。

「今は何を調べているの？」

シキは、マフユのタブレットを覗き込みながら聞いた。画面にはシキの家を中心にした地図らしき画像の上に、何かの分布を示すようなデータがでていたが、シキにはそれが何を示しているのかさっぱりだった。

「ダークマターの分布だけど、人間には何もわからないよ。衛星からの画像とか周辺の温度や質量の分布とか、そういう人間でもわかる情報も見たのだけどクリームの手がかりはなかなか見つからなくて、猫にしかわからない情報も調べているの」

そう言いながら、マフユは画面をぱらぱらと変えてシキに見せた。「ダークマターか。僕も知っているよ。昨日も晩飯で食べたよ」

実際は、ダークマターなんて言葉を聞いたことあるぐらいの話ではない。ただ、人類が存在しているかもしれないと仮定しているだけの物質ではなかっただろうか。

「人間がダークマターなんて知っているわけないでしょ。そもそも食べ物じゃないし。人間が使う原始的なやり方も役には立つのだけれど、相手もそこは熟知しているみたいで、まるで尻尾がつかめなかったから、いろいろ他の手段を使っているの。それでいくらかクリームがいそうな場所も絞れてきたのだけど、決定打がないのよ」

シキは、ダークマターの分布を見て、心臓がドクンと鼓動を打つのが感じた。

「さすがに見れば分かると思うけど、黒い煙みたいなのが集中している部分がクリームのいそうな候補ね。一匹の猫の個体もつダークマターは人間の指紋みたいなもので、それが示す波動ははっきりと区別できるのだけど、どうも敵はそれすら察知して妨害してきているみたい。これじゃあどれがクリームだか分からないのよ」

マフユは唇を噛みながら悔しそうに言った。

「ああ、もうマフユは仕方ないなあ。私もとりあえずしらみつぶしにあたってみるよ」

横から覗いていたナツミもダークマターの分布を確認した。

「そうね。原始的なやり方だけど今はそれしかないかも。相手もこちらの探索に気づいているみたいだし、どれ程危険な奴かわからないから気をつけてね」

マフユは少し思案した後、ナツミに言った。

「了解。そっちも十分気を付けてね。クリームが見つかったらすぐ連絡しようだい」

そう言うのと、ナツミは一番近くのダークマターの反応があった方向に向かってもの凄い勢いで走り始めた。そのスピードたるや、シキが今まで目視した物体の中では一番速いのではないかと思うほどのものだった。

特に最初の瞬発力が半端じゃなかった。ちょっと力を溜めていたかと思うと、次の瞬間には体が動き始めてあっというまにトップスピードで走り始めた。そのあまりのスピードにシキが驚いている間にナツミは最短距離で行こうとすると邪魔になる家を軽々と飛び越して、あっという間に彼方へと行ってしまった。

「今からシキもあの動きについてきてもらうのだから、そんなに果然としないの。あんなのでびびってたらすぐ死んじゃうよ？」

マフユは呆れながらシキに忠告した。シキはぼかーんとナツミが飛んでいった先を眺めていたが、急にひらめくものがあつた。

「そうだ、万に備えて、クリームには個体識別用のマイクロチップが埋め込んであるんだけど、もしかしてそのタブレットを使えば、マイクロチップで探索できるんじゃないか？」

マイクロチップが埋め込んであるのはあくまで個体識別用のためであつて、無線を発信しているわけではないのだが、ダークマターなんぞが見られる装置を使えばそんなのは朝飯前ではないかと、シキは思ったのだ。

「あのねえ。さっきも言ったけど人間でも分かる情報なら調べたって言ったでしょ。マイクロチップなんて。ぷっ」

マフユはそう言うと、言葉を詰まらせて吹き出してしまった。

「あはは、あんなものに埋め込まれちゃうんじゃ、人絶縁派だっ て出ちゃうよね。私、猫だけ猫に同情しちゃうわ。そんなもの相手も分かっているから、マイクロチップからじゃ何も情報は得られないわ」

マフユはようやく笑いが収まると冷静に言った。

「マフユ、さっき見せてくれたダークマターの分布の画面をもう一回見せてくれないか」

シキはなんとかクリームの方を見つげ出そうと必死だった。

「いいけど、さっき以上の情報なんてないわよ。反応のどれかは間違いなくクリームを示すんだけどね」

シキは先程ちらつと見せてもらった時とは比べ物にならないくらい凝視した。すると、さっき以上に心臓が脈打つを感じた。この感覚がなんなのかシキにも理解できなかったが、とにかくクリームの行方を見つけたかった。

「他の情報も見せてもらえる？」

シキはマフユにきつい口調で催促した。

「いいけど、何も分からないでしょう？ 何か見て分かることでもあったの？」

マフユは、いぶかしげな表情で渋々応じた。

「確かに、見ても何も分からないけど、何かわかるような気がするんだ。何か感じるって言うのかな。上手く説明することができないんだけどとにかく見せてよ」

「感じる。ねえ？ 私がそんなもの信用していないから、こうやって情報を集めまくって真実をつかもうとしているのに、感性だけでクリームを見つげようって言うの？」

「そうだよ。ダークマターなんて聞いたことすらないし、僕にはそれしか頼るものがないんだからしょうがないだろう」

シキはタブレットに映る情報を見てもほとんど何もわからなかったが、クリームを見つけたいと必死に願う思いだけは確かにあった。「馬鹿馬鹿しい。そんなんだからあなた達は私にゲームで勝てないのよ。世の中の事情は全部理屈で説明できるの」

この言い方から想像するに、世界一のゲーマーの可能性のあるゼ口は、理屈中心で物事を考えられる猫さんのようだった。もし、この考え方でゲームも支配しているのだとしたら凄まじすぎる。運要素も絡めてゲームを考えているシキの理解を、マフユは完全に超えている存在だった。

マフユはそんな風に言いながらも、シキにいろいろな情報を教えてくれた。どこから撮ったのかすら分からないが、上空から撮った画像や、周囲の熱の分布、細かい気圧配置などの一応人間が分かる情報から、魚配置、ねずみ配置、へび配置などの一体どこからできたのか分からない猫さん特有の情報まで様々だった。シキは新しい情報を見るごとに意識が覚醒していくのを感じた。

「それで、シキは何かわかったのかな？ 私には見返しても、特に新しい情報は見つけれなかったんだけど」

マフユは自分が何も見つけられないのに、シキが何かを見つけてくれるはずがないと確信している様子で、シキに挑発的に言った。

「確かに何も分からなかったよ」

シキはタブレットに映る情報の説明を聞きながらうんうんと頷いたり、適当に相槌を打ったりしていたが、結局ほとんど何も理解すらできていなかった。こんな状態ではクリームの居場所なんて分かるはずがない。

マフユもそれを理解していたようで、最初はマフユにしては、はりきって説明しているように見えたが、新しい情報をシキに見せるごとに、マフユのテンションが段々と下がっていくのがはっきりとシキにも分かっていた。

「ほらね。いいから私に任せときなさい」

マフユはため息をついて改めてクリームを探そうとした。

「もう一回、ダークマターの分布を見せてよ」

シキは確かに何もわからなかったのだが、また何かもやもやとするものが頭にあった。

「もう散々見たでしょう？ さつきから何も変わってないって」

マフユはうんざりしたように言った。それでも画面を切り替えてくれたが、確かにダークマターの分布は先程とほとんど変わってないようだ。そもそも、シキにはさつきとの違いや映像が何を示しているのかはつきりと理解できるものはなかった。

しかし、さつきまでと違って、ダークマターが濃いと思われる箇所の一つにシキの目は釘付けになる。

全身の血が熱くなるのを感じる。

何に導かれたのかシキの手がその箇所に向かって自然と伸びる。

「ちよっと、勝手に触ろうとしないですよ」

マフユの静止も間に合わず、シキの指先がマフユのタブレットに触れた。その瞬間、シキの指先から電流が流れたかのような感覚が走り、タブレットが激しく光り始めた。

「にゃあああ。なにこれは！」

今まで、驚きの表情など一度も見せることがなかったマフユが、激しく動揺していた。自分のタブレットが突然、意味不明な動きを始めたらそりゃあこうなるだろう。シキもこの事態には驚かされた。タブレットは数秒間激しい発光を見せた後、思いもかけない情報をシキ達に見せた。そこには、何者かの腕の中で気を失っているクリームの動画が映し出されていた。さらに、場所を示すであろう点が、さつきシキが触った箇所にはつきりと示されていた。

「クリーム！」

タブレットには連れ去られているクリームの映像が出ていた。映像のインパクトは凄まじく、シキは激しく動揺させられた。

「まさか、これは！」

動揺していたマフユが我に返ると、突然何かに気づいたようだった。

「この映像がクリームの現状なの？」

突然出たこの映像がクリームの今なのかはつきり分からず、シキはマフユに聞いた。

「そうよ」

マフユは短く答えた。

「じゃあ、早く助けに行かなくちゃ」

「もちろん、今すぐ行くよ」

マフユはタブレットを少し操作すると、ハンズフリーの電話のように使い始めた。

「ナツミ！ 聞こえる？」

ナツミはすぐに応答した。

「もしもし、マフユ。聞こえているよ。こっちは二か所調べ終わったのだけど、どっちも空振りだった。そっちはどう？」

「クリームの居場所がわかったわ。さっきのダークマターの反応の一つ、そっちにデータ転送しているからすぐ来て」

「あんなにさっぱりだったのに、もう見つかったの？ 分かった。すぐそっちに行くわ」

プツッ。

会話が終わるとすぐに通信が切れたような音がした。

「これで、ナツミもすぐ追いついてくれるわ。じゃあ、私達も行くわよ」

マフユはその場にしゃがみ込んで、静止した。

シキには妙なデジャブ感があり、その場に静止したまま固まっていた。

「何やっているの？ 早く乗りなさいよ」

マフユはシキが動かないと見ると、イライラした口調でシキに促した。

「もしかして、またおんぶしてもらうんですか？」

さっきのジャンプを思い出して、何故かシキは丁寧に聞いた。

「はあ？ 今更何言っているの？ さっき覚悟が決まったようない

と言っておいて、じゃあここに置いていこうか？ さっさと乗れ」
シキが戸惑っているのを見たマフユは、強引にシキを背中に乗せると、さっきと同様に力を溜めるような動作をした。

「ちよつと待って！ まだ心の準備が「よーいどん」」

シキのセリフは途中で、マフユの合図にかき消された。同時に、信じられないほどの水平方向のGがシキに襲いかかった。

マフユが動き始めてすぐに、シキはさっきの大ジャンプが序の口だったと思い知らされた。マフユは周りの車がただの一閃としか捉えられないような速さで駆け回り、そこら辺の建物をまるでハードルのように平気で飛び越える。

さっき、ナツミが駆け出すのを見ていたシキは、こんな風になるのではないかと嫌な予感がしていたのだが、シキ自身も驚いたことにほとんど恐怖感とは沸き起こらなかった。

シキは常識外れの速さがもたらす様々な物理現象に心地良さすら感じていた。シキの体を横切る風を爽快に感じ、風を切る音は心地良いメロディーに聞こえた。今ならなんでもできそうな気がする。そんな根拠のない自信すらシキには出てくるほどだった。

猫さんは普段からこんな感覚を味わっているのだろうか。シキはのんびりしている猫さんのほうが、活発的に活動している猫さんより好みだったが、価値観が変わりそうなほどのショックがあった。

「さっきの大ジャンプでは絶叫していたのに、今度は随分と落ち着いているのね。もうこの動きに慣れたの？」

マフユはダッシュで飛び回りながらも首だけ上方向に思い切り傾げながら、興味あるのかないのかよくわからない抑揚の無い声でシキに聞いた。

「さっきは突然のことではびっくりしたけど、こんな動き人生初めてで。すごいよ！」

シキは興奮しながら追い風に負けないような大声で応えた。マフユの疾走がもたらす逆風で声が震えて伝わるような感覚も不思議な

ものだ。

「こんな重い荷物背負っていたら、私は普段の力の半分も出せないのだけどシキが楽しそうならよかった」

そう言つとマフユは、ちよつとだけ笑顔を見せた。

「これで半分の力つて全力をだしたらどうなつちゃうの？」

「そんなことしたら、シキじゃあつという間に死んじゃうよ。全力、出してみようか？」

「じゃあ半分の力でお願ひします」

のんびんだらりと暮らしながら死んでいくくらいなら、最高の感動の味わいを味わいながら死ぬのも悪くないと少しは考えているシキではあるが、この瞬間にそこまでする気にはなれないのでやっぱりと断つた。

「とは言つても、シキが乗っているせいで半分の力も出せないのだから、これが今出せる全速力なんだよねえ」

「重い荷物を背負わせちゃつて、ごめんさい」

どう見ても体形的に上下が逆のおんぶをするだけでも凄まじいのに、その上でこれだけの動きをしているのだからさすがのマフユも限界らしい。シキは申し訳ない気持ちになつて謝つた。

「いいのいいの。絵面的にはアウトかもしれないけど、逮捕されるならシキだろうし私は気にならないね。それに案外、私が全力を出せたとしても、シキなら耐えられるかもしれないよ」

マフユはシキの重さなど大して苦にしていないうだった。

「全力を出したら僕は死ぬ。さつきマフユが言っていたのに、耐えられるかもしれないつてどういうことだよ？ はっきり矛盾することを言っているけど、マフユらしく、いやゼロらしくないんじゃないか？」

シキの知るマフユは、理屈で百パーセント物事を解釈する最強のゲーマー、ゼロだ。そのマフユが不確定の要素が前提にあるような話をするのはおかしい。

「そうでもないよ。人間が考えたゲームで、相手が人間なら百パー

セント理詰めで解けるけどさ。そこまででしょ。さらに上を目指そうとするならそれだけじゃ足りないじゃん。だから、常に不確定な要素も考慮しているんだよ」

「なんか随分印象と違う話だなあ」

「ぱつと見の印象だけで物事、話したつてしようがないでしょう。確かに、シキとかみたいな人間とゲームするときは、そこまでする必要もないんだけどね」

突然、シキを疾風が襲った。

ずっと高速で移動していた間、シキ達を逆風が襲っていたのだが、新幹線がホームを通過するときを感じる横風のさらに強烈な衝撃にシキは思わず面食らった。

「やつと追いついたあ。お待たせ」

シキが目を開けるとマフユ達の横をナツミが軽々と並走していた。マフユが半分のみしか出せていないというのは、本当らしくナツミはスキップ混じりの足取りだった。

「それで、どうやってクリームを見つけたの？ あんなに手間取っていたのに？」

ナツミは、息一つ荒げる様子もなくマフユ達に聞いた。

「どうやったんだろうね？ 私にも分からないよ」

するとシキにも予想外の一言がマフユから飛び出した。シキにはそれは明らかに思えた。マフユが持っているタブレットが情報を示したのだから、そういう目的の位置を見つけ出す機能を備えたタブレットだったというそれだけのことじゃないのだろうか？

「マフユにも分からない？ そんなことがあるわけ？」

ナツミもシキと同じくびっくり仰天という感じだった。

「そりゃあ、あるわよ。大体、クリームを見つけたのはシキなんだから」

「ええ！？ シキが見つけたの？」

ナツミがさらに驚く。

シキも驚かされたが、驚かされるというよりは面食らった。

シキはマフユが操作するタブレットを見ていただけで、何もして
いないのだからシキはクリームを助ける役に何もたなかつたのだ。
猫の手も借りたいということわざがあるが、むしろ猫さんの手しか
使わずにクリームを見つけたのだからシキの立つ瀬がない。

「何言っているんだよ。マフユがクリームを見つけたんじゃないか」
「しつこいなあ。私が見つけたんじゃないって言っているでしょ」

マフユはどうにも釈然としないようで、若干いらいらしながら言
った。

「でも明らかじゃないか？ あのタブレットが情報を示したんだか
ら、そういう機能を備えていたんじゃないの？ いろいろな情報を
統合して自動的にクリームの場所を示してくれたとかそういうこと
なんじゃないの？」

シキは特になんの疑問も持たず明確であろうことを聞いた。マフ
ユは特に様子も変わらずシキの話を聞いていたが、ナツミは非常に
驚いたようで呆然としていた。

「何も知らない貴方から見たらそう見えるかもしれないわね」

「シキは、にゃんフォンに何かしたの？」

ナツミはマフユに尋ねた。あのタブレットはにゃんフォンと言っ
らしい。

「何をしたんだらうね？ 私はシキににゃんフォンが出したクリー
ムの手がかりをいくつか見せただけ。そして、シキがにゃんフォン
に触れたら突然にゃんフォンが輝きだして、クリームの現状をあつ
さりとしてくれた。今、分かっている事実はそれだけで、私には
なんでそうなったのか分からない。シキは絶対に私達以上に何をや
って、何を起こしたのか理解していない。無意識でやったんだらう
ね」

「分からないってどういうことだよ」

こんなことはシキがナツミ達に会って初めてだった。シキがナツ
ミ達の言っていることが理解できずに置いてきぼりを食らうことは
多々あったが、シキがやっていることをナツミ達が理解できないな

んてことはなかった。マフユの言う通り、シキ自身も何をやったのかさっぱりわからなかったのだが、何をしたというのだろうか。

「文字通り、シキがじゃんフォンに何をしたのか分からないってこと。あのじゃんフォンは私が開発したスーパータブレットだけど、あんな機能を付けた覚えはないのよ」

「なんだって!？」

あんな機械をこんな見た目小学生の女の子が作ったとは、シキには到底信じられなかった。いや、あのゼロだと考えれば不可能を可能にしまってもおかしくはない。

しかし、作った本人が知らない機能があるとはどういうわけだろう。昨今の人間が作っている機械は複雑になりすぎて、全機能を掌握している人間なんか実は一人もないのに動いている機械が山ほどある。じゃんフォンもそういう類のもので、マフユも一部の機能を作っただけということなのだろうか。

「なんだって!？ はこつちのセリフよ。どうやって、シキは、クリームの居場所を出したの?」

「どうやって? あの情報は勝手にじゃんフォンが導き出してくれたんじゃないの? あの時、僕はじゃんフォンに触っただけで他に何もしていないよ」

本当にシキがクリームの情報を見つけたらしいが、シキには心当たりは全くなかった。

「このじゃんフォンは私が一から十まで仕込んだ傑作で、私は組み込んだ機能を全部知っている。シキに見せたダークマターの分布とか、クリームへの手がかりを示したアプリは全部私も慣れ親しんだものだったよ。だけどさ、クリームの居場所と状況を出したあの画面は私にも全く覚えがないもので、じゃんフォンにプリインストールされているものじゃないのよ」

文章だけ見たらこれが小学生の発言だと誰が信じるだろうか。マフユは淡々と説明する。

「でも実は、このじゃんフォンには不確定要素を設計思想にかなり

取り入れているんだよね。詳しい説明は省くけど、端的に言えば、自己学習機能と自己開発機能を備えていて、ユーザーの使い方によって必要である機能を自ら学習して生み出すことが出来るように作ってあるの。元々あるスペックだけでも人間の技術力くらいははるかに越えているけど、この自己学習機能がこのにゃんフォンの目玉」

マフユは、自分のにゃんフォンをシキに見せながら自慢げだ。

「じゃあ、その自己学習機能でにゃんフォンが、新たにクリームの状況を示す機能を作り出したってことなの？」

シキは一応、概略だけは理解してマフユに聞いた。

「確かに私もそういう解釈しかできないわね。でもね、いくら自己学習機能が付いているって言うっても、一瞬で必要な機能を作り出せるほど、凄まじい学習能力はにゃんフォンにはないわ。にゃんフォンの性能をいくら高めてもやっぱり自分で考えさせるのは難しくてね。そんな短時間で何かを作り上げることはできないはず」

マフユは少し考え込む。

「それにクリームの居場所を見つけ出す時ににゃんフォンが輝きだしたでしょう。今まで持ち主に応じているいろいろ変化するにゃんフォンを見たけど、あんな風に光輝くのは初めて見たわ。考えられることがあるとすれば、やっぱりあの時シキが何かしたの」

マフユはいぶかしげにシキをにらみつけた。

「さすが、シキ。やればできると思っていたよ」

ナツミは感心したようだ。

「ナツミは私がいらいらしているのが面白いだけでしょ」

マフユはさらにいらいらしているようだっつた。

「確かにそれもあるけど、素直にシキに驚いたんだよ。そりゃあ今まで見たこともないくらいのとんでもない猫キチだし、常人じゃできないことができてもおかしくないって！」

「でも、本当にあの時何をしたのかわからないよ」

あの時、シキはただクリームを見つけない一心で、にゃんフォンになんとか一縷の望みを託していただけだ。

「だからマフユも言っているでしょ。不確定要素もあるんだって」
ナツミは、特に分からずに納得しているようだった。

「そういうことよ」

マフユもひとまずは納得したようだった。

「ところで、クリームにはまだ追いつけそうにないの？」

もうシキ達は随分と長い距離を移動してきてはいたが、未だに追いつけないのがシキの不安を煽った。

「それが、どうも向こうも気づいたらしくて、私達から逃げ始めたのよ。あっちも動けないクリームを連れてくるはずだし足はそんなに速くないんだけど、こっちも誰かさんみたいなお荷物を背負っているせいで、まったく距離が詰められないの」

マフユの一言に、誰かさんはとても気が沈んだ。

「あらら、それは困ったね」

ナツミも同調する。

「クリームに追いつけなきゃなんともならないんだから、僕を置いてきぼりにしてもクリームを全力で追いかけてくれないか。そうすれば、二人なら追いつけるでしょ。それにこの道中ではつきり気づかされたけど、僕じゃとても力になれないよ。なんとか二人で、クリームを助けて家に連れて帰ってきてよ」

いくらクリームを助けたいとシキが願っても、この戦いの足手まといになるであろうことはもう十分に理解できた。そして、この二人ならクリームを助けてくれるであろうことも確信がもてた。だから、シキは最善の選択として自分は戦いを離脱することを選んだ。「なによ。舌の根も乾かないうちからもう降りようっていうの？」

シキ

ナツミはからかうように言った。だが、シキの決心は変わらずうなずく。

「降りしてくれよ。マフユ。僕を置いて、二人が全力を出せばすぐ追いつけるだろう」

「確かにそうね」

「でも残念。私達はシキも連れていくつて決めたんだから、今更置いてきぼりになんかしてあげない」

ナツミは笑顔でシキに言う。そういうイタズラな笑顔はマフユの専売特許ではなかったのだろうか。なんで足手まといだと自分で認めたシキをナツミは連れて行きたがるのか、シキには理解不能だ。

「でもそれじゃあ、いつまでたつてもクリームに追いつけないだろう。僕を連れていってクリームをどうやって助けるんだよ」

シキは再度、ナツミ達に言った。

「シキをここに置いてきぼりにすることは、私も絶対にしないけど、このままじゃクリームに追いつけないのも確かだね。ナツミどうする？ ナツミだけでも先に行かせて足止めだけでもらつて、私達が後で合流するのがいい手かと私は思うんだけどどうかな？」

「確かにそれもいい手だけどその必要はないにゃ」

二人揃つて断固としてシキも連れていくつもりのようなのだが、二人の意見は少し違った。マフユはナツミを先行させて、ナツミはシキも一緒に連れていくような考えのようだ。マフユの案なら、ナツミ一人で相手の足止めができるならという前提ではあるが、シキ達も後追いで追いつけるだろう。

しかしナツミは、シキを連れていては追いつけないのに全員一緒に行こうと考えているらしい。ナツミでは足止めできる自信がないほど危険な相手ということだろうか。

「まさか、あんた足止めもできないほど怖気ついているの？」

マフユも同様の想いを抱いたらしく、ナツミに鋭く指摘した。

「いくらなんでも足止めくらいはできる自信はあるよ。でも万が一さらった奴らの正体は何も分かつてないんでしょう。それなら無鉄砲に突っ込む意味はないにゃん」

ナツミは、自分の案に確信を持っている様子で、自信たつぷりに言った。

「確かにその通りだけど、それじゃあ突っ込むことすらできないっ

「言っているの！」

マフユはナツミに一番の問題を指摘した。

「それはマフユがシキを背負っているからでしょ？ シキにも一緒に走ってもらえばいいんだよ」

ナツミはそんなことは当然だろうという風に言った。

「そんなことできるわけないだろう！ ナツミ達のスピードに付いていくことなんて絶対できないよ。人間の全力をどれくらいだと思っっているの？」

この子達のスピードなら、世界最速の人間でも余裕で置いてきぼりだ。

「普通の人間と普通の状況なら当然無理だよ。私達もそれくらい分かっているって」

ナツミは極めて冷静だった。

「僕も普通の人間だよ」

状況は全然普通じゃないけど。

「いいや、シキは普通じゃないよ。シキほどの猫キチを私達は初めて見たわ。それに、にゃんフォンだって普通の人間には、使うことすらできないんだよ」

猫キチは知り合いにもよく言われていたし、ナツミ達にもそう思われていることは分かっていたので特に気にならなかった。むしろ嬉しさすら感じた。しかし、にゃんフォンが普通の人間には使えないとはどういうことだろう？

「確かにね。そういうことか。にゃんダブルシューズをシキに使わせようってことね」

シキより百倍は状況を理解しているマフユは、瞬時にナツミの案を把握したようだ。

「ご名答。さすがマフユ。頭の回転が速くて助かるねえ。で、シキは分かった？」

シキが分かっていることを、明らかに分かっている様子でナツミはシキに聞いた。

「さっぱり分からなかったけど、この靴には何か秘密があるのかな？ それでなんとかしようってこと？」

シキに文脈から推測できるのはこれくらいだった。

「予想以上に伝わって驚いたよ」

ナツミは驚いているのか、冷やかしているのか、よくわからなかった。

「にゃんダフルシューズは、人型になった猫が猫の運動能力をフルに発揮できるように私が開発した靴でさ。猫の動きをリアルにイメージできないと使いこなすことができないような設計になっているの。猫ならそんなこと簡単にイメージできるのだから、どんな猫でも使いこなせるよ。でも、人間がどんなに猫の動きをイメージしたとしても、大体その想像は実際の猫の動きとは乖離したものになってしまうから、こんなのただのかわいい靴に成り下がってしまうわけよ。逆に言えば、イメージ次第でこの靴の可能性も無限にあるんだけどね」

さつきシキがにゃんフォンの予想されていなかった機能を作り出したのと似たような理屈だろうか？

「それで、このにゃんダフルシューズを使って、ナツミ達と一緒に走れってことなの？」

どうもナツミの考えはそういうことらしい。

「そうそう。シキもやっとな私達の話についてこられるようになってきたね。その調子で私達について走ってきてね。シキにその靴を履かせたのはこのためなんだから。精一杯、猫のイメージをしてね」

ナツミはそう言うと、マフユの背中からシキをひっぺがし始めた。

「ちょ、ちょっと待って。まだ心の準備が」

シキは慌てて抵抗した。

「もうそんな時間ないの。人間には、習うより慣れろって言葉があるでしょ」

「私は左手を握るから、マフユはシキの右手をしっかりと握ってサポートしてあげてね」

「上手くいくといいけどね。降ろした瞬間吹っ飛ばなきゃいいけど」マフユの背中からシキが離される刹那、マフユは背筋の凍りそうなことを言った。シキはこうなったナツミ達を止めることは不可能だと身に染みていたので、堪忍してとにかく全力で猫さんの動きをイメージしながら、なんとか走ることをイメージしていた。

マフユの背中から引っ剥がされた瞬間、シキは時間が止まったような感覚を覚えた。

地面に足が着くまでの時間をとても長く感じる。

その瞬間、自分はどうなってしまうのだろうか？

あまりのスピードに耐えられず地面と激突してしまうのではないだろうか。

地面にシキが足がぶつかるときの刹那、シキの両の手がそれぞれ強く握られるのを感じた。スローモーションで流れるシキの目線が二人の目線を確かに捉えた。

思い起こされるのはあの愛すべきクリームが走る姿だ。

今まで階段競争では一度も勝てたことがないシキだったが、負けるときでもシキの足元を駆けていくクリームを見るのはとても楽しかった。外出中のクリームのが心配になって、シキが家の玄関先を開けて、それを察知したクリームがどこからともなく駆けてくるのを見ると、ほっとして気分が晴れた。

今、ここでシキがついていくことができなければもうその姿を二度と見ることができないかもしれない。シキは人生で今までしたことがないほど集中して、クリームの走る姿をイメージした。

人生で一番長く感じた一步を踏み出した瞬間、またしてもシキを強烈な突風が襲う。

マフユにおんぶされていた時とは比べ物にならないような速度でシキは走っている。先程も新幹線と同じくらいの速さはあったのだと思うが、今や音速の領域まで届こうかという速さだ。

どうやってこんな速さで走っているのかシキ自身も分からなかったが、クリームのことをイメージすれば自然と常識外れな走りをして

やんだフルシューズが補助してくれているようだった。

「さっすが、猫キチ。いきなりそんな速さで走れるなんて、危うく私が置いて行かれるところだったよ」

ナツミはシキの足がついた瞬間こそ一歩遅れたが、一歩先でシキを誘導しながらシキに振り向いて言った。

「地に着いた瞬間ミンチになるかもと思っていただけ、これならあつという間に追いつくよ。準備はいいシキ？」

相変わらず毒舌のマフユはシキとほぼ横一線で走りながら、恐ろしいことを言った。もし走れなかったら、新幹線から飛び降りたのと同じような惨劇が引き起こされたのかと思うとぞつとする。だが、このぞつとする感覚はたぶん別のところから来たものだろう。

「これが、本当の猫の世界か！　すごいよ！」

シキは音速の世界がもたらす非常識な感覚と、クリームを思う気持ちで異常に気分が高まっていくのを感じた。

「すぐ着くから待っているよ。クリーム」

シキ達は、猫さん好きの聖地。猫拝山の方へと風を切りながら駆けける。

第五章 アンコとクリーム(前書き)

2016/5/5 表示乱れていたなので微修正しました。

第五章 アンコとクリーム

第五章 アンコとクリーム

「シキ！ ブレーキかけて」

ナツミがシキの手をより力強く握りながら叫ぶと、ナツミとマフコは一気にスピードを落とすとした。

「へ？」

ところが、シキのほうは全くブレーキをかける心構えをしておらず、ナツミ達が止まるまでの束の間に反応できたことは、ただ一文字、発することだけだった。

ナツミとマフコが急ブレーキをかけるとあっさりとその場で止まったが、ほとんどブレーキをかけられなかったシキの両手には、慣性の法則によってナツミ達でも支えられない力が掛かり、シキの体ごとすっぽ抜けて吹き飛んでしまった。

バサバサガサガサ！

空中に吹き飛び、何にも抵抗できなくなったシキは、そのまま派手に繁みに突っ込んだ。ナツミとマフコの最後のブレーキによりいくらか力を押さえられたとはいえ、その衝撃は凄まじく辺りに派手な轟音を響かせ、辺りに埃を立ち上らせた。

「シキ大丈夫！？ あんなにあっさり走れたんだから、楽々止まれるものだと思っていたから油断していたよ。だいじょうぶうー！？」

ナツミはシキが埋まっている茂みに向かって叫んだ。

「完全に計算外だったにや。あんなに簡単に走れたのだから楽々止まれるものだと思っていたけど、どうやらシキには止まるイメージというのとはなかったみたいね。死んでなきゃいいんだけど」

マフコは冷静に分析したがかなり心配している様子で、繁みを見つめていた。

シキが突っ込んだのは藤の木の子茂る藤棚。春には綺麗な花を咲かせる藤だが、今は青々と葉っぱを広げている。

「クリーム大丈夫か!？」

二人の心配に反して、ピンピンした様子でシキが繁みから飛び出してきて、真っ先にクリームの無事を確認しようとクリームを捕らえた奴の方へと向かった。

「猫キチさんのほうが大丈夫なの？」

ところが、シキは血まみれで繁みから飛び出してきたので、敵の方に心配される始末だった。

横たわるクリームの傍にいたのは、シキが常連として通っているコンビニで働いている黒髪の綺麗なお姉さんだった。名札をちらっと見たこともあるので、シキは名前も知っていた。確かアンコさんだ。

わざわざクリームをさらって行くような人間がいるわけがないし、この人も本当の姿は猫さんなのだろうか。そして、ナツミ達の話からすると人絶縁派のキャッツの一員なのだろうか。

「待って! シキ! 落ちて着いて! やけくそに突っ込んだら相手の思っつぽだよ」

慌ててマフユがシキを押さえ込んだ。

「うるさい! クリームがすぐそこで倒れているのにじっとしているのか! お前がクリームをさらったのか?」

「いらっしやいませ。おにいちゃん。あなたなら来ると思っていたよ」

お姉さんは嬉しそうに笑顔でシキに話しかけた。口調から間違いなく猫さんとわかる話し方だった。シキはナツミ達といるいろ話すことで気づいたが、どうも猫さんは苦手な発音がいくつもあるらしく、おにいちゃんって言おうとするとおにいちゃんになってしまうらしい。いつも店を訪れたときと変わらない笑顔と声にシキは戸惑った。

「本当にお姉さんがクリームをさらったのか?」

お姉さんの足元には気を失っているらしいクリームが横になっていた。疑いようもない状態ではあったが、目の前の現実が信じられずにシキは聞いた。

「そう、私がクリームをさらったのよ、常連の猫キチさん。私はアソコっていつの。よろしくね」

シキはどうやら店で変なあだ名を付けられているらしかった。普通の人間ならこんな風なあだ名をつけられたら不快に思うものだろうが、シキにとってはただの褒め言葉だったので少し嬉しくなってきた。気が緩んだ。

「シキ！ 何お人好しなこと言っているの？ 状況を見れば明らかでしょう。こいつがクリームをさらった犯人よ」

ナツミは声を張り上げて言う。

「シキ、ここでまずは私達の戦いを見ときなさい。にゃんダフルシユーズで走れたからって、ブレーキをかけることすらできないのにいきなり戦えるわけもないでしょう。それに、まずはその出血を止めないと」

マフユは未だに出血を止まらないシキを落ち着かせようとした。「分かった。とりあえずマフユ達に任せるよ。クリームを絶対助けなさい」

かっかしていたシキではあったが、状況が見えてきて少し落ち着きを取り戻し始めていた。同時にさっきの衝突の切り傷や打ち身の痛みが体中に響いてくるのを感じた。

さらに、マフユやナツミの表情に未だにシキが持っていた「この子達は、ちょっと異常な超能力をもっている普通の小学生なのではないか？」という幻想を打ち砕く、鬼気迫るものがあつた。

シキはマフユには渋々納得するように見せたが、実際にはうんとうなずくしかないよう脅された感じだった。小学生にしか見えない相手にこんな無言の圧力をかけられるのは、シキにとって初めての経験だ。

「それでよし。ここでまずは私達の戦いを見ときなさい」

マフコはそう言つと、アンコの方へ向き直つた。

「行くよ、ナツミ」

「うん」

二人は息を合わせて、クリームを助けようとアンコに仕掛けようとする。

「おつと、それ以上近づくとクリームがどうなつても知らないよ」

ところが二人はアンコの一言に急ブレーキをかける。アンコはクリームの首根っこを捕まえて、脅しをかけながらナツミ達から距離をとる。

首根っこを捕まれるあの捕まえ方は猫さんをじつとさせるのに有効だということ、シキはよく知っていたのではつとさせられた。特に子猫に危機が迫つたとき、親猫が子猫のあの部分を口でくわえて逃げる習性がある。そんな時に子猫が暴れてしまつては自由に逃げることもできないから、本能的に猫さんはあの部分を捕まえたらじつとしてしまうのだ。そうやつて首根っこを捕まれた猫さんのだらーとした姿を語らせたならシキは止まらないが今はそんな場合ではない。

ともかく、クリームもその例に漏れずじつとしていた。というか、こんな状況なのにクリームはなぜ起きないのだろうか？ 猫さんが長時間眠る理由の一つに、人と比べて猫さんは眠りが浅いからというのがある。浅い眠りを繰り返し長時間することで睡眠量を稼いでいるのだ。そもそも睡眠というのは自然界においては外敵から狙われるかなり危険な行為で、悠々と寝ているのは人間くらいのもだろう。猫さんは浅い眠りをする事で、身の回りに危険が迫つたときや、特に危険じゃなくてもその場に変化があつたときにすぐに対応することができる。

だから、こんな状況になる間にクリームが起きる機会などいくらでもあつたはずなのだ。

「卑怯者」

マフコが一言吐き捨てるが、ここはおとなしく相手の言うことに

従って、アncioから一步距離をとりながらその場で止まった。

「卑怯者ねえ。この場においてクリームの安否がお互いにとって、一番の気がかりなんだからさ。それを最大限利用するのは当然のことでしょう」

アncioは楽しそうに言った。

「なんで、クリームにそんなひどいことするんだ！ 返してくれ」

シキはまだ状況が飲み込めていなかったが、このおしゃべりでアncioがクリームをさらったことだけは断定して、怒りながらもアncioを刺激しないように懇願した。

「そんなに心配しないで大丈夫。クリームには少し眠ってもらっているだけだよ。それに私にとっても大事な人質なのだから、簡単に傷つけたりしないよ。もちろん、猫キチさん達が無理にでも仕掛けてくるなら保証はしないけどね」

今すぐにクリームがどうこうなることはなさそうだが、どうすれば無事に取り戻せるだろうか。とりあえず、ここは探りを入れながら様子を見るしかない。もしアncioに隙ができれば、臨戦態勢のナツミとマフユがすかさずクリームを助け出してくれるだろう。

「クリームを人質にとって、目的はなんなんだ？」

「あれれ？ 猫キチさんはもう分かっているんじゃないの？ だから、こんなところまで来たんじゃないの？」

アncioは首をかしげて、シキに聞き返した。

「猫さんの間でピースとキャッツの争いがあるっていうのはマフユ達から聞いた。だからお前もキャッツの一員なんだろう？ それでピースのリーダー格であるクリームを狙おうっていうんだろう？」

シキは以前ナツミ達に聞かされたクリームに迫る脅威の話を、そのままアncioに言った。

「大筋は合っているかもしれないけど、私はちよつと違うにゃ」

「そんな馬鹿な。クリームを狙う猫なんてキャッツに決まっている。クリームが私達ピースのリーダーなんていうのは猫社会の常識なんだから、わざわざ他の理由でクリームを狙うような物好きなんてい

ないわ。私達が黙っていないもの。だから、これは私達を惑わす作戦に違いないわ。シキ、だまされちゃだめよ」

マフユも相手の目的と素性は測りかねているらしいが、シキにはなんとも判断のつかない話だった。ただ、相手のペースに乗せられるのはよくないので信用できるマフユの意見に同調しておいたほうがいいだろうとシキは思った。

「私達の警戒網をくぐってクリームをさらった器量や、私達の追跡に対する逃げ方を考えるとこいつも相当な実力者だし気をつけたほうがいいわ」

ナツミもマフユと似たような意見らしい。

「まあ、猫お二人さんが私のことをどう考えるかなんてどうでもいいんだけどさ。猫キチさんは、猫が人間と同じように群れを作って生きているわけじゃないことを知っているよね。私達の普通は、むしろ単独行動で生きることなのよ。だから、広い目で見たら私の行動はキャッツとしての行動に見えるかもしれないけれど、実際はその一派と似たような考えを持つ猫の単独行動ってわけよ」

「まさかそんなことが」

マフユは驚いているようだが、シキにとっては、猫さんがピースやキャッツのような組織を作って動いているイメージより、単独行動をしているイメージの方が全然強いので、アンコの発言には説得力があった。

「そこのお二人さんやピースのみなさんは、キャッツのグループの行動ばかり注目していたから、私一人で行動すればその穴をつくのは大して難しくなかった。人間だって、普段はみんなが個人を殺して理路整然とルールを守って生きること、社会のルールは綺麗に回っているように見えるけど、意外と単独行動のどっかの誰かさんがそのルールを外した動きをすると脆かったりするでしょう」

アンコはこの場で特に脅威になりそうなナツミとマフユには、何故かほとんど注意を示さず興味もないような雰囲気、この長ったらしいセリフをシキにだけ向けて言った。猫さんの人間との行動性

の違いは、今更シキが思い返すようなことでもない。そういう一匹狼で自由なところはシキが猫さんを好きになる一番の理由でもあった。あの自由さは、普段、人間の日常生活で感じる窮屈さを忘れさせてくれる。

「じゃあ、お前はあくまで個人的な理由でクリームを襲ったって言うのか？」

いくらシキが自由な猫さんを好きであろうとこんな行動を許せるわけがない。シキは怒りの表情を露わにしながらアンコを問い詰める。「そういうこと。だからそんな怖い表情を私に向けないでよ。猫キチさん。個人的な恨みでこの子殺しちゃうよ」

アンコはクリームの首根っこを捕まえながら、右手で首元に手刀を入れるジェスチャーを試みせた。ナツミとマフユの体に緊張が走るのをシキは感じ取ったが、シキは二人が止まるよう、アンコとナツミ達との間に入った。少なくともアンコはまだ、クリームを殺そうとは本気で考えていない。シキはそう直感していた。

動物は人間と違って社会的な理由で、他者を殺すことはないとしキは考えていた。

動物が殺生を行うのは、あくまで食べるためや、自分か仲間の命の危険から守るときのみだと考えていた。それは、猫さんも例外ではない。

クリーム達は飼い猫さんだからそんな姿を見せることはほとんどないが、たまに外に出たときに小鳥などの獲物を捕まえてくることがあり。そういう本能があることをいやでも感じさせられる。もっとも、クリーム達の場合はその小鳥を自分達で食べるなんてことはせず、あくまでシキやシズ力に見せるためにやっているみたいだが遊びでやっているのか、狩りでやっているのか、その目的は人であるシキにはよくわからない。どちらにしてもその境界が曖昧になっているのは間違いない。

それはシキ達の猫さんへの介入によるせいだという捉え方もでき、猫さんの生態を無理矢理に変えてしまっているシキ達が悪いと

もいえるのかもしれない。

だが、野生の野良猫さんならやはりそれは生きるためなのだ。

そういう考え方もあって、シキはクリームが他の猫さん達から狙われていると聞いたとき、そんな目にあってしまっただらすぐ殺されてしまうのではないかと怖かったのだ。しかし、シキが思いもしていなかった人間社会をも超えかねない猫さんの社会性は、そういう野生の残虐性を薄めているようでこの場では幸いした。

「二人とも手を出さないで。もうちょっと我慢して。少なくともここまで殺されていないのだから、まだクリームを生かしておく利用価値は向こうにもあるはずなんだ」

シキは今にも飛びかかりそうなナツミ達を必死に抑えながら説得した。

「シキ、確かにその通りだよ。でもさ、だからこそ今仕掛けるべきなんだと思わない。今ならクリームに手を出せないはずなんだよ。もし利用価値がなくなってしまうたらそれこそ殺されちゃうかもよ」

マフユは大いに不満があるようだった。

「クリームの飼い主は僕だろう。僕の言うことを聞いてくれないか？」

シキはまだ二人には介入してほしくなかった。というのも、どうやらアンコが今気になっているのは、少なくともこの二人ではないみたいだからだ。

アンコがこの場で気になっているのは、クリームと何故かシキの二人らしかった。それはアンコがナツミ達の名前すら興味なさそうなことからわかる。逆にシキの名前はコンビ二に来るたくさんの客の一人でしかないのに、なぜかアンコに覚えられていた。

「それを言われちゃ弱いわね。やっぱりシキをここに連れてくるべきじゃなかったのかな」

ナツミは諦めたように呆れた顔で言った。二人は渋々ながらもここはシキに同調した。

「あなた達二人もさ。人に飼われている猫なの？」

二人に対してアンコの鋭い言葉と視線が飛ぶ。シキにとって、アンコは普段からよく利用しているコンビニの店員さんだったから顔を合わせる機会はよくあったが、こんな真剣で鋭い表情をするアンコは初めて見た。

「いいえ、私達は人に飼われている猫じゃないけど、人と一緒に生きていこうと考えているただの野良猫よ。今は人間社会で紛れて生活しているけど、それはあなたも一緒にみたいね」

ナツミはアンコの疑問に答えた。

「じゃあ、なんで猫キチさんにそこまで肩入れしているの？ クリームならともかく、あなた達は、野良猫達がどれだけ虐げられてきたか、よく知っているでしょう？」

「確かに人間の身勝手な理由で、私達はいろいろな不利益を被っているよ。でも、それが人間の全てってわけじゃないよね。あなたの言う猫キチさんは、シキは、その中でもとびつきの人間でさ。逆に私達の為に、自ら進んで不利益を被るような人だよ。私達をとつてもよく愛していて、私達によく接してくれる。クリームはシキと暮らしていて本当に幸せそうだよ。あなたもシキと顔見知りみたいだし、心当たりくらいはあるんじゃないの？」

マフユはアンコがシキのことを妙に気にかけているのに気づいたようで、そのことに言及した。

シキは、もし人間関係のことでこんな褒め言葉を連発されたら、顔が火照って爆発してしまうところだったけど、猫さんのことでこんな風に言われてもただ誇らしいだけだった。

「そうだよ。その猫キチさんと来たらうちのコンビニに来て猫のことばかり。毎週、猫関係の雑誌を信じられないほど長時間にやけ顔で立ち読みしていくし。この前、五百円くじで猫グッズが出たときなんか、店の半分は買い占めたんじゃないかっていうくらい引いていったし。本当にどうかしているっていうくらい猫好きね。猫キチってあだ名も私が言い出したんじゃないのに、満場一致だったんだから」

シキは普通のことをしているつもりだったのだが、一般人からみると異様に見えるらしかった。

ちなみに件のくじびきは、最も近所のアンコのコンビニでのラストワン賞を逃したため、シキはおなじくじを他のコンビニでも買い漁ることになった。なんとか少し離れたコンビニでラストワン賞をとれたのは僥倖だった。

猫さんのくじなんて滅多にないから、ここ数年でも指折りで数えられるくらい嬉しかったのをシキは鮮明に覚えていた。ラストワン賞の猫さんクツションは、今ではクリームのすっかりお気に入りの寝床の一つになっていた。

「アンコさんが僕の猫キチつぶりが気になるのはわかったよ。でも、なんでクリームをさらおうってなるんだよ。コンビニに来る変な客なんて僕以外にもいっぱいいるだろう？」

シキには肝心なことがさっぱり分からなかった。

「猫キチさんこそ何言っているの？ 私は猫なのだから、どんなに変人が来てもあなたみたいなのが一番気になるに決まっているじゃない。猫キチさんの猫への執着ぶりといったらこっちがうらやましくなるぐらいなんだから。猫キチさんは人間の癖に人間の女には興味ないの？ うちに来るお客さんの男達ときたらエロ本や美少女が載っている漫画を立ち読みしたり、買い漁ったりしていたりするけど、あなたと来たら生身の人間にはまるで興味ないみたいに見向きもしない。人間に化けた私だって、結構人の中でも美人の自信があつて、言い寄ってくるお客さんも少なくないんだけど、シキは私のことをどう思う？」

確かにアンコは均整のとれた顔立ちにつやつやとした黒のロングヘアをもち、プロポーションも素晴らしい。だが、それでシキにどうということもない。シキにはアンコが何を聞きたいのかわからなかった。

「アンコさんはすごくきれいな美人だと思うよ。そこらへんのコンビニにいるのがもったいないくらいだよ」

「私は、そういう一般的な意見じゃなくて猫キチさんがどう思うか聞いているの？」

アンコは怒りながら聞いた。一体、何を怒っているのか。クリームを捕らえられて怒っているのはこっちだというのに。しかし、ここでことを荒らすとクリームが危ない。

「どつって……」

シキは言葉に詰まった。

「要するに、あなたシキに惚れているの？ それでシキがあなたをどう思うか気になるの？」

すると、そこまで黙って二人の会話を聞いていたナツミが突っ込む。アンコはシキに惚れているなんて、シキは思いもしなかった。

「そうよ。私は猫キチさんのことが大好き。だから、クリームのことをさらったの。猫キチさんはクリームにべた惚れみたいじゃない。クリームが邪魔で邪魔で仕方がない。クリームと猫キチさんを絶縁させるのが私の願いよ」

アンコは怒っていないながら笑うと表現するしかない、シキが今までに見たこともない表情でシキに言った。

シキはこんなふうにストレートに告白されたのは生まれて初めての経験だった。

妄想ですらこんな告白は思い描いたことはない。シキはこんな状況なのに心臓が激しい脈を打つのを感じた。つい一時間程前に感じた人生最大の鼓動以上の衝撃がシキを襲う。さっきは大ジャンプからの恐怖感によるものだったが、今回ののは突然の告白による極度の緊張感からだろうか。

「で、でも。僕とアンコさんとの関係なんて、ただコンビニにくる大勢の客の一人だろう。どこに惚れるところがあつたんだよ」

シキは、告白にストレートに向き合うのが怖くて、戸惑いながら、話のベクトルを変えるような質問をアンコに向けた。

「惚れるのに理由なんているの？ 私にも分からないけど、とにかくあなたのことが気になるの。強いて言うなら猫に対して素直で優

しいところだろうけど、その様子から察すると人型の私のことを特に気にしていなかったんだらうなあ」

アンコは悲しそうに言う。確かにこんな事態になるまで、シキはアンコのことを近所のコンビニの一店員としか見ていなかった。

「ごめんなさい。アンコさん。確かに一人の店員さんとはしか見ていなかったよ。でもそれも仕方ないよ。人によつては状況次第で一目惚れみたいなことをすることもあるだらうけど、そんなのは偶然もあつてできる話で滅多にないんだよ。僕たちの関係は、端から見れば店員と客でしかないんだし、そんな気にならなくても仕方ないよ」

シキは精一杯、誠意を込めた自分の気持ちアンコに伝えた。自分でも表現が不器用すぎて、自分の口下手が嫌になった。

「仕方がない！」

アンコは怒った口調で繰り返した。その怒気にシキ達三人は気圧されて身動きがとれないほどだった。

「仕方がない……か」

アンコが二度、シキの言葉を繰り返すと、ところがその怒気は急に薄れて、アンコが気落ちしているのを三人ははつきりと感じた。

「今だ！」

その気落ちした気配をきっかけに、ナツミが合図を出しマフユと同時に動いた。シキには上手く隙をついた攻撃に見えたが、アンコはうつむいたように見えて冷静だった。ぎりぎりのところで攻撃を避けると、二人の攻撃を上手くいなして、再び三人から距離をとった。

「全く油断も隙もあつたものじゃない。何？ そんなに早くクリームを殺して欲しいの？」

アンコは体勢を整えながら、クリームを再び盾にとって、再びナツミ達に離れるよう無言の圧力をかけた。

「ごめん、しくじった。舐めていたわけじゃないけど、こいつは予想以上に用心深いみたい」

ナツミはシキのほうへ振り返って謝った。

「アンコもこんな状況なんだから、気落ちしているように見えても、注意はしているのよ。それに思っていた以上の身のこなし。野良猫だと思つて甘く見ていたけど、相手強いよ」

マフユは歯ぎしりしながらアンコのほうをにらんでいた。

「お互い野良猫なのに連れないなあ。そっちにどう映つて見えたかは知らないけど、そんなに気落ちもしてないんだよね。シキが私に興味なさそうなのは割とはっきり分かつていたから、むしろちよつとすつきりしたつて感じてさ。あはは」

マフユは不敵に笑つた。その表情はシキには不気味にも艶っぽくも映り、シキの不安を煽る。

「ナツミ、マフユ、ありがとう。でも、もうちよつと手を出すのは我慢してくれないか」

シキはまだ臨戦態勢の二人に念を押した。まだ交渉次第で事態を打開できる余地があると思つたからだ。

「アンコさん。納得してすつきりしているなら、クリームを返してくれないか。僕の大切な家族なんだ。お願いします」

シキは再度アンコに願つた。

「確かに猫キチさんは、人としての私には興味がないかもしれない。アンコはシキの目をまつすぐ見ながら言つた。

「でも、猫としての私ならあなたなら受け入れてくれる。運動能力があるないを別にしても私が人間であるなら、猫キチさんはその二人をそこまで止めたりしないでしょう？ 私が猫であるから迷つているんだ」

「確かにアンコさんが猫さんじゃないと分かつていたら、無理矢理にでもひつ捕らえていたかもしれない。でも、こんなことする奴をいくら猫さんでも受け入れたりできないよ」

シキは猫さんに対して甘いということとはひどく自覚していた。

「それは私の誤算だったかもね。何も言わずにさつさとクリームのことなんか殺しちゃつて、その後、猫キチさんに取り入るのが一番上手いやり方だったのかも。そうすれば、猫キチさんは、私がクリ

ームに危害を加えたなんてこと知る由もなし。一時は、クリームの死を悲しんでどうにもならなくなるかもしれないけど、私がつける隙もその内にはでてきたんだろうね」

アンコはシキから視線を外していった。その表情は冷静ではあったが内容はとんでもないものだった。

「アンコ。あなたはシキともっと親密になりたいんでしょう？ それなら、こんなやり方は間違えているよ。人と仲良くやっていきたくないなら、暴力的な手段を使う必要はないわ」

ナツミもアンコを説得した。

「分かってないにやあ。私はキャッツの一派ではないって言ったでしょ。確かにキャッツからの勧誘もあって目的に一致する部分があったから部分的に手は借りているけど、私は自由に生きたいのよ。私はただクリームとシキを絶交させたいの。目的はキャッツと一緒だけど、目指す結果は全然違うわね」

アンコがクリームを狙う目的はここまで来て何も変わっていないらしい。それどころかシキと会話を繰り返したことでより強くなっている気さえした。そして解釈によってはアンコの目的はキャッツよりもやっかいな話だった。

キャッツはあくまでも人と猫さんの分離を目指しているから、ピースのリーダーのクリームを狙うのは一つ的手段にすぎない。

だが、アンコの狙いは純粹にシキとクリームなのだ。問題の中心が完全にクリームである以上、解決策が他に向かう手段が、シキにはまったく思いつかなかった。

「アンコさんはどんな猫さんなの？もしかして僕の知っている猫さんなの？」

シキは最初から気になっていたことを初めてアンコに聞いた。

「私はあなたもよく知っている猫よ。今から見せてあげる」

するとあっさりとアンコは了解した。以前、シキがナツミ達に変身した姿を見せてくれと言ってもダメだと断固拒否されたので、つきり易々と見せられるものではないと思っていた。

「な！ まさかここで変身しようっていうの!？」

するとマフユが、今までに聞いたこともないような慌てた声を出した。

「そうよ。何か問題でも？」

アンコがそう言っていると、アンコは眩く光り始めた。

「大問題よ！ 猫が人間に変身するのを見られちゃいけないのなんて常識でしょ！」

マフユが声を張り上げた。お昼は昼寝の時間という常識以外にも猫社会にはいろいろあるらしく大変らしい。

「そんなの知ったこっちゃにゃい。シキには私を見て欲しいんだから。それにあなた達だつてこのことをシキに教えたくらなんでしょう？」

今やアンコの姿が見えないほど、アンコ全体を包んだ光の中から声が応えた。

「ぐぬぬ」

マフユは返す言葉もないようだった。

「確かにそれは私達もまづかったかもね」

ナツミはマフユと対照的に全く慌てておらず呑気なものだった。

「うわっ！」

シキが思わず声を漏らす程の一段とまぶしい光がアンコから飛び出し、シキは思わず目をつぶった。

シキが目を開けると、アンコのいた場所には黒猫さんがいた。

その黒猫さんは人間のアンコの黒髪を模倣したようなきれいな艶のある黒猫さんで、シキもよく知っている黒猫さんだ。きれいな赤い瞳とピンと伸びた尻尾は忘れようもない、シキの家の付近を住処にしている黒猫さんで、先日、シキがコンビニ帰りにおやつをあげた黒猫さんでもあった。

あまりの状況に眩い光で眩んでいたはずのシキの目は釘づけになり、意識は呆然となった。

シキがナツミ達の家に行った時に聞いた話から、一番シキが恐れ

ていた現実がそこにはあった。

あの時から、ただ猫さんを愛して大好きというそれだけだったシキの想いは変化をはじめ、人間と猫さんとの関係を考え直すようになったのだ。人間が身勝手に行動するせいで猫さん達にどれだけの迷惑をかけたのかを考えるようになった。

人間が自分達の世界を広げる中で、猫さんの自由な行動をどれだけ奪ってきたのかと。人が猫さんを飼って、飼われている猫さんは幸せだというのはただの自分の妄想なんじゃないかといういろいろな葛藤が産まれた。

人間の身勝手な猫さんへの仲介はするべきではないのかという恐れが生まれた。

この状況は、まさにその身勝手な現実が引き起こしてしまったものではないか。

だが同時に、シキの気持ちの中には昂るものもあった。猫キチとというのは、それがどんな状況であれ野良猫さんに遭遇したらテンションがあがってしまうものなのだ。当然、シキも例外ではなく、その才能も猫キチの中でも随一だ。シキはすぐには、気持ちの整理がつかず呆然となった。

「猫キチさん。この前はおやつありがとうね。あのクッキーは本当に絶品で嬉しかったよ。さすがに、この姿だと私のことよく分かるみたいだね。嬉しいにゃ」

シキは黒猫さんが日本語をしゃべるのを産まれて初めて聞いた。いや、有名な見習い魔女の映画でしゃべっている黒猫さんがいたかでもあれは映画の演出上しゃべっているように見えても、主人公の魔女の妄想であるなんて説をシキは聞いたことがあった。なんにせよ、フィクション以外ではまるつきり初めてだった。

「お前がアンコなのか？」

ごく最近の非日常的な体験の数々によって、ある程度は突拍子もない状況に慣れ始めていて、猫さんが喋っているという事態にもそれほど驚きはしなかったが、一応目の前の黒猫さんが先程目の前に

立っていたお姉さんと同人物なのかを聞いた。

「こいつがアンコに決まっているでしょ」

するとその質問に答えたナツミが今にも飛びかからんとする様子を見せた。それを察したアンコはクリームの首根っこをくわえて様子を伺った。

「その姿でクリームをくわえた状態で、私達と戦うつもりなの？」

マフユも、今がチャンスと見て戦う体勢を整えていた。

「いや、それはさすがに無理よ。首をくわえたのはクリームを掴みながら戦うためじゃないわ。あなた達が仕掛けてきたときに首を引きちぎるためだから下手な動きはしないでね。さすがにこの状態ではあなた達二人を相手にして戦うことはできないからね。保険は賭けておかないと」

黒猫さんの姿になってもアンコの行動目的は変わっていないらしく、すかさず脅しをかけてきた。これではナツミ達も動くことはできなかった。

「アンコ、僕は確かにお前のことをかわいいなあと思ってエサをあげたり、遠目から視姦したりすることもあったよ。でも、お前がもしクリームを殺したりしたらお前のことを一生恨むし、飼ってあげることなんてできない」

シキはアンコに同情もしたが、それでもクリームのことをゆるずることはできない。アンコはナツミ達が攻撃してこないことを確認すると口からクリームを離れた。

「猫キチさん。さつきと違ってよくしゃべるね。それに、猫キチさんの言葉ではつきりかわいいと言ってくれて嬉しいよ。でも視姦までされていたのは、さすがの私でも気づかなかったよ。そこまで私のこと気にしてくれていたんだね。でも、私にその気がなかったらどん引きだったよ。人間だったら完全にアウトだね」

アンコはさつきまでより全然上機嫌だった。

「言葉は悪かったけど、お前のこと普通の黒猫さんとしか考えていなかったんだからずっと見ていたってしょうがないだろう。人間社

会では他人をずっとじろじろ見ていたらまずく思われるだろうけど、猫さんに対してはそれが悪いなんて風潮もないんだよ。僕だってお前と今までどおり、仲良く……、今の関係を仲がいいっていつのか分からないけどさ、やっていきたいんだよ。だから、クリームを離してくれよ。おやつなら今までよりいっぱいあげるからさ」

猫さんとの関係を見直さなければいけないという考え、つまりアノコとの関係を考え直す、という思いもシキには芽生えていたが、とにかく今優先すべきはクリームを助けること、というその第一義は変わらなかった。

「それは無理だね。私は今までの関係じゃ満足できないんだから。クリームの居場所を私の居場所にしたいんだから」

しかし、アノコの願いは変わらず、シキの願いとは真逆で相反するものだった。

「お前が何と言おうと、クリームを殺されたらお前によくすることなんてできない！　こんな状況見せられたら逆に一生縁を切るぞ」あまりに状況が打破できる要素が見当たらず、シキは思わずぶちまけた。こんなものじゃ脅しにすらならないかもしれない。

「いいねえ。猫キチさん。猫が相手だとやっぱ本音も出やすいのかな。さつきまでの猫キチさんとはまるで別人ですごいや」

シキの予想とは裏腹に、思った以上にシキの脅しはアノコに響いたようだった。

ただし、脅しとは明後日の方向でアノコがポジティブな方向に傾いたのはこれまた予想外だった。アノコは目を爛々と輝かせていた。猫さんの目なんて普通の人間から見たら、黒目が大きくなるか小さくなるかくらいで表情なんて読めるものではないが、シキならそれを読むくらい造作もない。

「いい加減にしろ。遊びでやっているのか？」

シキはさつきより怒気を込めた声でアノコに言った。

「もちろん遊びでやっているよ。逆に猫が遊びでやっていないなんてことなんてあるの？　人間は、遊びじゃなくてもいろいろやるみた

いけどそこらへんは私達にはなかなか理解できないね。人生、楽しみなきや損でしょ？」

確かに猫さんは遊びでなんでもする生き物だということをしキはよく理解していたから、このセリフには説得力があった。大体、猫さんは人間みたいに打算なんて考えずに自由気ままに生きているからシキは猫さんを大好きなのだ。

このセリフはシキにとって、アンコを懐柔するのは相当難しいと悟らされる破壊力があった。しかも、これは以前シキがナツミに悟らされた言い回しとそっくりで、シキははつとさせられた。

「なら遊び方を考えようよ。なにもこの遊び方じゃなくてもいいだろっ？」

シキはなんとかアンコの思考を変えようとした。

「確かにそうだね。今のやり方じゃどうにもならないからね」

しかし、口ぶりから察するにアンコには逆の意味でとられてしまったようだ。

「お前がクリームを殺したら絶対に許さない」

シキは改めてアンコに宣言した。

「いやいや、そう言いきれたものでもないよ」

「なんでお前にそんなことわかるんだよ」

シキは売り言葉に買い言葉だと思ったが、アンコのリズムに乗せられるわけにもいかなかった。

「わからないから言っているんだよ。未来がどう転ぶかなんて誰にも見えないでしょう。私がクリームを殺したらすぐには、私のことをよく思うことなんかないと思うよ。いや、長い目で見ても普通はよく思うことなんかない。でも、予想外のことが起こるから人生面白いもので、例えば人間にも自分が監禁されたのにその犯人と結婚しちゃうなんて話もあるらしいじゃん。こういうの吊り橋効果っていうらしいけど。怖い場面と一緒に体験してドキドキすることで相手のことを好きになっちゃうことがあるんだってさ。すごいよね」

アンコは楽しそうに言った。

「そんな身勝手な理屈でクリームを殺そうっていうのか？」

アッコのそんな態度もあって、シキはどうすればクリームを助けられるのか皆目わからなくなっていた。

「もういくら話しても無駄ね。シキ、猫ってこんなものなのよ。あなたならよく知っているでしょう」

ナツミが痺れを切らして口を挟んできた。

「でも、それじゃあクリームが」

シキがすかさず突っ込んだ。

「アッコ、あなたは実際のところクリームの生死に興味があるわけじゃないでしょう。シキがあなたをどう思うかが重要で、その足枷になっているからクリームが邪魔だと思っている。場合によってはクリームを殺して成り行き次第で、シキに取り入ろうっていう魂胆なんだね」

マフユはアッコに真意を確認する。

「んん。どうだろうね。概ねあっているとは思っけど、クリームのことを殺したいっていう気持ちはあなたが思っているより強いかもね。なんでこんなにクリームのことむかつくんだろう」

さつきまでの様子からは楽しんでいるようにしか見えなかったが、アッコにも迷いはあるようだ。

「じゃあさ。私達と戦ってクリームの取り合いっこしようよ。あなたが勝ったらクリームのことをあなたの好きにしていよいよ。あなたが負けたらクリームを返してもらおう。あなたもその辺決めかねているみたいだし、すつきり戦いで決めちゃってもいいんじゃない」

さすがにマフユは戦略家だなとシキは感心させられた。いざクリームを人質にもたれない戦いに持ち込めれば三対一の戦いでこっちが圧倒的な優位だ。（シキを戦力に加えていいのかは怪しいが）問題があるとすれば、アッコがこの提案を受け入れてくれるかどうかだ。

「いやよ。そんなのを受けて私にどんなメリットがあるのよ」

やっぱりアッコはすんなりと受けてはくれなかった。ここまでの

行動からある程度わかってはいたが、やはりこの猫さんは切れ者だ。「クリームを殺されたらさ。私達もシキ程じゃないにしろ怒るよ。」

その場合はシキの喪失感に付け入るうとしているみたいだけど、あなたに私達の相手もできるのかな？ 見方によってはシキより厄介な敵をあなたは敵に回そうとしてるんだよ。私達以外にもクリームを守りたい猫はたくさんいるんだから」

マフユはアンコが受けないということはあらかじめ想定していたらしく、アンコに受け入れさせるために脅しをかけた。この二人が味方に付いていても頼もしいとシキは思った。

「にやるほどね」

そう言つと、アンコは考え込み始めた。これでうまくアンコがマフユの案に乗ってくれるといいのだが。

「どいつもこいつもなんでシキを守ろうとして、こんなに親しそうにしているかなあ？」

アンコはしばらく考えたのち苦虫を噛み潰すような表情で歯ぎしりしながら言った。アンコが出した結論は、どうやらマフユの思惑とは違う方向にいつてすんなり受け入れるのではなく、怒りの方向がナツミとマフユにも向いてしまったようであった。

「わかったよ。あなた達も殺してあげる。シキと仲良くしようとするやつは全員許さないんだから」

アンコはナツミ達に向かって宣戦布告した。同時にさつき猫さんに化けた時と同じ光が猫さんのアンコを包み込んだ。また、人になつて戦うつつもりだろう。シキはアンコは冷静だと思つていたからこんな決断をするとは思っていなかった。やはり、猫心は猫さんのほうが分かるということなのだろうか。アンコの交渉はすんなりいったのだらう。

「私達にまで殺意が向いちやうとは予想外だったね。もうちょっと上手いやり方なかったのかな。シキ、今度こそホントに危ないから下がっていて」

ナツミはマフユにいちゃもんをつけて、シキを自分達の後ろに立

たせた。

「うるさいわね。ナツミじゃ説得することもできないでしょうに。シキ、取りあえず私達の戦いを見てどう動いているかきっちり見ときなさい」

マフユにとつてもちよつと予想外の状況だったらしいが、とにもかくにもナツミと同様、臨戦態勢を整えつつシキにもアドバイスをした。

「さっきのにやんだフルシューズの走りで分かっただろうけど、思いとイメージでその靴はあなたが思い描いた動きを実現してくれる。実際の戦いでもそれは一緒よ。思いつきり私達の動きを頭に刷り込みなさい」

マフユは念を押した。先程は走れはしたものの止まれはせず無様な結果となった。おかげでまだ所々痛い。しかし、クリームも目の前にいるのに醜態をさらすわけにはいかない。

「わかった。クリームをよろしく頼むよ。二人とも」
シキは二人と交互に目を交わして頼んだ。

「任せときなさい。なんならシキの出番なんか無しに助けて見せるわ」

ナツミはそう言うと、アンコが発する光のほうへ振り返った。シキは先程アンコが猫さんになる時の光を見ていたので、同じくらいの光なら備えがあれば大丈夫だろうと思いい視線を光の中心からは微妙に外しながらも集中して見ていた。猫さんサイズから放たれていた光は、人間サイズへと徐々に広がっていき、一段と眩い光を放ち、光を予期していたシキだがやはり思わず目をつぶってしまった。

その瞬間、シキの周囲に突風が巻き起こり凄まじい衝突音が鳴り響いた。

備えていた分すぐに調子の戻った目を空けるとシキの眼前では、まだシキが目をつぶった状態で夢でも見ているのじゃないかと疑うような光景が広がっていた。

ナツミと思われる金色の閃光と、マフユと思われる青色の閃光と、

アンコと思われる黒色の閃光が交錯する。閃光が衝突するたびにあたりに轟音が響き、閃光は先程の走りなんかとは桁違いの速度で、時に物理法則を無視したかのように直角に曲がるなど奇想天外な動きをした。

シキは猫さんの動きについて熟知しているつもりだったがこんな動きは想定外だった。人型になるとここまで速度があがるものなのだろうか。さつき走った速度がほとんど全力だと思っていたので、シキは動揺せざるを得なかった。

しかし、少し考えてみるとこっちのほうは自然なのかもしれない。先程は距離のある相手を追いかけていた長距離の移動だったので、それに合わせた走り方をしていたとすれば合点がいく。

猫さんはそもそも長距離を走るのが苦手だ。というか、野生の肉食動物はあまり長距離を走る必要性がない。見つけた獲物は素早い動きの短距離で仕留めるのが基本でたらだら追いかけるなんてことはやらない。

シキや世界最速の人間が、本気で走った猫さんに百メートル走で勝つことは絶対に不可能でも、長距離の競争になれば話は別だろう。そもそも、一キロも連続で走る機会すらない猫さんなのだから、人間に長距離走で勝てる道理はない。さつきの移動は猫さんの能力を使ったものだとしキは思っていたが、実際は人化した猫さんが逆に人間の能力を上手く使うことで実現した動きだったのではないか。そして今ナツミ達が繰り返している動きが、まさに猫さんの動きをリアルに出したものでないか。

シキがこの考えで閃光の軌跡を見ると途端に三人の動きがくつきりと見えた。三人はまさに今獲物を捕らえようとする猫さんの動きを体現していたのだ。瞬間の動きがだらだらした走りなんかとは桁違いなのも納得だった。

人の姿に戻ったアンコは先程と同じ服を着ていた。さつきの変身では突っ込み忘れていたが、猫化したアンコは猫さんが産まれたままのあらゆる姿になっていて着ていた服は消えていた。対して、

猫さんから人に戻ったときはどこからか服も戻ったらしい。とはいえ、こんなのはここまで起きてきた不思議なことに比べれば些細な話だしこういう話のお決まりなのかもしれない。

先程と違うのは、漆黒のアンコの閃光の中に純白の閃光も交じっているところだ。アンコは背中にクリームを背負えるような服を着て、そこにクリームを寝かせた状態で戦っていた。あれなら、両手両足は自由に動かせるしクリームはそんなに重くもないから眠っていて抵抗しないなら大した邪魔にもならない。そんな状態で、アンコはなんとかナツミとマフユの猛攻を凌いでいた。

ナツミとマフユはにゃんだフルシューズの潜在能力を如何なく発揮し、アンコに上下左右から襲いかかつてはいたが捕らえるには至らなかった。アンコのほうは必要最小限の動きとキレのある動きでナツミ達の攻撃をいなしているように見えた。

それでもシキの目にはナツミとマフユが、アンコより勝っているように見えた。じりじりとだがアンコは後退させられているように見えたし、何より攻撃がほとんどできずに防戦一方に見えた。シキは先程マフユから言われた通り、とりあえず動きを見るのに集中していたのと、今の猫さん達の動きとシキのイメージする猫さんの狩りのイメージがそっくりだったので状況がよく見えた。このままならすぐにアンコを倒すことができると思った。

だが同時にシキは不安にもなる。ナツミ達は確かにアンコに猛攻を仕掛けていたが、運動量がアンコと比べて桁違いに多かった。先程のシキの考察があたっているのなら短時間での運動において猫さんの能力は真価を発揮するはずなのだ。

ナツミ達の攻撃が耐えられてスタミナが切れてしまったら逆にやられてしまうのではないのだろうか。アンコはぎりぎりの戦いをしているように見えて、表情にはまだ余裕があるように見えた。

シキは普段の二人の動きを見ていたから大よそ予想はついていたが、ナツミは猪突猛進、積極的に直接攻撃を仕掛ける勇猛果敢な純粹なアタッカーだ。

マフユは戦略的に相手の急所を突いて適格な攻撃を仕掛ける、にゃんフォンは兵器にもなれるらしく、レーザーを出し、近づかれたら剣の形状になるなど変幻自在の兵器を使う策略家だった。

二人はお互いの長所を伸ばしあい、欠点を補う抜群のコンビネーションを誇っていた。その動きはシキのもつ猫さんのイメージや二人のイメージとぴったり重なるものがあって、見えるというよりは感覚的に捉えることができた。

ところが、アンコの動きはナツミ達に比べたら極めて少なく、傍目には見極めるのもそんなに難しくないのである。動きなのに、シキにはその動きが不可解なものにしか見えなかった。ここには何か落とし穴がある気がする。さっきイメージで走ることができたのに止まることはできなかつたのと似たような落とし穴が……。

ナツミ達はアンコに遅れをとるのではないかという懸念と、アンコの不気味な行動のイメージは、シキの不安を駆り立てた。

「ナツミ！ 一旦態勢を戻そう！」
今まさにアンコに飛びかからんとしていたナツミに向かってマフユは大声で叫んだ。

「なによ、せつかくいいところだったのに」
ナツミは今の状況を楽観的に捕らえているらしく、それでも渋々マフユに応じた。あつという間にシキのところまで戻ってきた二人は、シキの思った通り疲れており、特にナツミはかなり消耗しているようだった。

「マフユ、もう少ししてとところだったのになんで止めるのよ」
ナツミは珍しく怒っているようだ。

「ナツミ、息があがっているよ」
マフユは鋭く突っ込んだ。

「マフユこそ随分ときつそうじゃない？」
ナツミはマフユに指摘仕返した。

「ええ、私もね。どうも私達はアンコの戦略にはめられていたみたい。ナツミ、一発でも手応えのある攻撃ができた？」

「いやギリギリのところまで避けられているね。でもほんのひと押しでやれるって」

シキの思った通り、二人は有効打を与えられていないようだ。一旦距離をとられたアンコは、一休みにと余裕を見せつけるように猫さんストレッチをしている。アンコは、前足をぐーっと前に出して体を伸ばした後、体を前に出して後ろ足をぐーっと伸ばす。猫さんがやると可愛いこの体操だが人間の姿のアンコがやっていると妙にエロかった。戦闘中にストレッチとはナツミ達と違ってアンコにはやはりまだ余裕があるようだ。

「どうしたの？ もう終わり？ ごちゃごちゃ作戦タイムなんてやってないで。早く掛かってきなよ」

アンコはそう言ったが、のんびりしているだけで自分からは仕掛けてこなかった。

「シキ、ちゃんと見ていたと思うけどあなたの目にはどう映った？」「わからない……。最初はマフユ達が押しっていて、アンコを倒すのも時間の問題だと思ったんだけど、アンコは必要最初限の動きで上手く攻撃をかわしているように見えた。ずっと見てもナツミ達は何をしているのかよく見えるのに、アンコの動きはよくわからないんだ」

シキは思ったままを言う。

「シキはもう私達の動き見えているんだ。本気だったんだけどにやー」
ナツミは少し残念そうだったが嬉しそうでもある。

「シキのほうがナツミより状況見えているみたいじゃない。どうも私達そろってあいつに踊らされていたみたいね。明らかに力を抑えながらこっちの消耗を狙っている。のらりくらりとしてのいで虎視眈々、反撃を狙っている切れ者だわ」

マフユは簡潔にナツミに状況を説明する。

「どつりで手応えがないわけだ。お相手さんもなかなかの策士ってわけだ。で、どうするの？ マフユ」

ナツミはまるでちよつかいを掛けるようにマフユに聞いた。どうやら戦略という面は完全にマフユが実権を握っているようで、ナツミもマフユに全幅の信頼を寄せているようだ。

「シキもナツミもちよつと耳貸して」

マフユはシキ達を引き寄せてひそひそ声でしゃべり始めた。

「とりあえず少し冷静になって、こつちも相手の様子を見るわよ。アンコもすぐには攻撃してこないのはこの状況があつちに都合が悪いつてことよ。こつちからは無暗に攻撃しないで逆に相手の隙を突く戦いをするよ。こつちは数の上では有利なのだからどつしり構えていればいいわ」

マフユは簡潔に戦略を伝えた。さつきまでの戦いの様子を見るに無難な戦略ではあったが、シキにもよい戦略に思えた。このあたりはさすがゲーム界に名をはせるゼロだ。

「危ない！」

シキがマフユの洞察力に感心して安心していた数秒の油断の隙、ナツミが凄まじい声で危機感を表しシキをどついて吹き飛ばす。瞬間、シキの顔が今まさにあつた場所にアンコの手が現れた。

シキの背筋が凍りつき同時に尻餅をついた。アンコもこちらの戦略を簡単に受け入れてくれるほど甘い敵でもなかった。

「なにのつもりよ。シキが死んだらどうするつもりなの？ あなたの目的は私達のはずでしょ！」

シキはナツミがここまで怒りを表すのを初めて聞いた。シキも自分がいきなり狙われる展開になるとは思っていなかったので一瞬よぎった死の恐怖に身を震えさせられた、が、すぐにそれ以上の鳥肌がシキを襲った。

「もちろんそのつもりだよ。ちゃんと攻撃はあなたに当たっているじゃない。あなたならシキを守ろうとするって分かっていたから、こんな遠回しな攻撃をしたんだから」

アンコがニヤリとナツミに向かって笑いかけた。こんなに嫌な感じの笑顔をシキは今までに見たことがなかった。先程シキをかばっ

たナツミの右腕には、アンコの鋭利な爪が深く突き刺さっていた。その傷口からはシキなんかとは比べ物にならないくらい出血もあつた。シキはあまりの光景に言葉を失う。

「ごめん、シキしくじった」

シキの想像を絶する痛みが走っているだろうに、ナツミはいつもと変わらない笑顔で言う。そんな表情をされるとシキはどうにかなりそうだ。

なんてことだ……。僕がこの場にいなければ、二人だけならさっきの攻撃は楽に避けられたはず。僕のせいでナツミが……。

シキの全身を絶望感が襲う。

その笑顔の横でもう一方の笑顔が狂気を携えてもう一方の手でナツミに留めを刺そうとしているのがシキには見えた。

「ナツミいいいいいいい！」

マフユの叫び声がどこか遠くからシキには聞こえた。どうやらアンコの襲撃に一番早く気づいたのはナツミらしく、マフユもシキと同様に吹き飛ばされていたようだ。マフユはシキなんかより備えがあつたので、もし察知されて避けられてはいけないと、ナツミも必要以上に力を込めて飛ばしたらしい。マフユは猛スピードでこちらに迫ってきてはいたが間に合わない。シキには周りの動きが全てスローモーシヨンに見えた。

途端にやんだフルシューズがシキを勝手に突き動かしたかのよう
に、シキの体が勝手に動く。

シキがイメージした最悪の結果を防ぐため、ナツミをアンコから守るため、シキの右足が鉞のような切れ味でアンコに襲い掛かる。

「にゃあああああああああああ！」

轟音と絶叫が辺りに響く。

アンコの腹にもろにクリーンヒットしたシキの蹴りは、アンコを悶絶させる。だが、あまりに強い蹴りの反動でシキはまたしても尻餅をついた。シキはあんな蹴りが繰り出せたことに驚いたが、そんなことより、危機一髪のところでもうナツミを傷一つつけることなく救

うことができたことに安堵する。怯んだアンコ相手に今度はマフユが突っ込んでいった。冷静にいこうといった本人だが、さすがに状況的にかっかしているように見える。とはいえマフユのことなので案外振りかもしれない。

「ありがとう、シキ」

ナツミが傷つけられなかった方の手をシキに差し伸べながらシキにお礼を言った。その笑顔がとっておきに可愛かったのが逆にシキの不安を煽った。ナツミがいつも通りならこんなときでも、普段と変わらない笑顔でもうちよつと口数も多いはずなのだ。

「無事でよかった。ナツミ大丈夫？」

シキが確認すると、ナツミはその笑顔のままとっさに顔をしかめて右腕をかばうような仕草をする。とっさに痛みが走ったのだろうか。まだ生々しい出血が続いている。

「大丈夫だよ。シキだってひどいケガしているんだから私も頑張らないとね。今の蹴りは本当にすごかったよ」

こんなこと聞かれて、大丈夫じゃないというのはよっぽどの時じゃないとない。ただ本当にひどいならそれは言うはずなのだ。だがそんな状況になってしまったらすでに手遅れのときもある。どう見てもナツミのそれは空元気だった。シキがナツミの状態を不安視しているのに気づいて、シキを安心させようとしているのが見え見えだった。

「ナツミ、ちよつとじつとしている」

「え？ 何する気なのシキ？」

シキは自分の服を見直すと、自分も結構ぼろぼろなのに気づいた。服はあちこち破れて出血だらけ。シキはその中でも比較的無事な右腕の袖部分を選んで思い切り引きちぎった。普段ならどんなに力をいれても服なんてそう簡単に破けるものではないが、あっさりちぎることができた。

「これでとりあえず止血しよう。ほら、腕出して」

シキがナツミの手を取ろうとすると、ナツミは素直に傷ついた手

を出した。傷口を身近に見るとシキはまた鳥肌がたつのが感じた。シキは破った服を器用にナツミの傷口を覆うように包帯がわりに巻くと、左腕の袖部分も引きちぎって腕の根っこ部分に巻き付けて血の流れを止めるようにした。

「シキ、そんなにきつく縛らないでもいいよ」

ナツミは縛られるときに痛みでしかめっ面をした。

「うるさい。怪我人は黙っている。念には念をいれてだ」

「同じ、怪我人には言われたくないにやあ」

そう言いながらもナツミは、大人しくシキに包帯代わりの服の切れ端を巻かせた。

「ありがとう、ところでさっきの蹴りはどうやって出したの？」

ナツミはシキに不思議そうに聞いた。

「自分でもあんな蹴りが出せるなんてびっくりだったけど、ナツミを助けたいと死にも狂いで願ったら、勝手ににやんだフルシューズが蹴ってくれたみたいだった」

そう言う以外に説明が思いつかなかった。あんな蹴り生身で出すことは絶対出来ないし、やれたとしても逆に足が吹っ飛んでしまいうようなほどの破壊力だった。

「そっか。シキのにやんだフルシューズは随分と成長しているのかもね。それともシキの猫キチの凄まじさのおかげかな」

ナツミは少し考え込んでいるようだった。

「シキ、マフユ気をつけて！」

マフユの声が辺りに響く。アンコと交戦中のマフユだったが、消耗したマフユ一人では留めるのすら難しい状況だった。アンコは隙を見て、マフユから離れると手負いのナツミとシキを狙った。

だが、今度はナツミとシキは、アンコのことを油断せず見ていたので二人とも対処する準備はできていた。ナツミはすぐに危険を察知して離脱した。

シキも同様に避けようとナツミとは逆側に動こうとした。

シキは避けようとしたはずだ。

ところがにゃんだブルシューズはシキが思い描いたようには動いてくれず、普段のシキでもできるような、猫さんの動きから見るとのんびりした動きでしか回避行動がとれなかった。

そんなシキでは、アンコの格好の的である。アンコはシキの重い動きに楽々ついていくと、さっきのお返しとばかりに思い切りシキを蹴りとばした。シキはその蹴りは見えていたのにガードすることすら間に合わず、胴の中心にもろにくらった。まるで全速力のバイクにぶつけられたかのような、体をまつぶたつに引き裂かんばかりの衝撃がシキを襲う。あまりの衝撃に声を発することすら許されず、シキは無言のままに宙を舞った。

それほどの蹴りを受けながらも何故かシキの意識ははっきりしていた。いっそ気を失えばどれほど楽だったろうか。このままでは、また地面と衝突する素晴らしいイベントが待っている。今のシキでは衝突に備えて身構えることすらできない。

ポスッ

シキが予想していたよりもはるかに優しい衝撃がシキを包んだ。

てつきりさつき繁みに突っ込んだときくらいのもをイメージしていたのでシキは面食らった。

「なんで避けないのよ。シキ」

シキのクッションになってくれたのはナツミだった。シキが吹き飛ばされたのとは逆方向にナツミは避けたはずなのに、どうして追いつけたのだろうか。ナツミは捕まえたシキといっしょにふわりと地面に着地した。

「なんで避けないのよ。猫キチさん。さっきほどの蹴りが出せるなら、あれくらい簡単に避けられるはずでしょう?」

アンコはどうやら当てるつもりはなく、脅しのためにシキを蹴ろうとしたらしい。まさか当たると思っていなかったらしく、その場で呆然としていた。

その隙について再び、マフユがアンコと交戦するが、アンコは冷静に対処する。

「ありがとう、ナツミ。避けようとはしたんだよ。でも、体が動いてくれなかったんだ」

痛みが少し引いてきて、ようやく少しは口が聞けるようになったシキが弁明した。

「にやるほどね。シキがどうにやんだフルシューズを使いこなしているのか何となく分かった気がするよ」

ナツミは悟ったように言う。

「まあいいや。これでみんなまともに動けなくなっちゃったし、二人とクリームを殺して、私達だけの世界が作れるね。シキ」

消耗したマフユはアンコを少しの間しか留められず、その場で動けなくなっていた。アンコは余裕をもって歩きながらシキ達のほうへ近づいてきた。

「まだ、私が動けるわ」

ナツミはシキをゆっくりと地面に置くと、アンコのほうへと振り返った。

「そんな右腕をかばいながらで私に勝つつもりなの？」

アンコは首を傾げて笑いながら言った。

「当然よ。シキ、私の戦いしっかり見ていてね」

ナツミは自信満々を装いながら言った。先程、マフユがシキに戦いを見るようにといった命令とは明らかに違う口調で、それは心からのお願いであるように聞こえた。同時に不穏な匂いを含んだ発言にも聞こえた。しかし、ナツミを止めたくても、まだシキは満足に動けそうもない。

「ナツミ。無理だよ。そのままじゃ」

その表情から決意は固いと見えて、止められる言葉が想いつかない。想いを伝えたくとも断片的な言葉しかでてこない。

「大丈夫」

そんなシキの想いをナツミは分かっているのか分かっているのか。とてもすっきりとした表情で最後にシキにウインクした。

ナツミはアンコとの間合いを一気に詰めると左ストレートを放つ。

だがナツミの渾身の一撃は無慈悲にもアンコにあっさりとかわされた。交わしざま器用なアンコの足裁きによって足をかけられたナツミは、無惨に転がり満足に受け身を取ることすらできない。

「さすがに右腕一本やられちゃうと弱っちゃうね。左手のパワーも半減だよ。さっきの啖呵はどうしたの？」

アンコが煽る。ナツミはゆっくりと立ち上がるが、あまりの痛々しさにシキは見ていられなかった。しかし、さっきのナツミの「見ている」という言葉に鬼気せまるものがあつたから、シキはそれを凝視する。何もできない自分もどかしかった。

「ナツミ、逃げなさい！」

マフユは動けないながらも必死に叫ぶ。

「どうせ逃げられないって。それに大丈夫だから」

ナツミは立っているのもやっとのふらふらな状態なのに、目だけは輝いていて、もうナツミはどうかしているんじゃないかとシキは思った。

「観念して達観しちゃったのかにやあ。もうちょっと遊びたかったのに残念だなあ。逃げようとしたって逃げられないんだし、せめて楽に殺してあげるね。獲物をいたぶるのは好きじゃないから」

アンコは笑いながらナツミに近づくが、ナツミは微動だにしない。

「ナツミ、お願いだから逃げてー！」

「そんなこと言う前にもあなたも逃げた方がいいんじゃない？ あなた一人なら逃げられるかもよ？」

余所見したアンコに向かって、またも左ストレートをぶち込もうとしたナツミだが体勢を崩しながらもアンコはそれを防いだ。無防備になったナツミにアンコが留めをさそうと腕を振りかぶる。

その刹那、予想だにしないことが起こった。だらりとして、全く動かさなかった右腕が突如として動きアンコを襲う。さすがのアンコも、油断もあつたせいでこれには反応すらできなかった。

ドーーーーーン！

ナツミの拳はアンコの顔面にクリーンヒットする。アンコの顔は

歪み、辺りに爆弾でも爆発したかのような轟音が響きわたった。その破壊力はさつきシキが繰り出した蹴りとは比べ物にならないものだった。あまりの威力にさつきシキがナツミの右腕に巻いた包帯がわりの服は吹き飛んでいる。

これほどの攻撃ならアンコは立ち上がれないだろう。包帯が解けた右腕は今度こそ動かすことすらできなくなったみたいで、ナツミの右腕はだらりとさがり、その腕は赤に染まっていた。ナツミ自身の出血か、アンコからの出血か区別できなかったが、それはパンチの衝撃を物語っていた。

「死んでいる右腕で、まさかあそこまでのパンチができるなんてね」
渾身のアンコの攻撃もアンコに致命傷を与えるには至らなかった。アンコは頭部から出血していてぼろぼろながらもゆっくりと立ち上がった。その表情にはさつきまでとは桁違いの殺意が見える。今の一撃で怒りのボルテージが一気にあがったようだ。

「全くこんな姿、猫キチさんに見せたくないのに台無しだよ。さつき、万が一、猫キチさんに当たることを考えてちよつと力をセーブしたのが悪かったかな。でも残念だったね。猫キチさんが巻いてくれた包帯がなければ、私をやれていたのにね。それはお互いさまってところかな」

今度こそ抵抗できなくなったナツミにアンコはゆっくりと近づくと、どうやらさつきシキが巻いた包帯がクッションになってしまい、アンコの致命傷を防いでしまったようだ。

「やめてくれ！」

シキは必死の想いで叫んだ。

「あは、いいね。その表情も大好きだよ。猫キチさん」

アンコは一度だけ顔をシキに向けると、今度は油断すらないのか、隙を見せないよう一気にナツミのほうへ突っ込んで留めの一撃をくわえようとした。

その刹那、シキの世界が変わる。

あたりの音は静まり心臓の鼓動が妙に大きく聞こえ、アンコの動

きはほとんど止まっているようなスローモーションで見えた。全身の器官の動きがはつきりと捕らえられるような感覚にシキは陥り、体は勝手に動く。

アンコの拳がナツミの顔面を捕らえる瞬間、シキのタックルがアンコを襲う。同時に先程の蹴り以上の衝撃がシキを襲うが、それほど痛みは感じなかった。

アンコは派手に吹き飛び、繁みに突っ込んだ。

先程は、シキ自身ですらどうやってアンコを蹴ったのか認識できなかったが、今度は自分の体がどうやって動いたのかはつきりわかった。ナツミが確実に殺されるとシキが思った瞬間、にやんだフルシューズは勝手に動いた。

「もう遅いよ！ シキが助けしてくれるのに賭けていたんだから。あんまりはらはらさせないでよね」

シキに守られたナツミは後ろからシキを軽く叩いて喝をいれた。

「僕頼みで戦っていたの？」

シキはこれがナツミの狙いだと聞いて驚いた。

「頼みというか。信じていたんだよ。これまでもシキの猫キチっぷりは私達もよく見てきたからね。今日のこれまでの戦いからも、私が窮地に陥ったら覚醒してくれると思ったんだ。とはいえ、あんまり遅いから私も怖かったよ」

「命を賭けてまでなんて無茶するんだよ」

シキには、ナツミがこんな策に自分の命を賭けられるのが信じられなかった。そういうあつと驚くような奇策はむしろマフユの専売特許じゃなかったのか。

「どっちにしても窮地だったしね。さっきは自分がどうやって蹴ったのかも分からなかったようだけど、今はどう？ 動き方はわかる？」

ナツミはシキに賭けるのは当然だったという口調でシキの様子を確認した。

「うん、なんとなくだけどイメージできるよ。さっきとは全然違う感覚だ」

「一瞬の覚醒だけでまた終わっちゃうんじゃないかと、それだけが心配だったんだけど、よかった。私達はこんな状態だから頼んだよ、シキ」

ナツミは全てをシキに託す。

「まさか、こんな短期間にここまで猫の動きをマスターしてしまおうとはね。もう言わなくてもわかりそうだけどイメージさえできれば思い通りに動けるはずよ。あなたがクリームを助けなさい」

いつの間にか立ち上がって、シキの元に来たマフユも励ましの言葉を掛けた。

「ああ、任せといて」

まさか、自分からこんなセリフができること、二人からこんな言葉を掛けられるような展開になることを、シキは想像すらしていなかったがとにかくもうシキ自身でやるしかない。とにかくクリームを助けること。それが三人の共通意思だ。

だが、シキにはこの場でやりたいことがもうひとつあった。

シキ達が話している間、アンコの突っ込んだ繁みからはまだ土埃が舞っていたがその切れ目からようやくアンコがでてくる。シキの蹴り、ナツミのパンチ、シキのタックルと三度の強烈な直撃を食らいながらもアンコはまだ戦えるようだった。この強烈なタフさと忍耐力はどこからくるのだろうか。

「今のはすっごく効いたよ。猫キチさん。こんな衝撃はあの時以来にかにゃあ？」

アンコはぼろぼろになった服についた葉っぱを払いながら、シキに向けて笑顔を向けた。

「あの時？」

「私がここらへんで放浪しはじめた時に、猫キチさん、私のコンビで買った焼き鳥を私にくれたでしょう。猫キチさんは覚えていないと思うけどね」

アンコはシキのことを猫キチというほどシキのことを評価しているようだが、シキの猫キチっぷりはアンコの想像は超えていた。

というのも、シキはその時のことを覚えていた。というか、今までに会った全ての猫さんのことを覚えているし、エサをあげた猫さんのことなんか忘れるわけがなかった。まして、その猫さんとはそれからも近所で何回も会うことになったのだし、遠目から眺めていることだってあった。

「いや、覚えているよ。あの時はお前に引つかかれたんだよ。あれは痛かったなあ。おまけに焼き鳥までとられちゃうし」

そう、はつきり覚えていた。あの日は夜に小腹が空いて、コンビニで適当に買った焼き鳥を持って家に帰る途中で、新月の夜の暗闇に映える黒猫さんと遭遇したんだ。野良猫さんと遭遇したらどんな状況でもテンションが上がってしまう。もちろんその時もその例に漏れなかった。最初は遠目に黒猫さんを見ていたシキと、シキを見ていた黒猫さんだったが、シキはどうしても黒猫さんとお近づきになりたかった。

シキは買った焼き鳥のパックを開けると、そのうちの一本味付けが最も薄そうな串を選んで黒猫さんに見せた。黒猫さんは焼き鳥を見て一気に近づいてきたが、シキから一歩半程の距離を置いて止まった。遠目に焼き鳥を見ていたが、警戒心のほうが強いのかそれ以上近づかなかった。

そんな黒猫さんをおちよくるように、シキは焼き鳥を見せつけながら腕を右へ左へ振ると、黒猫さんの目も左右に振れた。そのうち黒猫さんは一緒に右手を動かして焼き鳥をとろうとするが、捕らえることはできない。シキはその様子を見て、串から一つ身を取ると黒猫さんのほうへ差し出した。そうになると、お腹が空いた野良猫さんというのは加減を知らない猫さんもある。黒猫さんは思いつき、右手を飛ばして肉を奪うと、同時にシキの手の皮も少しもっていかれた。

無事に獲物を奪った黒猫さんは、また少しシキから距離をとると焼き鳥の身を一回地面に置くとゆっくりと食べ始めた。電子レンジで温めたばかりだったのでまだ熱かったはずだが、少しずつ食べる様

子をシキは食べ終わるまでゆっくりじっくり見ていた。その間、切れた手の痛みなどはすっかり頭の中から消し飛んでいた。

その黒猫さんがアンコだったのだ。

「うわあ、嬉しいにやあ。覚えていてくれたんだ。私もあの焼き鳥の味はまだ覚えているよ。あの時、猫キチさんにもらった焼き鳥があったから私はあのコンビ二で働こうと思ったんだよ。あれから、何回も焼き鳥を食べる機会があったけれどあれよりおいしい焼き鳥はなかったにやあ」

アンコは今日一番の笑顔でシキに言ったが、その表情に不穏なものは一切ない弾ける笑顔だった。

「でも、それとこれとは話が別だ。クリームは返してもらおうよ」

シキはアンコに宣戦布告した。

「はあ、まさか猫キチさんとここでマジで戦うことになるなんてね。こうなったらまともに決着をつけるしかないのにかにや。私は猫キチさんのこともらうからね」

二人は同時に動いて戦いが始まった。

シキはにやんだフルシューズを完璧に使いこなして、人間では不可能な動きを体現し、その様は狩り中の猫さんである。同時に、先程のナツミ達の戦いを見るだけですぐに実践的な動きのイメージも吸収していたシキは、力の使い方をうまくセーブして緩めるところは緩めて、気を入れるところはいれて上手くアンコの動きに対応していた。

アンコはさっきのタックル一つでシキの能力に大よその予想がついていたので、最初から全力でシキにしかけていった。シキを傷つけたくないのがアンコの願いではあったが、こんな状況になってしまったのなら仕方がない。手加減などしていたら逆にアンコが一瞬でやられてしまう可能性があった。

そのアンコの猛攻は、覚醒したシキにとっても厳しく辛いものであった。同時に、シキが先のナツミ達とアンコの戦いでシキが想像していたこととはつきりとさせてくれた。

このアンコの動きはあの黒猫さんの動きと全く一緒なのだ。

クリームやナツミ達のように人に慣れている猫さんとは全く違う野良猫さんの野生の動きだった。だから、さっきシキはアンコの動きを捉えることができなかったのだ。全ての攻撃は、シキの指の皮をもぎとったあの魂のこもった攻撃と全く一緒なのだ。

その動きをシキがイメージするのは大変なことだった。シキは、飼い猫さんであろうと野良猫さんであろうと今まで猫さんのかわいい部分とか、いわゆる良い部分だけを見ようとしてきたからだ。でもシキが見ようとしなかった、認識しようとしなかっただけで、シキはそんな野良猫さんの野生の動きだつてきつちり見ていたはずなのだ。

あれだけ猫さんのことばかり考えてきたシキだ。飼い猫さんのクリームとトラだつて、トイレするときの姿だつて何度も見た。そんな隠れたイメージを想起できればアンコの動きも捉えられるはず。シキのこのイメージはぴたりとはまり、アンコの決死の猛攻を凌ぎ続けた。

こうなつてしまえば、さっきのナツミ達とアンコの戦いとは全く逆の結末が二人を待っていた。徐々に動きにキレがなくなったアンコは、反撃を開始したシキに段々と押され始めた。攻め手と受け手が次第に逆転していったこの戦いは、段々とその勝敗の天秤をシキへと傾けていった。

バシッ！

ついにシキの右足がアンコを捉える。先程と違つてお腹にもろにヒットという形にはならなかったが、ガードの上から腕をへし折らなばかりの蹴りがアンコの左半身を捉える。さっきの蹴りと違つて受ける備えのあったアンコはその蹴りの威力に任せるように体を飛ばすことで衝撃を上手く逃がしたが、結果として派手に吹き飛ばすことになった。

「猫キチさん、すごいね。まさかここまで強いとは思わなかったよ。今日のところは、とても敵わないからひとまず退散するね。ばいば

「い」

さっきの立場と逆になって、シキに敵わないと悟ったアニコはとっさに逃げに移った。シキはこの状況は予想できていなかったので、虚をつかれた。しかし考えてみれば、この行動も当然考えられる選択肢だったことにシキは気づかされた。野生の生き物は獲物を取ることも大事だが、自分が獲物にならないことはそれ以上に大事なことだ。だから敵わない相手ならあっさり逃げを選択するのだ。人間のように面子にこだわって最後まで戦うなんてことするはずないじゃないか。

「ナツミ、マフユ！追うぞ！」

アニコに出遅れたが、まだ肝心のクリームを取り返していなかった。シキ達の戦いの間に少しは回復したナツミとマフユが後を追うが、まだ十分に回復していなかった二人はシキからさらに遅れをとりに、実質シキ一人でアニコを追うはめになった。

かなり距離をとられたとはいえ、まだ今のシキの視力なら捉えられる範囲にアニコはいた。ここその事態にシキのにやんだフルシューズはトップスピードをはじき出した。今や音速をはるかにしのぎ、どこそのミサイル並のスピードで地と空を駆けるシキは、全力で逃げるアニコとの距離を徐々に詰めた。

「クリームは返してもらおうぞ！」

アニコを射程圏内に捉えてさらに一段、ギアをあげたシキは一気にマフユの懐に飛び込み、その右手につかまれていたクリームをひっぺがした。

だが、シキは迂闊だった。アニコはクリームをさっきまで背中に背負っていたはずなのに、わざわざ走りにくい右手にクリームを持ち替えたという事実気づかなければならなかったのだ。

「本当に猫キチなんだから。」

クリームを助け出した瞬間、アニコはささやいた。
どすっ

鈍い音がシキの胸に響いた。クリームを助け出した瞬間、シキが

ほっとした一瞬の油断をアンコに突かれた。シキがそれに気づいた瞬間、胸部には強烈な痛みが走った。胸にはアンコの鋭い爪が突き刺さっている。

「シキ、ごめんね。こうなったらあなただけを連れていくほうが手っ取り早いかと思って」

アンコはシキの手をとってシキを連れて行くつもりとするが、シキはあまりの激痛にその声も、手を握られたことも、認識することができない。

朦朧とする意識の中、シキは間近で光が輝くのを感じた。

今日は何度も目の前で光が輝くのを見たが、その中でも一際強く大きい光。

これまでの光は直視することができなかったが、何故かシキは目をつぶることなくそれをしっかりと直視することができた。その光はとても強かったのに、優しく、温かい。

光が収まり、意識が闇に落ちる刹那、シキは純白の閃光が煌めくのを見た気がした。

第六章 シキの夢（第一巻完結）（前書き）

2016/5/5 表示乱れていたなので微修正しました。

第六章 シキの夢（第一巻完結）

第六章 シキの夢

目が覚めるとシキは、毎朝見る天井を見ていた。

シキはまだクリームを助け出そうとしていた途中だったことを思い出して、今まで意識をなくしていたのが嘘だったかのように覚醒した。

「クリーム！」

シキは思わず叫んだ。クリームは無事なのだろうか。

「いきなりうるさいわね。やっと起きたのか、このご主人は。ほんとかうたらしているのだから」

シキが人生で聞いたこともない声が応えた。でも、シキはその声をどこかで聞いたことがある気もした。一体、誰だろうと疑問に思ったシキが、上体を起こすとベッドの脇には可愛い女の子が立っていた。

その女の子は、真っ白で綺麗な白髪を肩のあたりまでたなびかせていた。

シキより少し小さいその女の子の姿は、シキにはなぜか浮き世離れして見えたが、妙に引き寄せられる姿だ。極めつけはその目である。シキと目があつたその子の瞳は人間にはとても珍しいオッドアイだ。だが、猫さんのオッドアイは人間ほどには珍しくない。

「おはよう、シキ。気分はどう？」

その子がシキに微笑んで話しかける。

「お前、もしかしてクリームなのか？」

シキは、これまでの出来事を通じて猫さんが人間社会に人間として生活しているという事実を受け入れていた。この女の子の姿を見て、なにより両目に映える金色と銀色のオッドアイの瞳がクリーム

のものだし、猫キチのシキじゃなくてもわかる雰囲気があった。

「そういえば、この姿をシキが見るのは初めてだっけ？そう、私はクリームだよ。それで、体は大丈夫なの？シキ」

猫さんの姿で喋ってくる時（しゃべるといつても鳴いてくる時）と随分印象が違うが、やっぱりこの女の子はクリームだ。クリームといえば直情的に動く猫さんであったから、擬人化するともつと碎けたイメージの喋り方だったのだが、ここらへんは王女の品格だろうか。シキのもっているイメージとは随分違った。

「よかった。無事だっただね。クリーム」

何はともあれ無事でよかったとシキは安堵の表情で言った。今まで、気を失っている間も張りつめていたような気がするシキの神経は緊張が解けて、全身の力が一気に抜けた。すると体が再びベッドに落ちた。やっと気を抜いて休めることができるかと体全体が反応したかのようだった。

「ちょっと、ほんとに大丈夫なの？」

クリームが心配そうに、シキの顔を覗き込む。目と目が合うと自然と笑顔になった。

「大丈夫、大丈夫。ちょっと気が抜けちゃっただけだから。クリームが無事だと分かったら安心しちゃってさ」

クリームがあまりにも心配そうな表情をしているのでシキは慌てて弁明した。

「なによ。やっと起きたと思ったら随分とケロツとしちゃってさ。そんなに元気そうにされたら、ずっと看病していた私達が馬鹿らしくみえるじゃない。そんななら三日も寝てないで早く起きなさいよー！」

するとクリームが突然ツンツンになった。化けの皮が剥がれたような豹変ぶりだが、こちらのほうがクリームらしくて、シキにはこっちのクリームのほうが救世主っぽいクリームより、自然体に見えるてよく思えた。

「僕は三日も寝ていたのか？」

そんなに重症だったのだろうか？ アンコに思いきり胸をえぐられたのは覚えているが、あっという間に意識が飛んでしまったのでその後の顛末が全く分からない。三日も寝ていたとするならちよつとしたタイムリープだ。

「そうだよ。すごい熱がでたり、うなされていたりで大変だったんだから。みんなにもちゃんと感謝しなさいよ」

「みんな？」

みんなとは誰のことだろうか？ 思わず、シキはクリームに聞いた。

「シキの足元で寝ているみんなのことだよ」

見るとシキの足元には樂園が広がっていた。トラと見知らぬ猫さん二匹が眠っていた。クリームがすぐわかったのと同様に、シキは二匹を見てそれがナツミとマフユだということがすぐ分かった。人間としてあれほど付き合つて、あの戦いを共に戦った戦友の二人なのだから、シキが分かつてても不思議ではない。猫さんと人では種が違うのだから、当然見た目が全く違うのだが二匹には人間のころと同じような雰囲気があった。人型と猫型の間で変身できるといっても少しは特徴を受け継ぐようだ。

ナツミは、全身綺麗な茶色の縞模様覆われた、なんとも行動的に見える猫さん。

マフユは、青みがかった毛に覆われた、神秘的な雰囲気漂わせる猫さん。

トラはいつものようにきれいに丸くなって眠っていた。マフユは体を横にしただらーとした体勢で、そのマフユを枕にするような仰向けの体勢でナツミは寝ていた。みんなすごく可愛くてシキは、その姿に心の芯から癒されるのを感じた。

「すごいぐっすり眠っているね。それじゃみんなで見病してくれたんだ。ありがとうね。もちろんクリームも」

シキは、眠っているみんなと今まさに看病してくれていたクリームにもお礼を言う。すると、クリームはしどろもどろになる。

「なによ。私じゃなくてみんなにお礼を言いなさいって言ったの。私は大したことしてないんだからいいの」

素直じゃないなあとしきは思った。しかしこれでこそクリームというものである。人同士で会話するのは初めてで、慣れてなかっただけで調子ができたのかな？

「お礼くらい素直にどういたしましてって言えたら可愛いのに」

シキは同情するようにクリームに言った。

「素直じゃなくて悪かったわね」

クリームは不機嫌そうに言った。

「別に僕はクリームがどれだけ僕を看病してくれたか。トラ達がどれだけ看病してくれたのか。わからないよ。でもさ、少しでも手を貸してくれたっていうならそれだけでお礼を言ってもいいじゃないそれに、僕は本当にクリームがいなくなっちゃうんじゃないかって怖かったんだ。だから、生きていてくれてありがとうって。その気持が一番強いんだ。本当にありがとう」

シキは、とびっきりの笑顔でクリームに感謝した。

「よくそんなこと素面で言えるわね。恥ずかしいを通り越して呆れるわね」

クリームはくすくすと笑ってシキのセリフを流した。もうちょっとクリームをからかってみたい気持ちもシキにはあったが、それ以上にクリームと話したいことがシキには山ほどあった。

「いや、ほんとみんな無事だったみたいでよかったよ。あの後、アノコとの戦いは一体どうなったの？」

シキは特に気になっていることをクリームに聞いた。

「みんな無事？」

笑っていたクリームが突然厳しい表情になって、怒ったように言う。シキには何がクリームの気に障ったのか全く分からなかった。「見た感じ、誰も怪我とかしていないみたいだし元気に見えるけど誰か調子が悪いの？」トラも、ナツミも、マフユも元気に見えるよ」

三匹ともすやすやと眠っていて、普通の猫さんの日常を謳歌し

ているようにみえた。ナツミも昼間はお昼寝の時間だと言っていたし、シキには何の問題もないように思えた。

「ナツミ達は、見た通り元気いっぱいよ。あなたのお守りで疲れているかもしれないけれど、それだって元気だからできることだしね」

クリームは、はつきり怒ったように言った。

「じゃあ、お前もしかしてどこか怪我しているのか？」

シキは改めて心配になって聞いた。

「はあ？　なんで私が怪我しなきゃいけないの？」

「なんでって、捕まっていたのはクリームじゃないか。アソコになにかひどいことされたんじゃないかと」

シキは、クリームのよくわからない反応にしどろもどろになった。

「あのねえ。シキを助けたのは誰だと思っているの？　そりゃあ、寝込みをいつの間にもやら連れ去られていてむかむかさせられたけど、私は特に何もされてはいいわよ」

やはり、クリームも無事だったみたいだ。でも、こうなると誰が怪我をしたのか全く分からなかった。

「いや、僕が気を失ってから何が起こったの分からないからさ。あの後、何があっただんだ？」

シキはなんとか間を繋げようと、言葉を紡ぐ。クリームは何も答えなかった。あまりに怒って何も言えないようだった。

「いい加減にしろ！　そうやってシキは、他の猫の心配ばかりしてあなた以外は誰も怪我なんかしていないわよ。なんで、今話した中に自分のことが全く入っていないのよ。シキが私を助けにあんなところまで追っかけてきてくれてそれは嬉しかったよ。でも、それであなたが死んだらどうなるの？　残される私達の気持ちを考えたことあるの？」

クリームは、溜まった鬱憤を晴らすように一気に爆発する。あまりの形相に今度はシキが黙る番だった。

「いつもいつもあなたはそう。私達、猫のことばかり優先に考えて

自分のことは後回し。自分が幸せであろうっていう気はないの？

人間は周りの人のことばかり考えて、周りの目ばかり気にして。そういうのやめてよ。シキは猫のことを大好きならその猫みたいに生きたらいいじゃない。シズカはいつもそうだよ。シキの生き方は正直見ていられないよ」

クリームの声は段々と沈んでいき、怒っているのか悲しんでいるのか分からないような声色になった。

「クリームにそんな風に心配させたのは正直悪かったよ。でも、僕は別に自分のことを後回しにして生きているつもりはないよ」

シキは確かにクリームを助けようと必死だったけど、自分のことをないがしろにしたつもりはなかった。むしろクリームが無事であれば、それだけで嬉しかったのだから自分のためにも行動したのだ。「私はナツミ達から聞いて全部知っているんだからね。全く……、自覚がないっていうのが一番困るのよ」

クリームはシキの鈍感っぷりに呆れているようだった。

「どういうことだよ。僕にも分かるように言ってくれないか」

残念ながら、クリームの思うとおりにはシキは鈍感だった。

「にゃんダフルシューズがどういうものかはマフユから聞いた？」

クリームはシキに問いかけるが、シキにはその質問の真意が分からなかった。

「少しだけ聞いたよ。人に化けた猫さんが人間の姿でも猫さんの動きが再現できるように、マフユが開発した靴なんでしょう？ 最初見た目が最悪で、何履かされるんだよって思ったけど、この靴のおかげで助かったよ」

「そうよ。でもシキは猫じゃないでしょう。じゃあなんでシキはシューズが使えたの？」

クリームは当然シキよりシューズについて詳しいだろうに、なんで今更こんなことを蒸し返す必要があるのだろうか？ シキのほうは聞きかじったばかりで、実際のところはその仕組みについてよく分かっていないのだが、聞いたばかりの話と自分の経験からわかっ

ていることをとりあえず答えた。

「猫さんじゃなくても猫さんのイメージができれば動けるんでしょ？ 元が猫さんなら簡単に使えるんだろっけど、人間の僕には最初は思う通り動けなくて大変だったよ」

ナツミ達の戦いを見て、最終的にはアンコともまともに戦えるようになって本当によかったと、シキは先の戦いを振り返る。

「ナツミ達から聞いたよ。それでやんだフルシューズを使って、ナツミを助けて私も助けたんだってね」

「そうだよ。二人ともなんとか助けられてよかったよ。二人が危ないと思つたら、勝手に体が動いたんだ。これもやんだフルシューズのおかげなのかな。結局、クリームには逆に助けられちゃったみたいけどさ。なんにせよ、みんな助かってよかった」

シキは二人を守れたことがなによりも誇らしかった。

「シキは私達を守ろうとする意志はしつかり持っていたみたいだね。やんだフルシューズの能力をフルに発揮しようと思つたら、猫の動きのイメージを持つことももちろん大切なんだけど、履いている人間の意思が靴の動きにも反映されるんだよ。あなたは自分の体がどうやって動いているのか説明できなくても、走ることも物をつかむこともできるでしょう？ 普通はにやんだフルシューズを使おうと思つたら動かし方のイメージと、動かすための具体的な目的が重要な」

「具体的な目的？」

シキが聞き返す。

「難しいことを言っているようだけど、実際のところ普段体を動かしているイメージと特に変わることはないわ。と言つても、人間が履いた場合どうなるのかはさっぱりわからないけどね。シューズを履いた人間はシキが初めてなのに、猫の動きをイメージしてあれだけの動き。瞠目に値するわね」

ナツミ達には猫さんの動きをイメージするようにとひたすら言われていたので、動かすための目的が必要という話は初めて聞いた。

「それは初耳だったよ。その目的意識っていうものの解釈がいまいちわからないんだけど、アッコとの戦いの中ではそれはかなり薄かったんじゃないかと思うんだ。アッコに最初に蹴りを入れたときなんかは自分がアッコを蹴れたことにすら驚くくらい、なんで動かせたのかわからなかったくらいなんだけど、それでも僕ははつきり目的をもってシューズを動かせたのかな？」

あの時、シキは自分では何もできず、ナツミは殺されるだろうとほとんど諦めたのだ。

「それは当然のことよ。大体、走るとか物をつかむとかならともかく、今、あなたがベッドに座っている体勢のふしぶしの体の動きには意思なんてほとんどない。目的意識っていうても、反射とか潜在意識のような感覚でいいのよ。あなたのやったアッコへの最初の蹴りは、熱湯に手を突っ込んだから手を引っ込めたとかいうような反射の感覚と似たようなものよ。危険というのを反射的に理解して体が反応した。シキも経験的によくあることでしょう」

「つまり、あの時僕はナツミがやられるとあきらめていたけれど、潜在意識ではナツミを助けたいと思ったからあんな蹴りが繰り出せたのかな？」

確かにそういう危機的な状況に陥ったとき、自分でも信じられないような動きが出来た経験がシキにもあった。シューズを扱うとはそういうことなのだろうか。

「たぶんね。この感覚は、作ったマフユに聞いてもメカニズムがよく分からないみたいだからなんとも言えないけど、とにかく、そういう意識があつたのは間違いないわ」

「意識すれば動けるのか。猫さんはすごいね。というかマフユが特にすごいのかな。そんな潜在意識までくみ取って動く道具が作れるなんて驚きだよ」

猫さんの文明には驚かされてばかりだが、シキは何度でも感心させられた。ここまでやられるとひどいカルチャーショックだった。百年先の人類でも潜在意識を把握して動く機械なんて作れない気が

する。人間が猫さんの文明に追いつくのにとれくらいかかるのだろうか？

「ここまでの話でシキは何か気づくことはない？」

クリームは話を一度打ち切ってシキに問いかけた。

「気づくことって……。それは気づくことばかりだよ。こんな経験まるつきり初めてだし何も知らなかったんだから」

相変わらずシキにはクリームが何を聞きたいのか分からない。

「ナツミや私のことを守ろうと思ったら、シキはシューズを完璧に扱うことができた。それはシキが私達を助けたいという意味をはっきり持っていたからよ。でもあなたは結局アンコに殺されるほどの致命傷を受けたのよ。なぜかわかる？」

クリームはそう言うと、黙り込んでシキに考えるよう促した。アンコに致命傷を受けたとき、シキはアンコの爪が突き刺さるまで反応することすらできなかった。気づいたら胸に腕が突き刺さっていてシキは間もなく意識を失った。あの時はクリームを助けられた直後で安心して油断していたから思わぬ反撃に気づくことができなかった。

では、最初にアンコの蹴りを食らった時はどうだろうか？

思い返してみても、シキはあの時、油断していたようには思えなかった。直前にナツミ達が奇襲を受けて危うくなった状況を目の当たりにしたのだから、油断などできるはずもないのだ。アンコがこちらに攻撃を仕掛けてくる可能性も十分考慮して、シキはしっかりマフユを見張っていたのだ。

にもかかわらず、シキはアンコの攻撃が見えていたのに、ほとんど反応すらできずに蹴りを食らった。状況を振り返ってみると、この場面で避けられなかったのは確かにシキにとっても不可解だった。もしかしてクリームを助けたときと同じように、ナツミがアンコの攻撃を食らっても無事だったことがわかって、安堵してしまったのだろうか？　そういう潜在意識があったのだろうか？

「なんでシューズが上手く使えなかったのかわからないけど、アン

コから二回攻撃を食らった時は、どちらもナツミとクリームを助けた直後だったから、油断していたのかもしれない。それで避けられなかったんだと思う」

「最初にナツミから蹴りを食らった時もシキは油断していたの？ ナツミから聞いた話では、その時はアンコが襲ってくる可能性に十分気づいていたみたいじゃない？ 違う？」

クリームはシキも気づいていたことに鋭く突っ込みをいれた。

「確かにそうなんだよ。アンコのことを十分警戒していたし、攻撃されたときもしっかり見えていたのに、肝心の体が動いてくれなかったんだ。避けようとしたのにシューズは動いてくれなくて猫さんから見たら鈍足な動きしかできなかったから、まともにアンコの蹴りを食らっちゃったんだ。やっぱりまだシューズが使いこなせていないから動けなかったのかな？」

「いいえ。シキはシューズを使いこなしていたのよ。シューズはシキの意思通りに動いた。そうじゃなきゃ、あんな動きできないよ。つまり、シキはその時避けようとする意識がなかったのよ。だからシューズは避けようとしなかった。マフユ達とも話し合ってみんな同意見になったわ。それが真相」

「そんな馬鹿な。最後クリームを助ける時に食らった一撃はともかく、最初に食らった一撃は避けようとしたんだ。あんな攻撃に気づいていたら回避したいに決まっているだろう」

シキにとって、クリームの話は自身の経験や意思と釣り合わないように思えた。

「シキ……。あなたが攻撃を認識していたか、いなかったかなんて関係ないのよ」

クリームは今更、訳が分からない話をする。シキは思った。

「認識していなきゃ避けられるはずがないだろう。イメージの話を散々しておいてなんでその根底をくつがえすような話になるんだよ」

「シキ、潜在意識っていうものについて少し誤解しているみたいだけど、シューズがくみ取る潜在意識っていうのはシキが思っている

よりもつと深いものだよ。危ないと思つたから避けるんじゃない、危ないと思われるものは避ける。だからあなたが認識していなくても、その結果があなたの望む方向にいかないようなものならシューズは反応して避けてくれるんだよ。最初のアンコへの蹴りはその深い意識だけから反射的に繰り出されたものだよ」

なんとなくシキにもクリームが何を言いたいのか分かつてきた。

「じゃあ僕はアンコの攻撃を避けようとする意識がなかったんじゃない、自分の身を守ろうとする意識がなかったって言いたいのか？」

シキ自身受け入れがたい話ではあったが、クリームの話の要旨を把握するとそういうことになる。

「それが大体真実ね。身を守ろうとする意識がなかったって言うたら言い過ぎだけど、少なくとも私達を守ろうとする意識よりははるかに低かったから、シキは自分の身を守ろうとすることすらできなかった」

シキはようやくクリームの言いたいことが理解できた。クリームは、潜在的にシキが自分を守ろうとする意志が足りなかったことが気に入らないらしい。

「確かにそうかもしれないな」

クリームにここまで順序だてて説明されれば、シキ自身、妙に納得できることだった。

「何、すんなり納得してんのよ」

ここまで、また冷静に喋っていたクリームだったが、このシキの態度に若干怒りがぶり返してきたようだ。

「クリーム達には悪いけど納得しちゃってもしようがないよ。確かに僕の優先事項は潜在意識なんか関係なく、表の意識でもクリーム達だったんだからね」

シキは妙にすっきりした気分だった。アンコの蹴りを食らった理由もはつきりわかった。あの時、シキはナツミの無事をはつきりと確認したあとで、アンコの攻撃を避けようとした。優先事項がナツミだったんだから避けられるわけがない。道理でシューズは反応す

らしいわけだ。

「わかつていたわよ。シキがそういう奴だっていうのは。でもね。シキは本当に死んでいたんだよ。私が助けなきゃ今頃、天国か地獄暮らしだったのよ」

「それでもいいんだよ。僕が生きていてもクリーム達がいなかったら僕の人生つまらないからさ。そんな世界、生き地獄みたいなものだよ」

シキは間を置いてちよつと考え込む。

「でも、天国か地獄には猫さんはいるのかな？ いなかったらちよつと悲しいな」

「そんなの知らないわよ。冗談はやめろ」

クリームは相変わらず怒っていた。

「ごめん。でもクリームだって僕を命がけで助けてくれたんだからお互いさまだよ」

シキが指摘すると途端にクリームは動揺する。その雰囲気はシキが猫さんのクリームに必要以上にスキンシップをとったときに、抵抗するときの様子とまるで一緒だった。

「何、言ってるの？」

クリームは動揺を隠すように言ったが、シキにはばれられた。クリームは僕がアンコにやられてから全く記憶がないと思っただけで、やられたあとも少しだけ意識があっただけ。結局すぐ意識は失っちゃったけど、温かい眩い光と、白い閃光が動くのを見たよ。それ以外に誰もいないんだから当たり前だけど、あれがクリームだったんでしょ？」

今度はシキが種明かしをする番だったが、まだクリームには余裕があるようだ。

「だから私が助けたって言ったでしょう。ほんと世話のかかるご主人なんだから」

「でもさ、僕がクリームを助け出した時は、逆にクリームのほうは気を失っていたはずなんだよね。いつものようにクリームはかわい

い寝顔で力もはいつていないみたいだった」

寝顔はかわいいが、今のクリームはしかめっ面だった。とはいえ、しかめっ面もシキには可愛く見えた。

「なんで、私の寝顔を凝視しているのよ」

「まさか人になったクリームに対して、そんなことを告白する機会がくるとは思っていなかったけど、別に今更言わなくても僕がクリームを見ていることは知っていたでしょう？特に寝ている時でも呼びかければ、尻尾を振ってくれるところなんて最高にかわいいよ」

「人型になっても私が元々クリームだとわかっていたら容赦ないのね。人間相手だったらシキはそんなこと絶対言えないのに」

クリームはシキをかわいそうな眼で見た。

「その話は置いてさ。あるときクリームは気を失っていたんだよ。じゃあ意識的に変身して行動することはできないんだよ。つまりあの時なにかあったかかって言うところ。クリームは潜在的に僕を助きたいと思ってくれたから、シューズがクリームの潜在意識をくみ取って、クリームが認識しなくても僕を助けるように動いてくれたんだ」

クリームの足元には、今もしっかりシキとお揃いのじゃんダフルシューズがあった。

シキはさっきまで自分がどうシューズを扱ったのかもよく分かっていなかったし、クリームとの会話を経ても、今一つ自分がどう動いたかわかっていなかったが、クリームがどう行動したかについては自信を持って言えた。シキという人間はどこまで行っても猫さん本位で動く人間なのだ。

「自分のことはさっぱりくせに、私や猫のことならさげすまざるで心の中を読むかのような洞察力。本当に猫キチね」

クリームはシキの言っていることが合っていることを遠回しに認めた。

「僕は確かにこの戦いで命を捨てるような行動をとってしまったけれどお互い様だね。クリームも僕を守るために戦ってくれたんだか

らさ」

クリームが猫さんの姿でいるときから、シキはクリームにデレデレだったのでシキからちよっかいをかけることは日常茶飯事だ。それに対してクリームが、シキの行動に積極的に反応してくれることは稀だったので、シキはクリームが助けてくれたことを、自分にごく構ってくれたみたいでとても嬉しく思った。

「あのね。シキと私と一緒にしないでよ。あなたはアンコにやられただけれど、私は余裕で倒せたんだからね。戦える根拠も倒せる根拠もなかったあなたとは状況が全然違うの」

クリームの言葉を聞いて、とたんにシキはぴくりと反応した。ここまで極力触れないように努めてきたが、クリームは確かにアンコを倒したといった。あれだけのことを仕掛けてきたのだから、クリーム達が殺してしまってもおかしくないとは思っていた。

もちろん、シキはあの戦いでクリームを無事に助けることをもちろん第一に考えていた。

しかし甘いようだが、シキはアンコも助けたいとも思っていた。それがあの戦いの最中、シキが抱いたもう一つの願いだ。

アンコをあのような考えに陥らせてしまっていたのは自分だという自責の念もあったし、自分が猫さんを手にかけることに対する抵抗もあった。アンコを殺せばクリームを助けられるのだが、そうするとアンコを助けられない。この矛盾する二つの願いの中で、シキは戦いの最中もがいていた。

そうでなければ、アンコの逃亡を許すことなく留めもさせていたはずだ。シキがアンコの一撃を食らってしまったのはこの潜在意識のせいもあったのだろう。

「アンコはさ。あのあとどうなったの？」

シキは聞かずにはいられなかった。

「ああ、アンコならベランダにいるわよ」
「クリームはケロっとして答えた。」

「あらほんとだ。かわいい」

シキはつい本音が出た。見るといつもはクリームが居座っているベランダの縁で、黒猫さんが下界を睥睨していた。白猫さんがそこにも絵になったが、黒猫さんが居座るのもなかなかによく、シキは顔がにんまりするのを抑えられなかった。

「いや、なんでここにいるんだよ!？」

シキの潜在意識じゃないほうの意識がようやく追いついてきて、シキは思わず突っ込みをいれた。

「シキが意識がなくなった後、私がそこそこ痛めつけちゃったからね。アンコもほとんど動けなくなっていたから、シキのついでに治療してあげたのよ。勝手にこの部屋にいれちゃったけど、別にシキは気にしないでしょ？」

クリームは何が不思議なんだろうとぼけた顔をしていた。

「そういう問題じゃなくて、とにかくクリーム達はアンコを殺したりしようとはしなかったんだね？」

部屋に猫さんが来るのは大歓迎ではあるが、今。気になるのはクリーム達がアンコをどうしたのか。アンコはあの後どうなったのかである。

「シキはアンコのことも助けたかったんでしょ？ 私はそう思っていたからアンコのことを必要以上に傷つけようとは思わなかった。もっともあの黒いのがわざわざ高いモンプチに催眠剤仕込んで、私のことを連れ去ったと分かったときには殺してやるうかとも思ってたけど。今度から安いカリカリじゃなくてもっといいエサにしない」

シキ達は栄養バランスとかも考えてそれなりのエサをあげていたつもりだったのだが、クリームは結構不満だったらしい。と言っても、猫さんのエサの好みがある程度分かっても面と向かってその感想を聞くのは初めてだったから、今後気をつけないといけない。

「とりあえず丸く収められたんだね。よかった」

アンコもえらくやられたみたいだし、クリームも催眠剤を盛られたいが、みんなが無事だとわかって、ようやくシキにかかって

いた全ての重荷が解かれたような気がした。

「まだ収まってないよ。私達はとりあえずアンコに対して何もしていないだけで、今からどうするかわからない。アンコも守りたいと一番に考えていたのはシキだし、結局、この問題の中心にいるのもシキなのだから結論はあなたに任せようということにしたの。だから、アンコは部屋の外に隔離しているでしょう。まあとりあえずいれてあげようか」

クリームがベランダのカギに手をかけるとすぐに、黒猫さんがこちらを振り返り、ベランダの縁から飛び降りた。クリームが窓を横にスライドさせると、アンコはそれを後押しするように右足をねじ込むと、一気に体をいれてすごい勢いでシキの座っているベッドの上に飛び込んでくる。

黒猫さんはそのままシキの顔のほうへ来ると、シキに頬ずりしてきた。その可愛さときたらシキは危うくまた気絶するところだった。これがシキと死闘を演じたあのアンコなのだろうか。あまりの様子の違いにシキは驚きを隠せなかった。

「アンコ、お前も無事だったんだな。よかった」

シキはアンコに合わせるように頬ずりした。それに合わせてアンコもにゃーと鳴いた。

「おい、黒いの。離れなさい。あんまりシキと馴れ馴れしく接触するなよ。野良猫なんだから汚いでしよう」

クリームは露骨に不機嫌そうだった。

「なにになに？ 随分とぷりぷりしちゃって。もしかして妬いているの？ 恥ずかしがらないで、クリームも積極的にコミュニケーションをとればいいんだよ」

さっきまでにゃーと鳴いて猫をかぶっていたくせに、アンコはすぐにクリームに対して人語で反応した。本当に猫さんなのだから猫をかぶるとは言わないのだろうか？

「このドラ猫、調子に乗って！ また痛い目に合わせてやるるか」
クリームは顔を真っ赤にして怒った。この二匹は性格が正反対な

ので対面になるとすぐ喧嘩になりそうな組み合わせだとシキは思った。この光景が、少し微笑ましかった。

「にははは。ごめんね」。またおやつ貰いたいし、今日はこれくらいで我慢しとくね」

アンコは頬ずりをやめてシキから離れ際、クリームには見えないように片目でウインクした。

「今日は？」

クリームが凄みを効かせてアンコをにらんだ。

「今後もやらないように善処します」

素直にアンコはクリームに従う。でもさっきのウインクの様子を見ると、腹の中では何考えているか分からないなとシキは思った。

「まあいいわ。今はアンコとシキや私達は今後どう付き合っていくのかということよ。シキは、アンコのことを許すの？ シキが命ずるなら今すぐにこの黒いの仕留めちゃうよ」

クリームは話を切って、シキに真剣な眼差しを向けた。

「許すよ。だからクリーム達もアンコのことを見逃してあげてよ。と言うか、クリームも聞かなくても僕がこう答えるって分かっていたんでしよう。あの戦いの最中に、言わなくても僕のことを理解してくれたみたいでありがとう」

シキは、一匹の黒猫さんと一人の白猫さんに対してとびっきりの笑顔を向けた。黒猫さんは心底ほっとして、白猫さんは心底あきれているようだわ。

「ごめんね。猫キチさん」

アンコは短く反省の言葉を述べた。

「確かにわかっていたわね。それで今後どうするの？」

クリームは改めて問いかける。シキがアンコのことを許すのは分かっていたので、こちらのほうが本題だったようだ。

「僕はできるだけ、今までの関係が続けていきたいんだけどどうかな？ クリームはもちろんうちの飼い猫さんのままで、アンコは野良猫さんのままで。でもたまには遊びに来てよ。約束通りおやつも

今までよりいっぱいあげるからさ。アンコはそれじゃあだめかな？
戦いの最中、アンコには拒絶された提案を改めて切り出す。

「おやつがもらえるならいいよ。また、適当に遊びに来るね」

あれだけ拒絶された提案なのに、アンコはあっさりと従順に受け入れた。シキが寝ている間になにがあったというのだろうか。

「あくまでたまについてという意味よ。毎日来る気じゃないでしょうね」
クリームがアンコに釘を刺した。

「えー！ あんなに美味しいもの出しといてそれはないよ。胃袋を猫質にとっしておいておあずけなんて」

クリームの一言に従順だったアンコは動転した。

「アンコにはハルカの料理をあげたの。野良猫にはちょっと刺激が強すぎたかな」

クリームは足元でダダをこねるアンコをいなしながら、シキに説明する。そういうことなら納得である。ハルカの料理は人間にはまずいが猫さんには絶品らしい。この好みの違いはさすがのシキでも理解できそうになかったが、どの生物も食欲というのは恐ろしい。

「僕、ちよつとトイレにいつてくるよ」

二匹は食べ物をめぐって言い争いを始めて、シキの声も聞こえないようだった。みんなが元気だったのにほつとしたシキは先程から三日ぶりの生理現象に襲われ始めていたので、二匹の様子を見てベツドから降りて、トイレに行った。三日ぶりのトイレといっても特段変わったことはない。

シキが一階で飲み物を取ってきて二階に戻ると、シキと同じようにいつの間にか起きていたトラが足元にやってきた。

「トラもクリームと同じように喋れるんだよね？ しかも凄腕のポディーガードだって聞いたよ。今回は、なんで手を貸してくれなかったの？」

シキは足元のトラに合わせてしゃがみ込んで聞いた。

「もちろん喋れるし人間としての姿もあるよ。今回、手を貸さなかったのはシキになんとかしてほしかったんだよ。私が相手にできる

敵っていつのも限界があるからね。それでクリームを危険な目に合わせたのは誤算だったね。シキならあれくらいの相手なら圧倒できると思っていてそれは上手くいったんだけど、ここまで猫キチだったとはね。いつもあんな甘い相手だとは限らないよ。とは言え、アンコも無事に済んでしまおうというのは完全に私の予想外だったから、シキなりに上手くやったということなのかな。とりあえず今回はお疲れ様。あと、しゃべるのはこれが始めてだから、とりあえず言っとくけどこれからよろしくね。私のエサは魚もつと多めでよろしく」

言うだけ言つとトラはシキに尻尾を向けた。

「ああ、よろしくね。トラ」

シキはトラとそれ以上言葉をかわすこともなくあっさりとした会談だった。トラはもしかして、アンコ達との戦いの間に何かしていたのだろうか？

シキの猫さんへの洞察力をもつてしてもわからなかった。

そんなことより、トラの声はまるで大御所の声優がしゃべるかのようなきはきと凄みのある声で吸い込まれそうなものだった。あのトラのおしゃべり中、シキは黙って聞いているしかなかった。普通、人のおしゃべりなんて聞いていても集中力なんてどっか飛んでいきそうなものだが、トラの話は聞いているだけで集中力が吸い込まれるかのようにだった。とにかく、トラのエサの魚の量には気がつけようとシキは思った。

シキがトラを追って部屋に入ると、トラはすでにベッドの上に飛び乗って再び眠ろうとしていた。トラともまたこんな事件とかで関わることもあるのだろうか？ 猫社会にこうやって関わられたことはシキにとっても嬉しかったが、これから何があるのか前途多難である。

「クリーム、お前の大好きなチーズと、アンコ、焼き鳥持ってきたよ。」

シキは一階で飲み物のついでに、クリーム達にエサの準備をして

いた。さつき飲み物をとりに行ったとき、どういうわけかハルカが準備万端でエサの用意を整えていたのだ。なんで家に常備してあるチーズはともかく焼き鳥まであるのだろうか？ この母親は本当にわからない。

「さすがシキ！ 気が効くじゃん。あなたの世話でちょうどお腹空いていたんだよ」

「ありがとう。シキ！ ハルカの料理もいいけどやっぱり焼き鳥も捨てがたいよね」

アンのシキの呼び方がいつの間にもやら、猫キチさんからシキに変わっていた。エサを上げると二匹は待っていましたとばかりにがつがつと食べ始めた。

シキはその二匹の様子を微笑ましく見ながらベッドに座って、シズカが用意したジュースを飲んでいた。なんで二匹にはエサの準備があつてシキにはジュースしかないのか？ かなりおかしい状況ではあつたが、シキにとっては二匹が満足そうであればそれでよかったので、なにがおかしいのかすら気づかなかつた。

「いつも通りおいしかった。人型ですつといるのも困るしそろそろ猫に戻るね」

クリームはチーズを食べ終わると、温かい光を放つていつもの猫さんの姿に戻る。いつも通りの綺麗な白猫さんでいつも通りかわいい。綺麗なオッドアイも人型の時のそのものだ。クリームは前足をぐーっと伸ばして猫ストレッチをすると（猫ストレッチは寝起きにするものだと思っていたけど、人から戻ったときもやるのだろうか？）シキのベッドに飛び乗る。

シキは飛び乗ってきたクリームの両脇を捕まえると、ベッドの中にいれようとした。

「今日こそ一緒に寝ようよ。クリーム」

無理矢理寝かせようとするけれどやっぱり応じてはくれない。

「シキ、暑いし。こっちだって自由に寝たいんだからそれだけはやめてくれない」

クリームは露骨に嫌そうに言った。

「クリームがダメなら私が一緒に寝てあげようか？ シキ」

クリームを追ってベッドに飛び乗ってきたアンコは、逆に布団の中にはいるうと積極的だった。そんなアンコをクリームは鋭くいらんだ。シキはクリームが猫さんのときのほうが人の時より迫力がある気がした。

「冗談、冗談」

そう言っただけアンコは布団からでると、シキの右手側に移動して丸くなる。クリームは左手側で同じく両の手でもみもみと自分の寝床を整えると、気に入った体勢を見つけて眠り始めた。

先程から足元で眠っていたトラ、ナツミ、マフユと合わせて五匹のパラダイス。シキはこれが夢の世界なんじゃないかと思った。シキは、いつまでもその五匹の夢の世界を見ていたかったが、戦いのダメージがまだ残っていたせいで眠くなってきた。

でも、シキにはまだ夢が二つある。

クリームとの階段競争に勝つこと。

クリームと一緒にベッドの中で寝ること。

いや、シキにはもう一つ夢が増えた。

いつの日かクリームに「おにいちゃん」って呼んでもらうことだ。

(おしにゃい)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0132dh/>

猫さんの瞳に魅せられて

2017年7月22日13時52分発行